



埼玉県立史跡の博物館紀要 第8号

Contents

-
- 平成24年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告
－若王子古墳の確認調査(2)－ 岩田明広
-
- 平成25年度 埼玉古墳群範囲確認調査の報告 堀口智彦
-
- 二子山古墳の再整備について 佐藤康二
-
- 坂戸市終塚とその土橋をめぐって 杉崎茂樹
-
- いわゆる「踊る埴輪」の戦前の絵葉書から 水口由紀子
-
- 出土遺物を活用した出張授業の実践 西田真吾・小峰俊章
-
- 博物館における文化体験学習の性格
－さきたま古代体験の実践を手掛かりにして－ 向井隆盛

はじめに

埼玉県には、「さきたま」・「嵐山」の二つの「史跡の博物館」がございます。「さきたま史跡の博物館」は埼玉古墳群、「嵐山史跡の博物館」は比企城館跡群菅谷館跡の国指定史跡を擁しています。新たな博物館づくりを目指して、その特徴を活かしながら、様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま史跡の博物館」においては、埼玉古墳群の保存整備のほか、企画展「ハニワの世界」、テーマ展「縄文の不思議な世界」、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共催による最新出土品展「地中からのメッセージ」、「ほるたま展2015」などを開催し、埋蔵文化財の活用をとおして、わかりやすい考古学の情報発信に努めてまいりました。さらに、さきたま体験工房の運営や各種の体験学習事業・小学校での出前授業・さきたま講座などの事業をとおして親しみやすい博物館づくりに努めているところであります。

一方、「嵐山史跡の博物館」では企画展「道灌の時代」、巡回文化財展「比企のタイムカプセル」、ロビー展などを開催してまいりました。また、企画展関連シンポジウム・歴史講座・文化財めぐりなどの事業を実施し、親しみやすい中世史の情報発信に心がけているところでございます。

本誌は、職員が日ごろの調査研究を踏まえ、自己研鑽を努めた成果を発表したものです。本誌が各地の博物館・図書館等で広く活用され、多くの方々に史跡や考古・歴史資料をご理解いただくための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げると共に、今後ともより一層の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

埼玉県立さきたま史跡の博物館

埼玉県立嵐山史跡の博物館

埼玉県立史跡の博物館紀要

第 8 号

目 次

平成24年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

—若王子古墳の確認調査(2)— 岩田明広 (1)

平成25年度 埼玉古墳群範囲確認調査の報告 堀口智彦 (19)

二子山古墳の再整備について 佐藤康二 (35)

坂戸市終塚とその土橋をめぐって 杉崎茂樹 (49)

いわゆる「踊る埴輪」の戦前の絵葉書から 水口由紀子 (57)

出土遺物を活用した出張授業の実践 西田真吾・小峰俊章 (65)

博物館における文化体験学習の性格

—さきたま古代体験の実践を手掛かりにして— 向井隆盛 (73)

平成24年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

—若王子古墳の確認調査(2)—

岩田 明広

1 はじめに

埼玉県立さきたま史跡の博物館では、平成21年度から、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料とするため、「埼玉古墳群周辺確認調査」を実施してきた（第1図）。

平成21年度には古墳の所在の記録や伝承が残る埼玉古墳群南西側の水田域を調査し、当該地区に古墳が所在しないことを明らかにした（佐藤2011）。平成22年度には、昭和44年撮影の航空写真に、表層土壤の変色範囲（いわゆるソイルマーク）として写っていた円墳跡の調査を行い、変色範囲に一致して3基の円墳跡を確認した（これらには埼玉8～10号墳と名称を付した。佐藤2012）。

平成23年度には、戦後米軍が撮影した航空写真（第2図）のうち、埼玉古墳群東側約700mの水田域に写り込んでいる大形の前方後円形の土壤変色範囲について調査計画を立案した。その後、有識者等で構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に確認調査の実施について諮り承認されたため、当該箇所周辺の調査を「埼玉古墳群周辺確認調査」の一環として国庫補助事業で開始した。この位置は、かつて「若王子古墳」と呼称され、水田開拓のための埋立て土採取によって削平された古墳の所在推定地とほぼ一致している。隣接地には、若王子古墳同様に既に消失した大型円墳愛宕塚古墳が所在したといわれ、その東に近接した愛宕通遺跡では、発掘調査で内径10m程度の円墳跡3基が発見されている（瀧瀬1985）。近辺には同様に開拓で失われた古墳が複数あるといわれており（柳田1963）、若王子古墳を主墳に群集墳「若王子古墳群」を形成している。

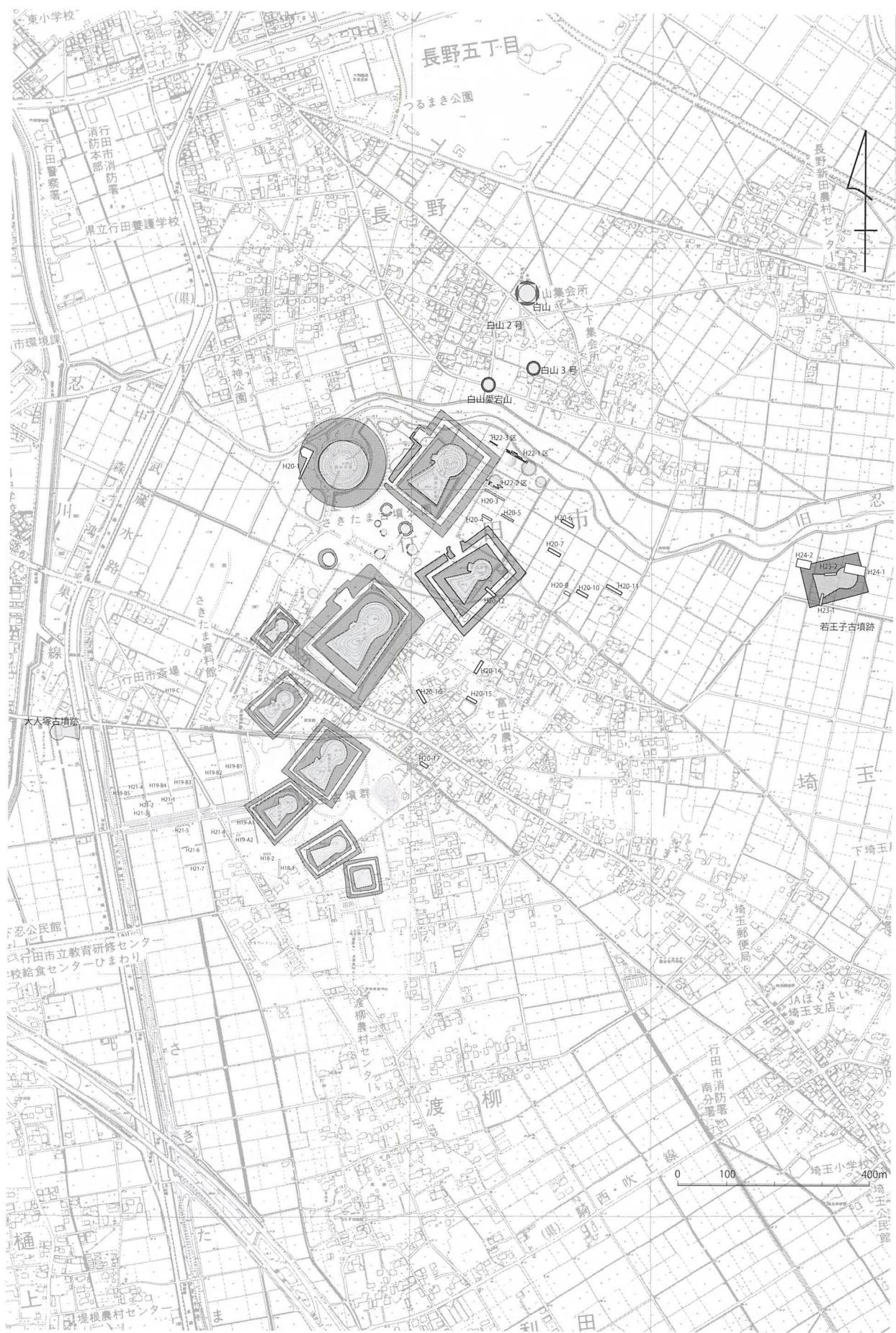
これらの古墳は、埼玉古墳群と埋没した小支谷を隔てていることが当館の平成20年度周辺確認調査でわかっており、現在のところ、東西1200m、南北500m程度の範囲に展開する埼玉古墳群とは異なるまとまりの古墳群であると認識している。

平成23年度調査では、旧来の知見及び土壤変色範囲の形状通りに大形前方後円墳「若王子古墳」が存在したことを明らかにしたが、具体的な古墳の規模や、わずか700mの距離に位置する埼玉古墳群との関係は明確になっていない。

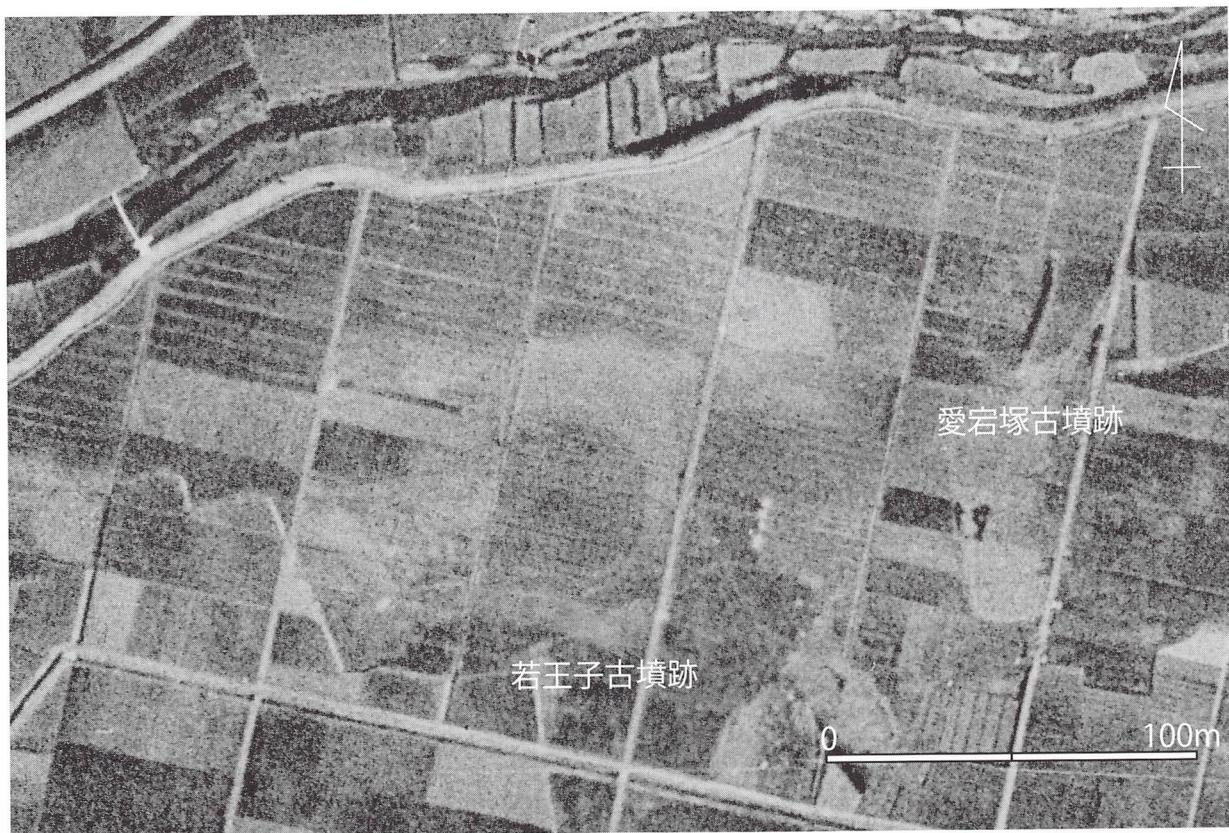
今回（平成24年度）の周辺確認調査は、若王子古墳の規模や形状を把握し、埼玉古墳群との関係性の把握のための基礎的な情報を得ることを目的とし、有識者で構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に、平成25年1月27日に諮問し、了承を得て実施した国庫補助事業だ。調査総面積は62.74m²である。

2 若王子古墳に関する旧来の知見

平成23年度の確認調査で対象としたかつての若王子古墳所在推定地は、埼玉古墳群史跡指定



第1図 周辺確認調査位置図



第2図 米軍撮影の航空写真に写った若王子古墳の土壤色調変異範囲



第3図 若王子古墳平成24年度試掘坑位置図

地内で最も東寄りに位置する將軍山古墳から東に約700mの位置にあたる。

現在の地勢は東流する旧忍川に沿って緩やかに東に傾斜する平坦地で、若王子古墳についても、一見指定範囲となっている埼玉古墳群と同一群を構成するようにみえる。しかし、古墳時代中期頃までは、利根川河流（本流・支流のいずれかは不明）が現在より西側で荒川方向に下っていたため、現在の行田市域には、利根川系に属する中小河川やかつて旧忍川北側に所在した小針沼のような湿地が多く分布していたと考えられる。現在に比べ微地形が発達していたと思われ、平成20年度の周辺確認調査の成果では、將軍山古墳の東200m程度の位置に窪地が入ることが推測される結果が得られている（西口・佐藤2010）。

若王子古墳は、地元の方々の証言から、食糧増産期の昭和9年頃、埼玉古墳群稻荷山古墳の前方部と同様に小針沼干拓のために削平されたことがわかっている。墳丘の形状がわかる記録には、昭和5年に撮影された航空写真があり、隣接する大形円墳の愛宕塚古墳とともに明瞭な大形前方後円墳の姿を残している（栗原1971）。

文献記録上の若王子古墳をみると、1835年（天保6）に洞李香齋が著わし、1840年（天保11）に岩崎長容が増補した『増補忍名所図会』に、若王子古墳石室が崩れ内部で刀装具等が発見されたことが記されている。1906年（明治39）には発掘調査が行われており、1936年（昭和11）の『史蹟埼玉』には「羨道南に向ひ、左右浮石を積み上げ長約20米（11間）奥に石櫛あり、後壁は長約3.6米（12尺）幅2.7米（9尺強）厚24厘（8寸）の緑泥片岩を以て囲み、左右両壁は浮石を積み粘土にて堅め、天井は長3.9米（十三尺）幅2.7米（九尺強）厚30cm（1尺）の緑泥片岩を以て蓋ひ、内部に縦3米（10尺）横1.3米（四尺）」の石棺を配置す。」と記されている（高木1936）。この折の出土遺物は、甲冑残片、馬具、刀剣残片、土器などとなっている。

石室の奥壁と天井石は、前玉神社に建立された日露戦没記念碑、忠魂碑として利用されている。これらの記録と残された石材の状況から、石室構造について関東の石舞台とされる巨大な横穴式石室で知られる若小玉古墳群の八幡山古墳との類似性に言及する考え方もある（田中・小川1984）。

小針沼干拓工事のため墳丘盛土が土取り掘削された1934年（昭和9）にも、土器と刀剣の残片が出土したとの記録がある。

旧若王子古墳の墳丘規模等については、先に紹介した『史蹟埼玉』に「この墳現今は墳址として水田となりしも、最近までは前方後円墳として大なるものであった、もと前方部に忍藩火薬庫が置かれてあったのだ、土人は焰硝庫山といった、前方部の高さ三米、後円部七.四米、長径九五米、横径前方部五六米、後円部四四米、周囲二八〇米あった。」と記されているが、近年、杉崎茂樹が古地図の地割や土地利用状況をもとに、主軸長の墳丘長約103m、後円部径約52m程度と推測した。杉崎は同時に、出土遺物から築造年代を須恵器型式のTK43～TK209型式併行期にあたると考えた（杉崎1986）。

出土遺物は、瀧瀬によってもTK209型式併行期とみられており、八幡山古墳に近い年代が与えられている（瀧瀬1985）。

戦後の米軍による空中写真から把握できる外見上の特徴では、若王子古墳は旧忍川の河流に沿って主軸を東北東にとるが、埼玉古墳群では北東を主体にしており、やや異なる印象を受け

る。とはいっても、中の山古墳とは類似の指向性をもっており、鉄砲山古墳や奥の山古墳等とも近い指向性を指向しているとみることもできる。行田市周辺の大型前方後円墳は旧利根川及び利根川支流の河流方向に沿った指向性を指向するものが多く、大半が南東から東北東に後円部を、北西から西南西に前方部を向いている。主軸方位の比較では、埼玉古墳群の特徴がより明瞭となるが、若王子古墳（群）と埼玉古墳群が完全に異なる古墳群であり、無関係だとするほどの根拠はない。また、米軍空中写真をみると、若王子古墳の周堀は盾形ではなく、長台形を呈しているように見え、埼玉古墳群との関係性を考慮せざるを得ない。

米軍空中写真の表層土壤変色範囲が、実際の古墳の大きさや形をどの程度反映しているか証明できていないが、仮に台形の周堀をもち、主軸長で100mほどの前方後円墳が所在していたとすると、埼玉古墳群等でも将軍山古墳を越え、鉄砲山古墳に次ぐ規模となる。埼玉古墳群を考える上で、若王子古墳の存在はきわめて重要だ。

3 平成23年度の「若王子古墳」確認調査成果概要

平成23年度実施の埼玉古墳群周辺確認調査成果についてはすでに報告されているが（佐藤2012）、今回の報告と合わせて若王子古墳の全体像を把握できる重要な情報であるため、以下に概要をまとめておく。

（1）調査期間

平成24年3月6日～平成24年3月22日のうち計7日

（2）調査箇所

遺跡名：包蔵地外

地番等：埼玉県行田市大字埼玉1968番地、1970番地、1971番地1・2

これは、前方後円形の墳丘の前方部南側角と、北側くびれ部にあたる。

（3）調査主体及び組織

調査主体 埼玉県立さきたま史跡の博物館

調査組織 館長 井上 肇

副館長 鈴木 進

主席学芸主幹 田中英司

史跡整備担当学芸主幹 関 義則

史跡整備担当主任学芸員 末木啓介

史跡整備担当主任学芸員 佐藤康二（調査担当者）

（4）調査方法

掘削及び埋め戻しは、すべて雇用作業員の人力で実施した。

平面測量は、GPS測量による平面図測量及び標高測量を委託事業として実施した。

断面測量は雇用作業員によって実施した。

(5) 調査成果の概要

前方後円形をなす土壤色調変異の痕跡から、前方後円形の墳丘が東側に後円部を向け、東西方向に伸びた状態で所在していた可能性が高いことがわかつていたため、平成23年度調査では、前方部墳丘跡該当箇所の南側角及び周堀外側立ち上がり付近を1区、北側くびれ部該当箇所を2区として調査区を設定した。

一部の畠地を除くと、大方が水田として利用されている場所であったため、掘削は現代水田作土・床、旧水田作土を除去し、場所によっては必要な深度までの掘削を行った。

1区では、後世の攪乱や盛土がはげしく、成果を得ることができなかつた。

2区では、墳丘くびれ部から前方部に該当する箇所で、墳丘盛土及び旧表土層削平下の関東ローム層中への掘り込み痕跡を確認した。関東ローム層上面の掘り込み部分との層界は明瞭で、関東ローム層の分布の有無で判断した。

平成23年度調査の結果は、米軍撮影の航空写真にみえる土壤色調変異痕跡が失われた若王子古墳の痕跡であることを示すもので、方形をなすようにみえる周堀相当箇所の土壤色調変異についても同様の見方が成り立つということだ。

同時に、次の点が課題となつた。

- ・ 古墳の遺存状況の把握
- ・ 墳丘形態・規模・主軸方位等の把握
- ・ 周堀の形態・規模の把握
- ・ 出土遺物の年代

4 平成24年度周辺確認調査報告

(1) 調査期間

平成25年2月21日、22日、25日、26日、27日、28日の計6日間

(2) 調査対象地

遺跡名：包蔵地外

地番等：埼玉県行田市大字埼玉1958番地、1959番地、1975番地1

(3) 調査主体及び組織

調査主体 埼玉県立さきたま史跡の博物館

調査組織	館長	浅野晴樹
	副館長	鈴木 進
	副館長兼主席学芸主幹	今井 宏
	史跡整備担当学芸主幹	関 義則
	史跡整備担当主任学芸員	岩田明広（調査担当者）
	史跡整備担当主任学芸員	佐藤康二

(4) 調査方法

①調査対象地・調査区

調査対象地は、米軍撮影の航空写真の土壤変色範囲の色調境界線を中心に、上記地番のとおり選定した。調査対象地内に、幅30cmから100cmの11箇所の長方形試掘坑（トレンチ）による調査区を設定した。前方部南側角と北側くびれ部相当箇所を調査した昨年度に対応し、周堀規模とその形状、墳丘規模とその形状等の全体像を把握しようとするものだ。試掘坑には個々にT 1～T 11の名称を付した。

②掘削及び埋め戻し

掘削及び埋め戻しは、すべて雇用作業員の人力で実施した。

③掘削深度

掘削深度については、土地所有者及び耕作者等の地権者の権利、特に農作業に支障を来さないよう配慮し、耕運機の運航及び田植え機の運転に問題が生じない深度（現在の水田作土層）までの掘削にとどめることとした。このため、基本的な掘削深度は最大で20cmとなった。ただし、T 4及びT 9では、現在の水田作土が深い部分があったため、試掘坑内的一部で20cmの深度を越えて掘削せざるを得なかった。ただし土地所有者との協議の通り床土上面までの掘削に止めた。最大深度は28cmであった。現在の水田作土が厚かった理由は、現代水田筆界付近等で、トラクターの陸揚げのための土壤捻転が生じたためと考えられる。

④遺構確認

現在の水田作土を掘削除去すると、酸化鉄が沈着した床土上面の層理面が露出する。この不整合面は、かつて若王子古墳の削平時に露出したいわゆる関東ローム層が露出したものか、その上に古墳削平後の圃場整備でシルト質細砂を盛土したものとなっていた。関東ローム層が露出した箇所では、この不整合面で若王子古墳の墳丘下部の未掘削部分と周堀境界を明確に確認することができた。

圃場整備で盛土された箇所については、その後の耕運機による耕作で関東ローム層のブロックと粒子が捲き上げられており、その平面的なおよその分布境界をもって周堀と墳丘下の未掘削部分との境界を把握した。

⑤測量

断面測量については、任意の農道に埋まった径70cm程度の河原石を基準にオートレベルを用いた水平測量を実施し、後に石のレベルを前年度の委託測量成果と整合させて標高に振り替えた。すべて雇用作業員による手実測とした。

平面測量については、個々の試掘坑毎に任意の測量ポイントを設けて手実測し、後に測量ポイントと試掘坑周囲の形状をG P Sによる委託測量により、座標値を確認した。

委託測量した座標値は世界測地系に基づくものとした。

⑥出土遺物の測量及び取り上げ

今回の調査では出土遺物は得られなかった。

(5) 調査対象地の使用承認等及び誤発掘について

①土地の使用承認

調査対象地の使用承認等については、事前に土地所有者及び耕作者等の地権者に有印文書による承認を得た。

②無許可の誤発掘について

行田市大字埼玉1958番地について、使用許可を受けずに調査を実施してしまった。

公園と現地の対応が明確でなかったため、その対応関係の判断を誤り、調査の承認を得ていた1959番地と取り違えて1958番地の調査を実施してしまったものだ。

土地所有者及び耕作者の抗議を受け、即座に事実関係の確認と謝罪及び事後処置の協議を実施した。協議に基づき、即日測量の上、耕作者の要請に基づき0.25級バックホウによる顛圧埋め戻しを実施した。

耕作者及び土地所有者には、大変な御迷惑と御心配をおかけした。本報告に記して改めて深くお詫びするものとしたい。

(6) 調査日誌

平成25年2月初旬 発掘調査対象地の選定及び土地所有者・地権者の調査承認手続きを実施

同 2月21日 1975番地1及び1958番地に試掘坑T1～T11を設定

T1～8掘削及び平面・断面測量・T4以外を写真撮影

作業員13名

同 2月22日 1958番地のT5～T8の誤発掘が発覚

土地所有者及び地権者に現地確認の後謝罪及び協議、即日協議内容に基づき0.25級バックホウを用いて顛圧・埋め戻しを実施

1959番地に試掘坑T10・11を、1975番地1にT9を設置し掘削開始

1975番地1のT1～T4及びT9の調査終了

作業員13名

同 2月25日 現地と測量図の付け合わせ及び修正作業を実施

作業員2名

同 2月26日 T1～T4, T9, T12の埋め戻し

片付けを終え、すべての作業を終了した

(7) 発掘調査の結果

墳丘は失われても地中に遺存すると思われる若王子古墳跡について、周堀形状を把握するために、前方部周堀外側立ち上がり付近にT1～T4及びT9の試掘坑を、また後円部主軸上の周堀外側立ち上がり付近にT6の試掘坑を設定した。さらに、墳丘規模を把握するために、後円部主軸上及び後円部円周北側にT5、T7、T8、T10、T11の試掘坑を設定した(第3図)。

調査地点周辺は、戦中に広域にわたり水田開拓のための埋め立て土採取が行われており、関東ローム層内でほぼ水平に削平され、その上に水田土壤が形成されていた。関東ローム層(シ

ルト質細砂、灰黄褐色10YR4/2) 上の水田土壌は1～2層あり、上層は現在の水田であった。以下に各試掘坑を場所ごとにまとめ、詳細を報告する（第4図）。

前方部周堀外側立ち上がり付近（T 1～4・T 9）

この付近はほぼ水平に削平された関東ローム層上に、現在の水田及び戦後期の2層の水田土壌が形成されていた。地権者との協議により、発掘調査は現在の水田作土の除去より下層は掘削しないこととなっていたため、現在の水田床土上面での遺構確認となった。

2層の水田土壌のうち、下層の水田の耕作が深く及んでしまっていた箇所では、下層から巻き上げられた土壌の分布状況で、埋没している遺構の状況を把握した。

なお、T 4・T 9では先述のとおり、一部で現在の水田作土が厚く、当初予定した20cmを越えて28cm弱の深さで床土となるため、該当箇所はこの層の上面まで掘削した箇所がある。

検出した遺構は、関東ローム層を掘り込んだ後に埋没した周堀覆土とみられる土壌で、関東ローム層との平面的な境界として検出し、各試掘坑を繋いでいくと、西北西から南南西に直線的に延びていることが把握できた。前方部北側堀跡の形状や特徴について詳細に記述するだけの情報は得られなかったが、前方部のおおまかな形状や規模計測のための基準的な資料を提供できたものと思われる。

なお、いずれの試掘坑も外側に二重目の堀がある場合の状況を把握できるほどの長さで設定することが困難であったため、単堀か2重堀かについて判断できる材料は得られなかった。

詳細な試掘坑の状況は、次の通りである。

T 1

幅1m、長さ6.8m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は6.8m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層にはさらに水田土壌が認められ、関東ローム層は露出しなかった。確認面では2箇所に現在の水田の耕作等にともなう掘り込み跡、もしくは耕作跡を発見したが、古墳関係の遺構は検出できなかった。

T 2

幅1m、長さ6.9m、深さ0.22mの平面長方形に掘削した。調査面積は6.9m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層にさらに水田土壌が認められたが、この土壌は薄く、下層の土壌が上層の水田土壌中に浮き出しており、堀覆土とみられる土壌と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。南北方向の試掘坑中央に、東北東一西南西方向に検出した。確認面は現在の水田床土であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

T 3

幅1m、長さ2.1m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は2.1m²である。T 2同様、現在の水田作土を取り去ったところ、下層にさらに水田土壌が認められたが、この土壌は薄く、下層の土壌が上層に浮き出しており、堀覆土とみられる土壌と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。南北方向の試掘坑中央に東南東一西北西方向に検出した。確認面は現代水田床土であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

T 4

幅0.45m、長さ3.3m、深さ0.29mの平面長方形に掘削した。調査面積は1.49m²である。一部で現在の水田作土が厚く予定していた掘削深度の20cmでは、遺構を確認できなかった。このため、該当部分で28cm程度まで掘削し、現在の水田床土表面で遺構確認を実施した。この面で堀覆土とみられる土壤と関東ローム層の平面的な境界を検出した。南北方向の試掘坑北側1/3程の位置に、東北東—西南西方向に検出した。

T 9

幅0.5m、長さ5.3m、深さ0.23mの平面長方形に掘削した。調査面積は2.65m²である。現在の水田作土を除去して行くと、関東ローム層が露出した。しかし、試掘坑内の北側と南側では作土層が厚くなっていた。このため、現在の水田作土のみを一部で28cm程度まで掘削することになった。耕運機の陸揚げ地点とみられ、作土が厚く形成されたものとみられる。他の試掘坑にみられた周堀覆土と思われる土壤を試掘坑南端に認めたが、他の試掘坑で検出した関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の平面的境界延長と異なる位置・方向となっていた。下層に埋没した近世以前の掘り込みや水田面への土壤堆積である可能性があり、遺構とは断定できなかった。

後円部主軸上の周堀外側立ち上がり付近（T 6）

この地点では、硬くしまった現在の水田作土下に、水田開拓により水平に削平された関東ローム層と周堀覆土が検出された。作土のしまりは農業用機械の搬出入によるものと思われる。表土は現在の水田作土の1層だけであった。東側の農道に近づくほど作土が厚くなっていた。

T 6の北側10mの位置にも試掘坑を設けようとしたが、事前に行なった小スコップによる15cm四方の掘削では、深さ20cmでは確認面に到達できる見込みがなかったため、地権者の水稻作業への影響を考慮し断念した。このため、後円部の周堀外側立ち上がりとみられる状況は、T 6の1箇所での確認となった。

詳細な試掘坑の調査状況は、次の通りである。

T 6

幅1m、長さ4.4m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は4.4m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層の土壤が浮き出しておらず、堀覆土とみられる土壤と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。東西方向の試掘坑の東側1/4程度の位置に、南北方向に確認した。確認面は、現在の水田床土上面であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

後円部主軸上及び後円部北側（T 5、T 7、T 8、T 10、T 11）

この付近は、水田開拓のため水平に削平された関東ローム層上に、非常に薄い現在の水田土壤が形成されつつある状態であった。

土地所有者及び地権者に発掘調査対象地としての許可を得ていない状態であったが、公図と現況との相違に気付かず調査を実施してしまった箇所を含む。誤発掘の試掘坑は既述のT 6の

ほかに、当該箇所のT 5、T 7、T 8である。

確認は地権者との協議に基づき、現在の水田の床土上面で実施した。当該箇所については、関東ローム層のうち、いわゆる関東ローム層が床土を形成しており、確認は容易であった。

検出した遺構は、関東ローム層とこれを掘り込んだ周堀跡の覆土とみられる土壤の平面的境界で、T 5の東西方向部分の中央付近から、T 7、T 8へと弧を描きつつ北西方向に向かい、T 5の北側水田の拡張区及びT 10、T 11で同じく弧を描きながら西に延びていた。出土遺物はなく、若王子古墳の年代を測る情報は得られなかった。

詳細な試掘坑の状況は、次の通りである。

T 5

後円部の形状を知るために設定したL字の最も長い試掘坑で、かつての墳丘主軸付近を水田筆界に沿って東西に幅1m、長さ25m、深さ0.18m（土が盛り上げてあった箇所のみ0.25m）の平面長方形に掘削し、ここから弧を描く後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界を北側へ追いかけて北側に直角に11m、さらに北側の水田に4m延長した。総延長は、40mに及ぶ。調査面積は25.0m²である。

現在の水田作土下は関東ローム層であった。その上面には現在の水田の床が形成されており、酸化鉄の沈着が認められた。試掘坑の東西方向部分で検出した後円部基部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の境界には、炭化したゴミ層が認められた。周堀の窪みが遺存していた時に、堀内にゴミの投棄が行われたものと思われる。南北方向部分では、水田作土下は平坦な関東ローム層となっており、遺構は検出できなかった。

北側の水田に設けた拡張部分で、水田作土下に後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界を検出したが、出土遺物は得られなかった。検出した土壤境界は、南東ー北西方向に延びていた。

T 7

T 5で検出した後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界の延長とその平面形を、具体的に把握するために設定した試掘坑である。幅1m、長さ3.6m、深さ0.17~0.2mの平面長方形に掘削した。遺構は、後円部基底部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤境界を試掘坑の東端で検出し、東西方向の試掘坑内に、北西ー南東方向に検出した。東端は土壤境界を明確に確認するため、南側の掘削範囲を拡大したものだ。調査面積は3.6m²である。

確認面は水田土壤化した関東ローム層で、表面には激しい凹凸と鉄斑の沈着が認められた。

T 8

T 7同様、後円部の具体的な形状を把握するために設定した。幅1m、長さ3.7m、深さ0.2mの平面長方形に掘削した。調査面積は3.7m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、後円部基底部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の平面的境界を把握することができた。東西方向の試掘坑の中央付近に、北西ー南東方向に検出した。確認面には多くの凹凸が認められた。

T 10

T11とともに後円部北側の平面形を確認するために設定した。幅1m、長さ4.6m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は4.6m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、後円部基底部をなすとみられる関東ローム層が露出し、周堀覆土とみられる土壌との平面的境界を把握することができた。南北方向の試掘坑の北端付近に、東西方向に検出した。関東ローム層上面には現在の水田の耕作痕である激しい凹凸と鉄斑の沈着を認めた。

T11

後円部北側の平面形を確認するために設定した。幅0.5m、長さ3m、深さ0.2mの平面長方形に掘削した。調査面積は1.5m²である。現在の水田作土を取り去ったところ、関東ローム層が露出し、後円部基底部と周堀覆土とみられる土壌の平面的境界を把握することができた。南北方向の試掘坑の中央やや南寄りに、北東—北西方向に検出した。確認面とした関東ローム層上面の状況はT10と同様である。

(8) 発掘調査の成果

平成23年度に実施した確認調査により、若王子古墳は今日も一定の深さの周堀を地中に遺しながら、航空写真で確認した地上の土壌色調変異範囲に所在していることが明らかになった。今回の調査では、その形状や規模がほぼ確定できた。既出の試掘坑の位置を示した第3図には、各試掘坑での土壌境界検出位置を基に、若王子古墳全体の形状を図示してある。

古墳の具体的な形状や規模で把握できた情報は、次のとおりである。

《若王子古墳の基礎情報》

(形状)

・墳形 前方後円墳

墳丘が失われているため、平面形での表現となるが、後円部は正円ではなく前方部側にやや伸びる馬蹄形に近い形状で、くびれが明瞭で長軸方向に長い前方部をもつ。埼玉古墳群中での山古墳や愛宕山古墳の墳丘の形状に近く、鉄砲山古墳にも類似している。6世紀後半から末頃の古墳の状況と考えられる。

・主軸 N-70°-E

・周堀 方形の单堀

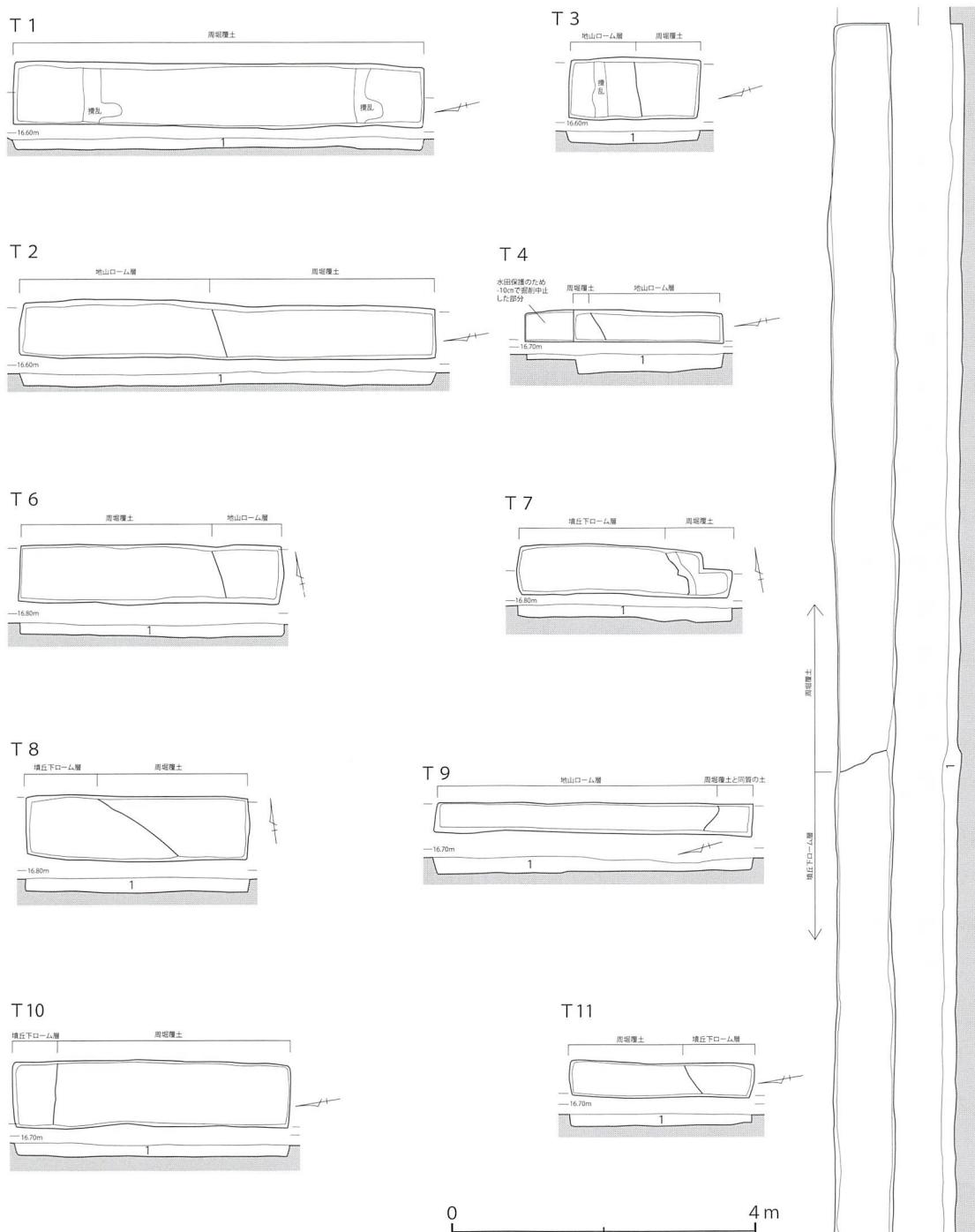
(規模)

・墳丘 主軸上で長さ92m、前方部長さ48m程度、後円部径43m、くびれ部幅30m、前方部幅53m

・周堀 後円部側幅77m、推測される長軸方向南側長さ140m、推測される長軸方向北側長さ140m、推測される前方部側幅95m

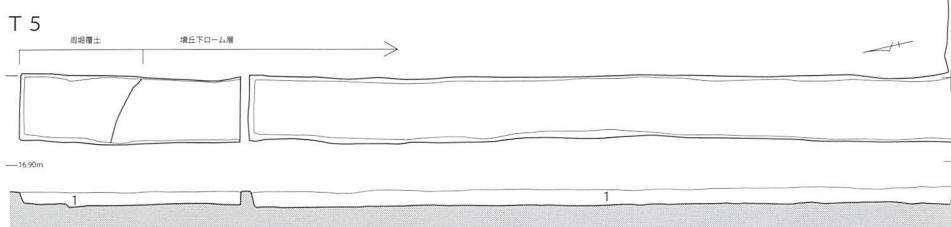
この数字は注意して扱わなければならない。今回把握した墳丘や周堀の規模は関東ローム層が一定程度削平された層準を確認面としたものだ。

佐藤の考察のとおり（佐藤2013）、埼玉古墳群内の小円墳、若王子古墳、愛宕通遺跡の小円墳の確認面の標高からみれば、周辺で微地形が発達するものの、埼玉古墳群から東の一帯の台



土層説明

- シルト質細砂層 褐色 (7.5YR4/4) 小円礫をわずかに、ローム粒を多く、稻根腐植を多く含む現代水田作土 脱鉄は進んでいない
- 周堀覆土 シルト質細砂 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ローム粒を少量、稻根腐植を多く含む現代水田床 表面に鉄斑が多く析出



第4図 試掘坑詳細図

地上面は、緩やかに東方向に傾斜する平坦面を構成するものと思われる。埼玉古墳群中の鉄砲山古墳では、現在の旧表土上面は、武藏野台地のⅣ層ローム対応層（いわゆる関東ローム層：小田1980）より75cm高いレベルとなっており、ローム層の削平状況を考慮すると、さらに削平による標高差は大きいとみるべきだ。

墳丘法尻から周堀上端までにテラスが存在するか否かも、おそらく確認するのは難しい状況であり、関東ローム層削平層準を確認面とした今回の規模は、古墳の厳密な規模を示すものとはいえない。また、鉄砲山古墳のように墳丘法面がそのまま周堀壁面と繋がる構築方法の場合、墳丘規模が大きくなる場合があり、周堀を掘削した上で再度計測する必要がある。

ただし、平成23年度及び今回の調査成果から、若王子古墳は埼玉古墳群中の將軍山古墳とほぼ同規模の古墳として築造されたものだと結論づけることは許されるだろう。

平成23年度調査、今回の平成24年度調査とも、出土遺物がなかったため、若王子古墳の築造年代は明らかにできない。しかし、これまで把握されている出土遺物からの年代は、いずれもTK43からTK209型式併行期と考えられており、当該地域における前方後円墳の終末時期に相当する。埼玉古墳群にきわめて近接した位置の大形古墳を含む古墳群として、若王子古墳及び若王子古墳群は重要な位置を占めている。

埼玉古墳群は、個々の大形古墳の位置的関係から、群内で系統性をもって築造されていると捉えられることが少なくない（太田2007、城倉2011、関2012）。しかし、その近接性や方形の周堀の存在などをもって、他の古墳群を単なる周辺古墳群として扱うだけでは、埼玉古墳群自体の出現・展開・終焉の意義は把握できないのではないだろうか。

一つのまとまりのある古墳群が、周辺もしくは広域に展開する古墳群集地の中で、いかにして大形の前方後円型墳墓群を展開させ終末を迎えたかを知るために、若王子古墳の情報は、欠かせないものの一つといえるだろう。

若王子古墳の確認調査は今回をもって一旦終了するが、今後も折をみて、若王子古墳群をはじめとした周辺古墳群の調査を実施することで、より立体的な埼玉地域の古墳時代後期の動態が明らかになっていくはずだ。

《引用・参考文献》

- 太田 博之 2007 「武藏北部の首長墓」『武藏と相模の古墳』 季刊考古学・別冊15
- 小田 静夫 1980 「武藏野台地の火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』 100.pp12-20
- 栗原 文藏 1971 「埼玉古墳群の古航空写真」『埼玉考古』 第9号 埼玉考古学会
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号
- 佐藤 康二 2012 「平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第6号
- 佐藤 康二 2013 「平成23年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告—若王子古墳の確認調査(1)—」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第7号
- 塩野 博 2003 「『北武八志』と清水雪翁の考古学—発掘された埼玉「若王子古墳」をめぐってー」『埼玉県立博物館紀要』 28
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会

- 城倉 正祥 2011 『北武藏の埴輪生産と埼玉古墳群』
- 杉崎 茂樹 1986 「行田市若王子古墳について」『古代』 第82号 早稲田大学考古学会
- 関 義則 2012 「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第6号
- 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』 埼玉村教育會
- 瀧瀬 芳之 1985 『愛宕通遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第51集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中正夫・小川良祐 1984 「各地域における最後の前方後円墳 東日本Ⅱ—埼玉古墳群周辺地域—」『古代学研究』 106 古代學研究會
- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号
- 柳田敏司他 1963 『古墳調査報告書』 第6編 北埼玉地区 埼玉県教育委員会



写真1 調査箇所のようす

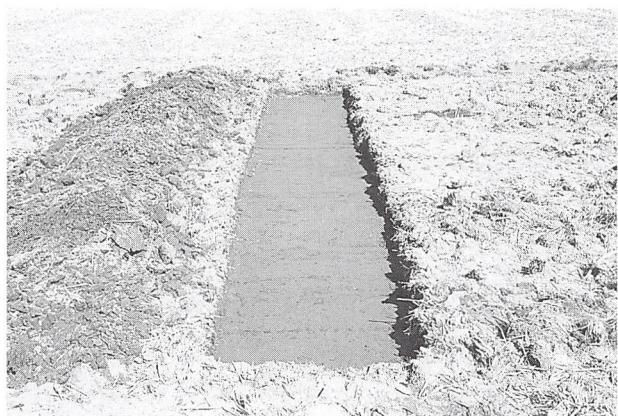


写真2 T 1 (遺構確認できず)



写真3 T 2 (奥にローム土が分布)

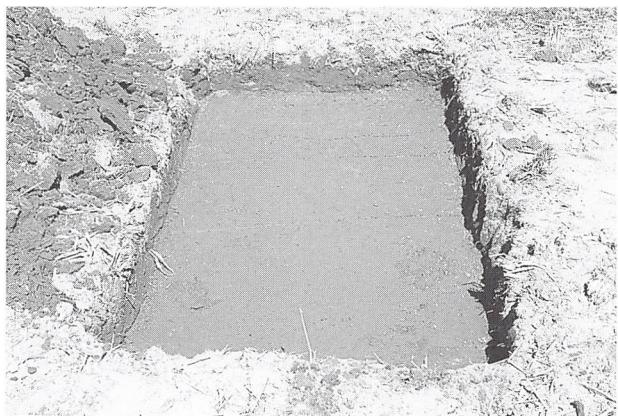


写真4 T 3 (奥にローム土が分布)

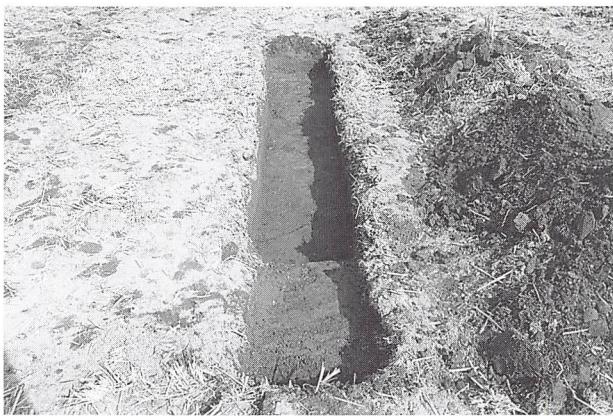


写真5 T 4 (奥にロームがみえる)

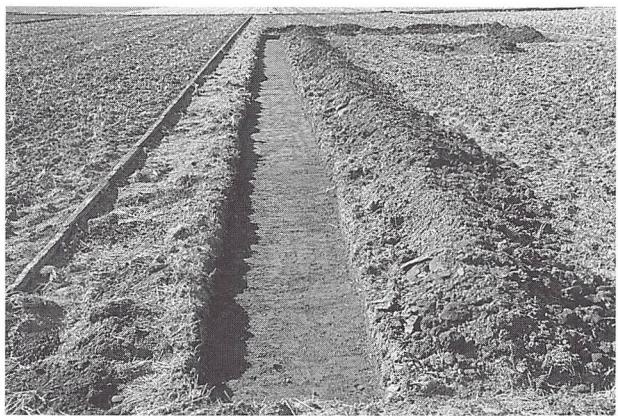


写真6 T 5 東西方向部分(奥にロームがみえる)

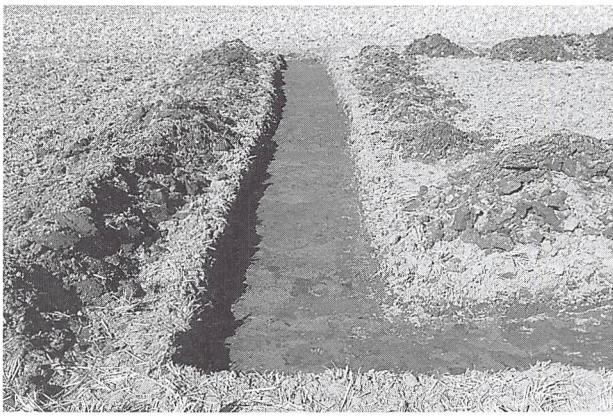


写真7 T 5 南北方向部分(全体にロームがみえる)

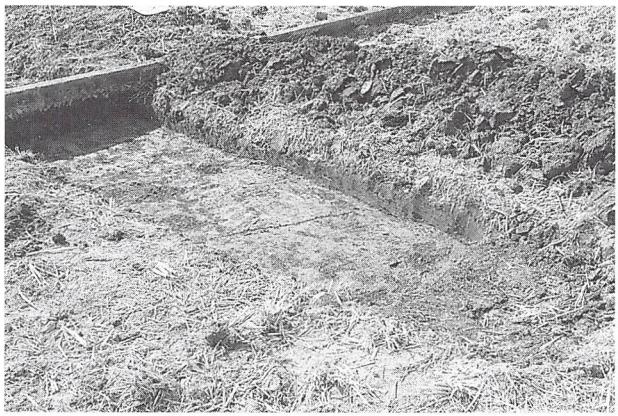


写真8 T 5 拡張部分 (左手にロームがみえる)

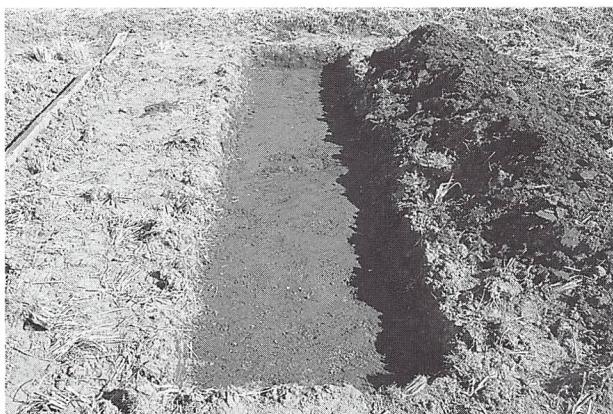


写真9 T 6 (奥にローム土が分布)

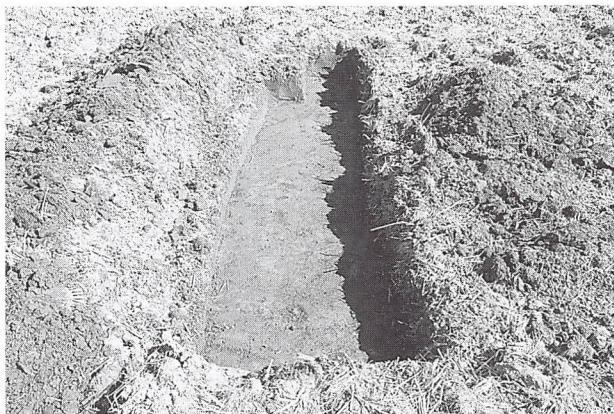


写真10 T 7 (手前にローム)

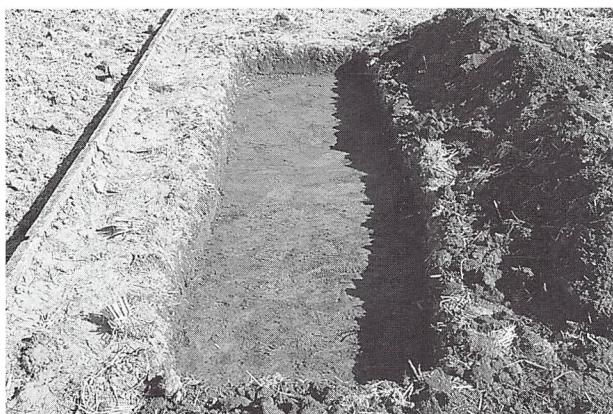


写真11 T 8 (手前にロームがみえる)

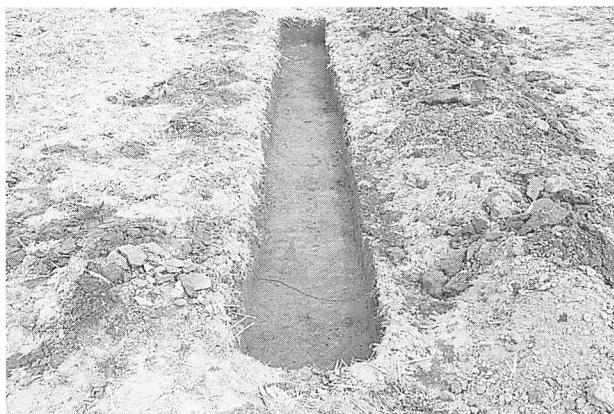


写真12 T 9 (手前が堀、奥がローム)

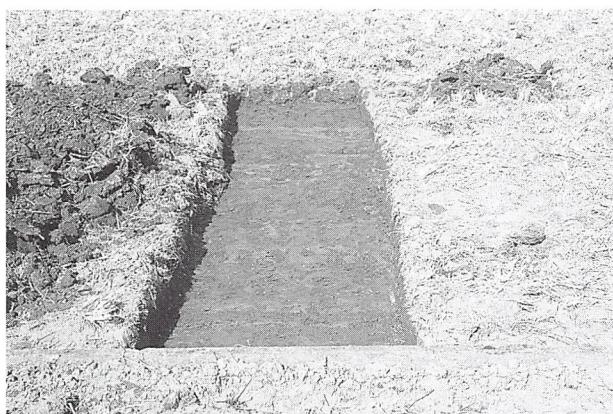


写真13 T 10 (奥に周堀覆土)

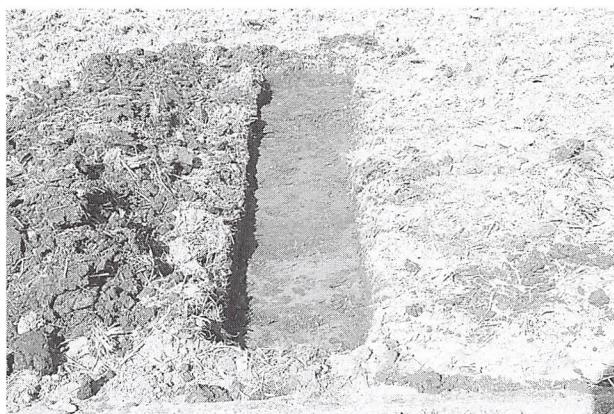


写真14 T 11 (手前がローム)



写真15 作業風景



写真16 作業風景



写真17 作業風景



写真18 作業風景



写真19 作業風景



写真20 若王子古墳墳丘のおよその形

平成25年度 埼玉古墳群範囲確認調査の報告

堀口智彦

1. これまでの確認調査と今回の目的（図1）

さきたま史跡の博物館では、史跡埼玉古墳群の指定範囲や価値、遺跡全体としての埼玉古墳群の範囲や性格を確認するため、平成19年度から確認調査を実施している。

平成19年度は、史跡指定範囲の南から南西側にかけての3地点でトレンチ調査を行った。史跡指定範囲の南端付近にあたる奥の山古墳の南西の2地点（H19-A、H19-B 1～5）では、H19-B 5で近世以降の溝を1条検出した。また、この2地点で確認した関東ローム層の標高から、台地が西に向かって下がっていき、奥の山古墳が築造される台地とは1m程度の高低差があることが分かった（西口2009）。

この周辺では、平成21年度にも古墳伝承地の確認などの目的で調査を行っている。この調査では、近現代の水路と考えられる溝と、古墳時代前期のものと思われる壺形土器片が出土している。また、全トレンチで確認した関東ローム層の標高と、発掘調査で確認した奥の山古墳下の関東ローム層の状況から（佐藤2014）、この地点は大型古墳が築造される台地の高い部分からは低くなるものの、連続したローム台地であることを再確認した（佐藤2011）。

平成20年度には、史跡指定範囲北半の東側を中心として調査を行った。調査の結果将軍山古墳東側の内堀・外堀を確認し、近世以降の溝を2条、8世紀以降の溝を1条検出した。近世以降の溝からは陶磁器が出土し、8世紀以降の溝からは南比企産の土師器坏・產地不明の平瓦片が出土している。また、関東ローム層の状況から、指定範囲北半の東側では、稻荷山古墳の東側で地形的に低くなる傾向があり、H20-9トレンチ付近に地形上の変換点があることが分かった。この変換点を境界にして、史跡指定範囲北半の東側には古墳がないと考えている（西口・佐藤2010）。

これまでの調査では古代から近世の遺構が検出されているが、古墳時代の遺構は見つかっていない。一方で、遺跡が立地する地形については、平成19年度から21年度の調査成果から史跡指定範囲の東西で地形の変換点が確認され、これが大型古墳の分布範囲の境界となっていると推測できる。ただし、地形の変換点の確認はローム層においてであり、古墳時代の状況は不明である。

また、これまで史跡指定範囲の南側で実施した調査では、用地買収が進んでいなかったことなどにより調査が可能な箇所が限られており、遺構の分布を見逃している可能性がある。このため、今回の調査では調査の空白域を埋め、古墳などの遺構の分布の具体的な状況を確認することを目的とし、過去に調査が行えなかった地点において調査を行った。

2. 調査の概要 一期間・位置・方法など

（1）期間

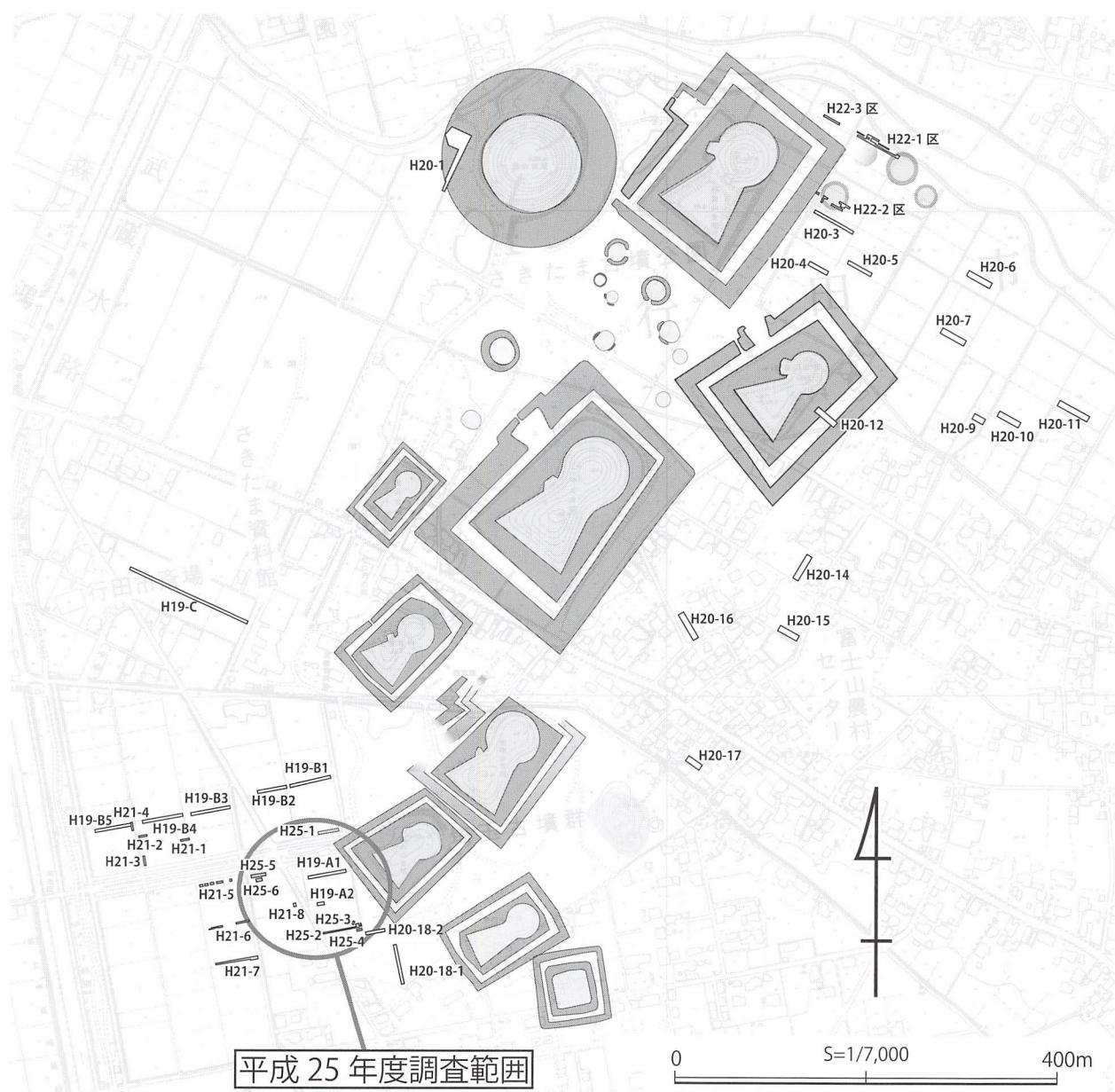


図 1 平成19年度から25年度の確認調査実施位置

平成26年2月6日から平成26年3月19日のうち11日間

(2月6日、7日、25日、26日、3月6日、7日、11日、12日、17日、18日、19日)

(2) 調査地の地番

埼玉県行田市大字渡柳1383-1、1384-1、1394、1416-1

(3) 調査主体と組織

調査主体：埼玉県立さきたま史跡の博物館

調査組織：館 長	浅野晴樹
副館長	鈴木 進



図2 奥の山古墳西側における確認調査実施箇所

主席学芸主幹

鈴木秀雄

史跡整備担当主任学芸員

岩田明広

史跡整備担当主任学芸員

佐藤康二

史跡整備担当学芸員

堀口智彦（調査担当者）

(4) 調査対象地について

埼玉古墳群の史跡指定範囲の南側（奥の山古墳南西）で、現況の地形では大型古墳が築造された台地の高い部分と、そこから南西に向けて落ち込む部分の境界付近にあたる。調査箇所については、史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成25年12月27日に承認を受けた。

(5) 調査方法

①調査区の設定箇所と目的（図2・3）

埼玉古墳群の南側では、前述のとおり平成19年度から平成21年度まで確認調査を行っている。今回の調査区は、これらの空白域であり、台地の高い部分と低い部分の両方の状況を確認できる3箇所に設定した。東側のトレンチ1から4は台地の高い部分、西側のトレンチ5・6は低い部分となる。

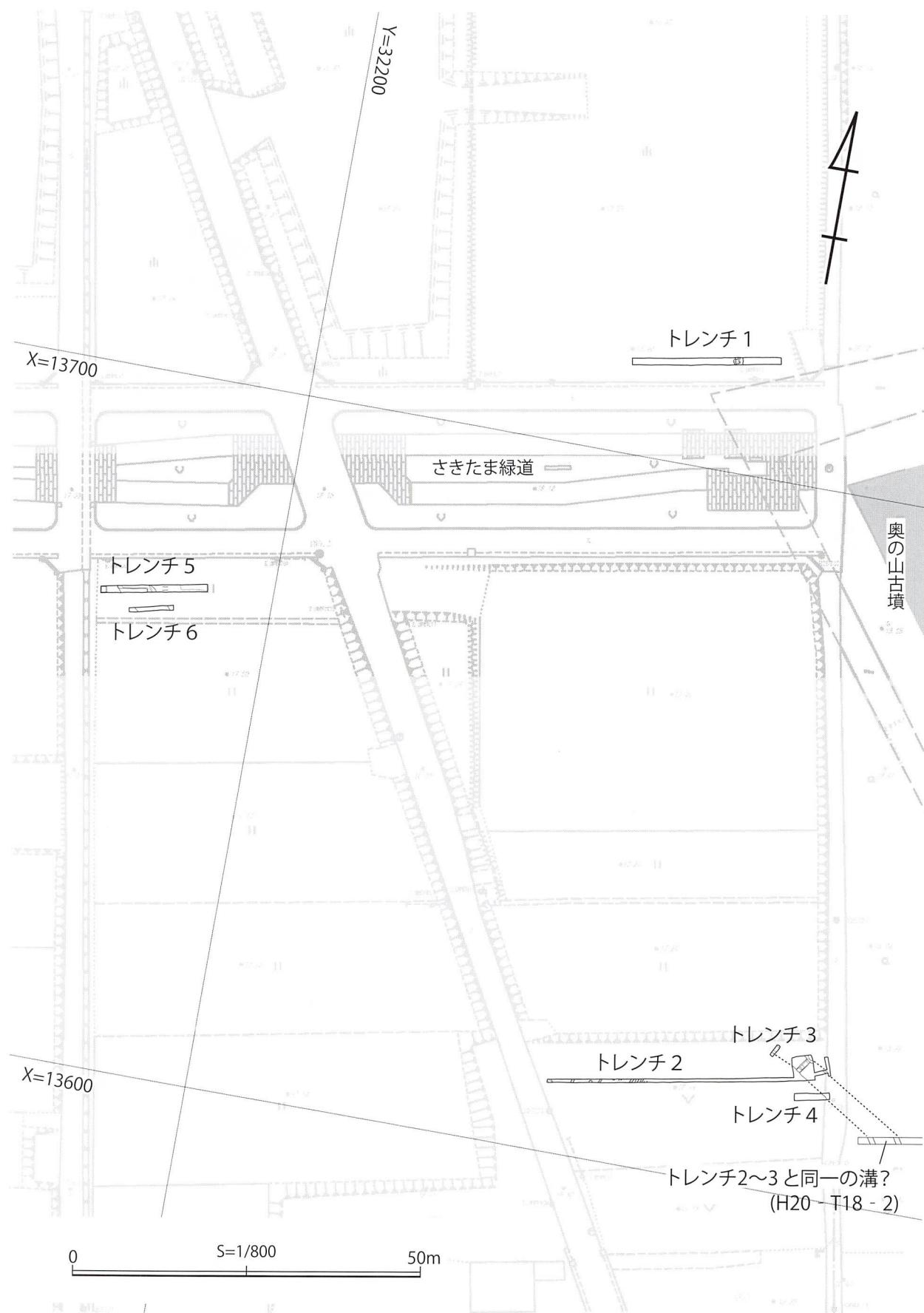


図3 平成25年度調査範囲の全測図

各調査区においては、遺構の有無と旧地形の状況を確認することを目的に、幅50cm～1mのトレンチでの調査を計画した。

②測量

測量にあたっては、行田県土整備事務所が公園用地の測量のため平成25年度に設置した3級、4級の基準点・水準点を使用した。既設の点から離れた地点については、任意の点にベンチマークを設置した。

平面図・断面図はトレンチの周囲に任意のポイントを設定し、それを基準に作成した。その後、GPSを用いたトレンチ周辺の測量を業務委託し、世界測地系による座標を定めている。

③遺構の掘削と遺物の取り上げ

今回の調査においては人力で掘削を行った。表土層から層序に従い掘削していく、遺構が確認できない場合は順次掘り下げて、ハードロームの上面まで掘削した。

また、検出した遺構は必要に応じ覆土の掘削を行った。出土した陶器片、須恵器片などの遺物は層位ごとに取り上げたが、確実に遺構に伴う遺物は出土していない。

(6) 調査日誌

2月6日 用具の準備。

トレンチ1、トレンチ2、トレンチ5を設定。

トレンチ1の掘削を開始する。作業員12名

2月7日 トレンチ1、トレンチ5の掘削。作業員11名

(2月8日から24日まで、大雪の影響により調査を実施できず)

2月25日 トレンチ2の掘削を開始。トレンチ1・5は冠水のため調査できず。

トレンチ2の東端で溝を検出する。サブトレンチを設ける。作業員13名

2月26日 トレンチ2・5の掘削。

トレンチ3・4を掘削し、断面図・平面図を作成する。作業員11名

(3月1日 調査担当者のみ作業。トレンチ1・5の遺構確認。)

3月6日 トレンチ1・2・5・6の掘削。

トレンチ3・4の写真撮影。作業員10名

3月7日 トレンチ5の掘削。トレンチ2の遺構確認。トレンチ6平面図作成。

トレンチ2の西端で溝群を確認する。作業員12名

3月11日 トレンチ2東端溝サブトレンチの断面図作成。トレンチ2壁面で溝群を確認。

トレンチ5の西端で深掘りを行う。G P S 測量（業務委託）を実施。

作業員2名

3月12日 トレンチ2東端溝周辺の写真撮影。

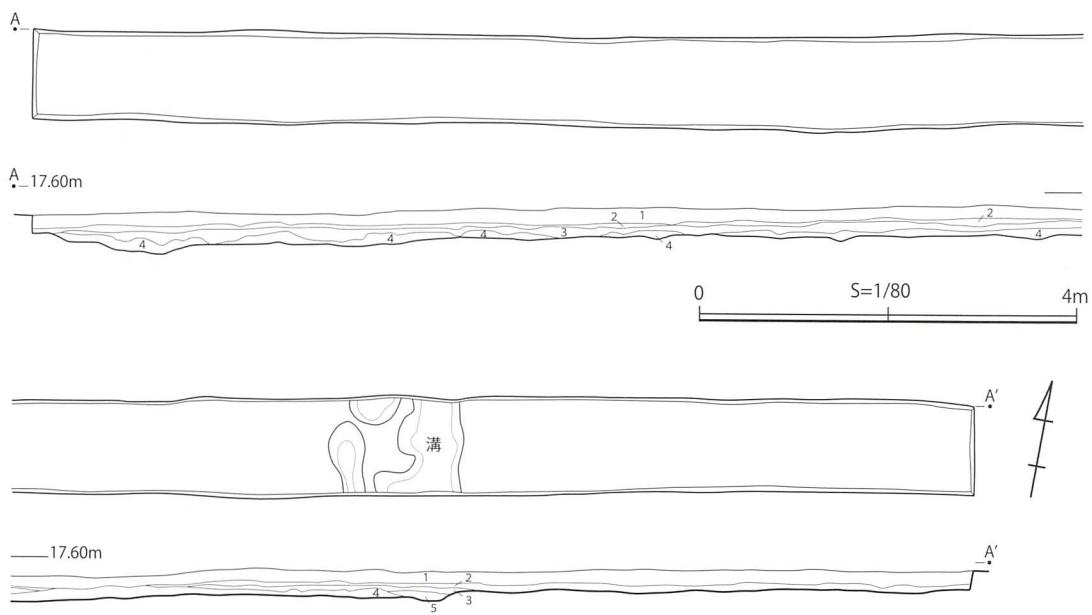
トレンチ5の掘削。作業員2名

3月17日 トレンチ1写真撮影。断面図・平面図を作成。

トレンチ5の掘削。作業員4名

3月18日 トレンチ2・5・6写真撮影。トレンチ1埋戻し。

トレンチ 1



トレンチ 1 土層注記

- | | | |
|---|--------------------|--|
| 1 | シルト質細砂 暗褐色10YR3/4 | ロームの細かな粒・As-Aを含む 現代の水田耕作土か |
| 2 | シルト質細砂 灰褐色10YR4/1 | ロームの小さなブロック・As-Aを含む 還元しやや青味がかる |
| 3 | シルト質細砂 黒褐色10YR3/2 | 鉄斑・マンガン粒・As-Aを含む |
| 4 | シルト質細砂 黒褐色10YR3/1 | ロームのブロック・マンガン粒・鉄斑含む 一部でハードロームの大きなブロックが黒褐色土と混ざる |
| 5 | シルト質細砂 極暗褐色10YR2/3 | ハードロームのブロックを含む 溝状遺構の覆土 |

図4 トレンチ1 断面図・平面図

トレンチ2・5断面図・平面図作成。作業員14名

3月19日 トレンチ2・5写真撮影補足、及び断面図・平面図作成。

トレンチ埋戻し。作業員13名

3. 平成25年度範囲確認調査の成果

(1) 各トレンチの成果

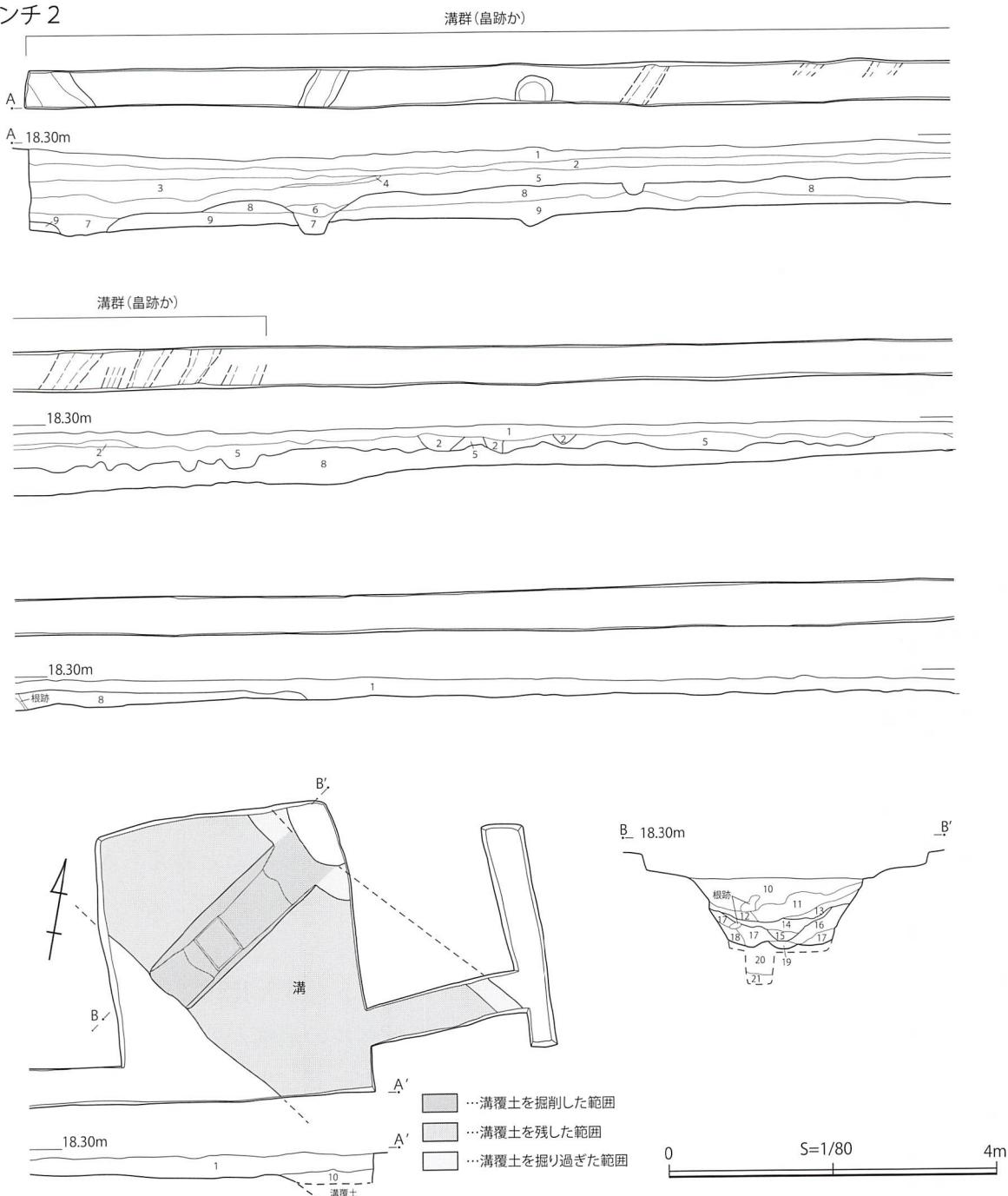
①トレンチ1（行田市大字渡柳1383-1、1384-1）（図4）

奥の山古墳の外堀に近く、外堀が検出される可能性も考えられた。トレンチは平面長方形で東西方向に設定し、幅1.0m、長さ21.5m、調査面積は21.5m²である。現地表面での標高は、東端で17.5m、西端で17.3mである。

トレンチ東側では0.2mほど掘り下げたところで、これまでの調査でロームと報告されている層と同一と考えられる黄褐色土の面に到達した。この層は硬くしまっており、細砂をやや多く含み粘性の強い細砂質シルトである。これまでの埼玉古墳群の調査や確認調査、今回のトレンチ5の層序から、いわゆる関東ローム層のハードロームと考えられる。検出レベルは西側に向けてわずかに深くなっている、西端では深さ約0.4mを測る。

土層は最上層の1層が現代の水田耕作土に相当し、2層は還元され灰褐色を呈する。その下

トレンチ 2



トレンチ 2 A - A' 土層注記

- | | | |
|-----------------|---------------|--|
| 1 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR4/3 | As-Aが含まれる 下層との境界が平坦になる |
| 2 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR5/3 | 1層に似るがやや明るい As-Aを含む 下層との境界が平坦になる |
| 3 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/4 | ロームの細かなブロックがわずかに入る As-Bを含む |
| 4 シルト質細砂 | 褐色10YR4/4 | 3層に似るが、客土と考えられる白色粘質土のブロックが入る |
| 5 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/4 | ロームの細かなブロックがわずかに入る As-Bを含む |
| 西側の溝群は全てこの層で埋まる | | |
| 6 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/3 | 西側溝群のうち、他より深く掘られた溝の覆土の上層 |
| 7 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/3 | 溝の覆土 6層の下層 壁際には崩落したと思われるハードロームのブロックが入る |
| 8 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/3 | 暗いオレンジ色の斑紋(鉄斑か)が入る FAと考えられる細かな白色粒がやや含まれる |
| 9 シルト質細砂 | 黒褐色10YR2/3 | トレンチ西側の溝群はこの層から掘り込まれている
8層より少ないが、暗いオレンジ色の斑紋が入る ソフトローム |

図 5 トレンチ 2 断面図・平面図

トレンチ2 B-B'土層注記

10 シルト質細砂 黒褐色 10YR2/3	ハードロームの細かなブロックを多く含む
11 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックをわずかに含む しまりない
12 シルト質細砂 黒褐色 10YR2/3	ハードロームの細かなブロックを多く含む しまりない 溝を掘りなおした後に崩落した土か
13 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/4	ハードロームのブロックを多く含む
14 シルト質細砂 黒褐色 10YR2/3	12層と同様、掘りなおした溝への崩落土と思われる
15 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックをまばらに含む 堀を掘りなおした後に堆積した客土か
16 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/4	ハードロームの細かなブロックを多く含む やや粒が粗く、シャリシャリしている ハードロームの細かなブロックをわずかに含み、一部は大きなブロックになる 壁面からの崩落土が含まれると考えられる 腐植土がまばらに混じる
17 細砂質シルト 黒褐色 10YR2/2	ハードロームのブロックを多く含む 左右の壁面からの崩落土
18 細砂質シルト 暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックを多く含む 壁面からの崩落土
19 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックを含む 溝の底に堆積した層で、硬くしまる
20 シルト質細砂 暗褐色 10YR3/3	溝の底を掘り抜き、深掘りを行った部分 黒色帯に対応するか
21 シルト質細砂 にぶい黄褐色 10YR4/3	深掘りした部分の下層 立川ロームのX層に対応するか 更に深くまで続くが掘削せず

層の3、4層には上層から浸透した鉄斑やマンガン粒がみられる。ハードロームの上層の1から5層内にはAs-Aのみが確認でき、As-Bなどは含まれていなかった。ソフトロームから中世頃までの堆積が失われ、近世頃以降の層のみが残っている状態であると考えられる。近世後期以前の溝状遺構を除き遺構は検出できなかったが、他に遺構の形成があったかは確認できなかった。

検出した溝状遺構は4層から掘りこまれ、As-Aを含む3層により埋まっていた。覆土最下層の5層にはAs-Aが含まれないことから、江戸時代後期以前に掘られたと考えられる。

②トレンチ2（行田市大字渡柳1394）（図5）

現在の標高は18.3m前後であり、トレンチ1、トレンチ5、6と比べて1mほど高くなっている。そのため、ほかの地点では削平されてしまったレベルの遺構が残存している可能性を考え、この地点にトレンチを設定した。平面は長方形を基本とし、東端において溝の延伸方向を確認するために拡張を行った。トレンチは、幅0.5m（拡張部3.5m）、長さ38.0m、深さ約0.2~1.0mで、調査面積は29.5m²である。

東側では表土層から0.2mほど掘り下げたところでハードロームに到達するが、西に向かうにつれてハードローム上面は深くなり、西端では約1.0mとなっている。これはトレンチ1と同じ傾向である。トレンチ西側では、ハードロームの上層にソフトローム（9層）、FAと考えられる火山灰を含む層（8層）を検出した。これらの層も同様に西側ほど検出面が深くなることから、現状はほぼ高低差がないが、古墳時代には東から西に向けて緩やかに落ち込んでいく地形であったことが確認できた。8層と9層はトレンチの中ほどから東側では見られなくなる。8層以上が古墳時代以降の層位となり、2層の下端が平坦であることから2層の堆積以前に削平されたものと考えられる。

遺構は、トレンチの東端で幅2mほどの溝、西側では幅20cm前後の小規模な溝群を確認した。東端の溝は上層が削平されており本来の掘り込み面が確認できないが、残存部の深さは約0.9

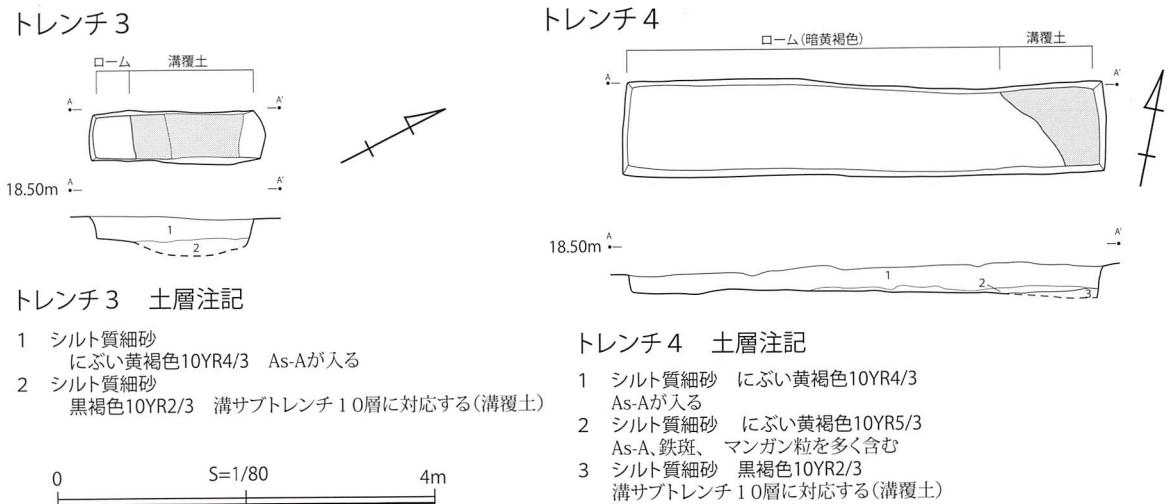


図6 トレンチ3・4 断面図・平面図

mである。上幅が約2.5m、底面の幅が1.3mであり、断面形は箱形になる。覆土は黒褐色土が主で、断面の土層からは、16・17層上面、14層上面の2回程度掘りなおされていると考えられる。覆土内から遺物は出土しなかった。

埼玉古墳群における堆積物の色調は褐色を主体としており、隣接する奥の山古墳の調査では、黒色や黒褐色の有機質土壤の堆積は、古墳時代の旧表土や、周堀覆土のAs-Bを含む層より下層までに限定されることを確認した（佐藤2014）。ここから溝は古墳時代から古代のものであると考えられ、未知の古墳の周堀である可能性もある。なお、南東方向に約10m離れた平成20年度調査のトレンチ18-2では、今回検出した溝のほぼ延長上で上幅3～4m、深さ0.9mの溝が検出されており、関係する可能性がある（図3）。

西側溝群は、トレンチ両側の壁面で確認した。幅20～50cm、深さ20～30cm程度の溝群で、全てFAを含む8層から掘り込まれ、As-Bを含む5層で埋まっている。溝は幅50cmほどの狭い間隔で連続し、西端の1条はこれに直交すると考えられる。熊谷市の北島遺跡などで報告されている古墳時代の畠跡に規模や形態が類似しており（吉田ほか2004）、畠などの耕作の痕跡の可能性がある。明確な年代を示す根拠はないが、火山灰の状況からは古墳時代から奈良・平安時代頃と考えられる。

③トレンチ3（行田市大字渡柳1394）（図6）

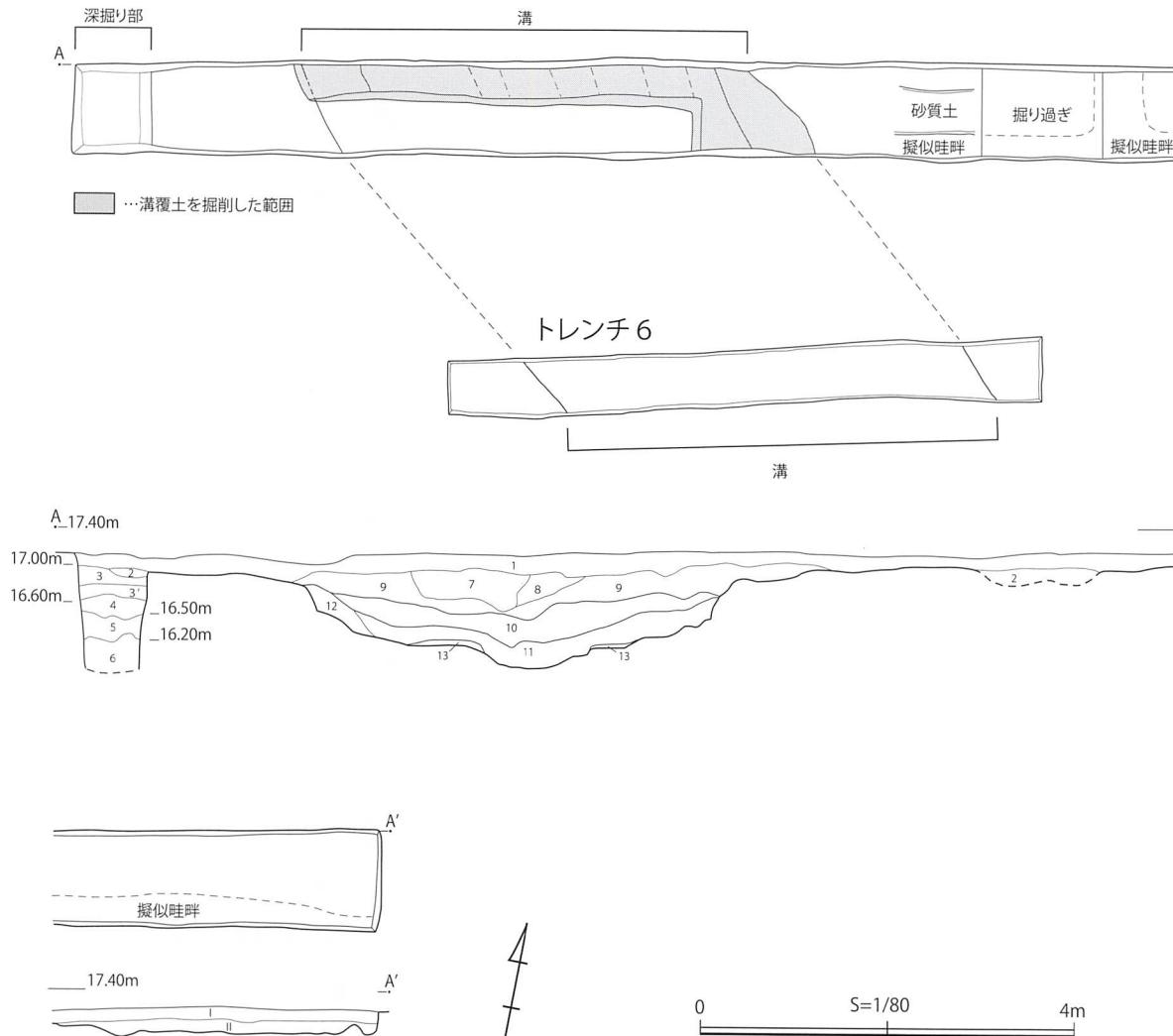
トレンチ2の東側で検出した溝の方向を確認するために設定した。トレンチは平面長方形で、幅0.5m、長さ1.9m、溝覆土上面までの深さは約0.3mで、調査面積は1.0m²である。

As-Aを含んだ表土層を除去すると、トレンチ2と同様にハードロームと溝の覆土の境界が確認できた。確認の際に覆土を一部掘削したが、覆土内からの遺物の出土はなかった。

④トレンチ4（行田市大字渡柳1394）（図6）

トレンチ3と同様、溝の方向を確認するために調査を行った。トレンチは平面長方形で、幅

トレンチ 5



トレンチ 5 土層注記

- | | | |
|-----------|---------------|--|
| 1 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR4/3 | As-Aを含む現代の水田耕作土 2層以下との境界が平坦であり、機械による削平と考えられる |
| 2 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR5/3 | As-A、上層から浸透したと思われる鉄斑・マンガン粒を含む |
| 3 シルト質細砂 | 灰黄褐色10YR4/2 | 3層よりマンガン粒多く、径1cm前後の結核が見られる 鉄斑も多く含み、上層からの浸透と考えられる |
| 3'シルト質細砂 | 灰黄褐色10YR4/2 | 鉄斑・マンガン粒をわずかに含む 3層を含め、立川ロームIV層に相当するか |
| 4 細砂質シルト | 暗褐色10YR3/3 | 全体の粒子は細かいが、粗い砂粒がわずかに含まれる 鉄斑含み、マンガン粒もわずかに含む
第1黒色帯に対応するか |
| 5 シルト質細砂 | 暗褐色10YR3/4 | 粘性が強い粘土質のブロックを一部に含む 第2黒色帯に対応するか |
| 6 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR4/3 | 他の層に比べ粒がやや粗く、シャリシャリとする 立川ロームX層に相当するか |
| 7 シルト質細砂 | にぶい黄褐色10YR4/3 | 8層に比べ、砂が多く含まれる マンガン粒多く含む 白色の粒(砂粒か)が含まれる
溝に最後に堆積した層 |
| 8 細砂質シルト | 暗褐色10YR3/4 | 7層と同じく白色の粒が含まれ、ほぼ同時期の堆積と考えられる マンガン粒を含む |
| 9 細砂質シルト | 黒褐色7.5YR3/1 | 8層から12層の他の層に比べ砂の含有が少ない 腐植土が混じる 層の上面には水田から
浸透したマンガン粒を含む 粘り気が強い |
| 10 細砂質シルト | 黒褐色10YR3/1 | 黒い筋や斑紋が入る 植物の根により、上層から鉄が浸透する 粘り気が強い |
| 11 細砂質シルト | 褐灰色10YR4/1 | 9層ないし10層が堆積する前に堀が掘りなおされている |
| 12 細砂質シルト | 褐灰色10YR4/1 | 5層に似た色調だが、砂がほとんど含まれない 粘り気が強い |
| 13 シルト質細砂 | 黒褐色10YR3/2 | 最初に掘られた堀を掘りなおし、中央を深くしている
9・10層より砂が多く含まれる 10層と同じく根による攪乱がある
最初に掘られた堀の壁面から崩落し、堆積したものか
11層に切られている 黄褐色土(6層か)を含み、堀底に最初に堆積した層と考えられる。 |

図7 トレンチ 5・6 断面図・平面図

1.0m、長さ5.1m、溝覆土上面までの深さは約0.3mで、調査面積は5.0m²である。

表土層を除去したところ、トレンチ東端で溝の覆土を検出した。溝の方向はトレンチ2・3で検出されたものとおおむね揃っており、これにより溝は北西方向から南東方向に延びていることが判明した。遺物は出土しなかった。

⑤トレンチ5（行田市大字渡柳1416-1）（図7）

平成21年度のトレンチ5から、現在の用水路を隔てて東側に位置する。トレンチの形は平面長方形に設定した。幅1.0m、長さ16.0m、ローム層の3層までの深さは0.2m前後で、現地表面の標高は17.1～17.2mである。また、地山の堆積の状況を確認するために、遺構が確認できなかった西端部分において深さ1.3mほどの深掘りを行った。

現代の水田耕作土であった1層を除去すると、トレンチ1と同様にAs-Aと鉄斑・マンガン粒を含み、還元され青味を呈する現代水田床土の2層となる。トレンチの東半ではこの層の直下がハードロームの3層であった。3層より上に本来堆積していたと思われる、ソフトロームから近世頃までの堆積土は認められなかった。昭和10年代に実施された耕地整理の際に削平されたと考えられる。

トレンチ東半の3層の上面には、鉄分とマンガン粒が特に多く沈着している範囲が見られた。そこで、鉄分があまり沈着していない範囲との境界を確認していくと、帯状の範囲になり、直角に分岐する部分も確認できた。鉄斑が面的に沈着した部分は、方形の区画をなしており、水田直下に鉄分が沈着したもので、鉄分が見られない帶状部分は畦畔下の土壤化していない部分と考えられ、仙台市富沢遺跡で検出された「擬似畦畔B」にあたる（斎野1997）。現代の水田の畦畔と一致しないことから、耕地整理の際に削平された近世から昭和初期の水田によるものと考えられる。

また、トレンチ中央西寄りでは溝を検出した。溝は幅4.6m、深さ1.1mを測る。はじめ底面が幅2.5m程度の平坦な溝として掘られており、その後最初の掘りなおしの時に底面中央部が一段深く掘りこまれている。次に掘りなおされている底面に近い10層、11層はいずれも非常に粘性が強く、最下層である13層には他の層に比べ砂粒がやや多く含まれる。

黒褐色土の10層が溝覆土の底面に近いところに堆積していることから、トレンチ2の東端溝と同様に、古墳時代から古代以前のものであると考えられる。

⑥トレンチ6（行田市大字渡柳1416-1）（図7）

トレンチ5の西側で確認された溝の延びる方向を確認するため、トレンチ5の南側に設定した。トレンチの形は平面長方形で、幅0.6m、長さ6.4m、調査面積は3.8m²である。深さ約0.2mの表土を除去すると東西の両端付近で溝の覆土と地山の境が確認でき、トレンチ5での検出方向とおおむね一致することが分かった。溝の覆土はトレンチ5の7～9層、地山は3層に対応する。遺物は出土しなかった。

これにより、溝は北西方向から南東方向に延びることが確認できた。トレンチを設定した目的を達したため遺構覆土の掘削は行わず、平面図のみの記録とした。

(3) 出土遺物

トレンチ1・2・5において、表土層を掘削した際に数点の遺物が出土した。観察にあたり、色調はマンセル系統分類方式による標準土色帖を用いて記録した。

① トレンチ1 (図8-1~3)

1は須恵器壺の底部である。復元した底径は8.5cm前後、残存高は1.0cmを測り、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は灰色（7.5YR 6/1）で、還元炎焼成である。胎土に白色針状物質を含み、南比企産と思われる。法量及び底部調整痕から、8世紀頃のものと考えられる。

2は鉄釉筒型香炉である。口径は10.4cmを測る。鉄釉は全面に施されている。欠損のため全体の形状は不明である。近世の瀬戸製と考えられる。

3は素焼きの焰烙である。口径は小片であるため正確に復元できないが、30cm~40cm程度である。体部の下方に稜をもち、口縁部は丸みを帯びて体部よりやや厚く作られている。酸化炎焼成であり、橙色（7.5YR 7/6）を呈する。体部から口縁部への立ち上がりの形状から、16世紀後半から17世紀初頭のものと考えられる（両角1996）。

② トレンチ2 (図8-4)

4は須恵器壺の底部である。復元した底径は7.5cm前後、残存高は0.85cmを測る。底部の切り離しは回転糸切り後、全面を回転ヘラケズリしており、その後回転ヘラミガキが施される。白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。色調は灰色（5YR 6/1）で、還元炎焼成である。法量や底部調整痕から、8世紀頃のものと考えられる。

③ トレンチ5 (図8-5)

5は須恵器長頸瓶の破片である。外面にはロクロ目に直交した自然釉がみられ、釉流れによる釉溜まりが数か所生じている。丸みを帯びた体部の、肩部付近と考えられる。還元炎焼成で、色調は灰白色（7.5Y 7/1）を呈する。胎土は極めて緻密でよく精製されており、東海系と考えられる。7世紀頃のものであろう。

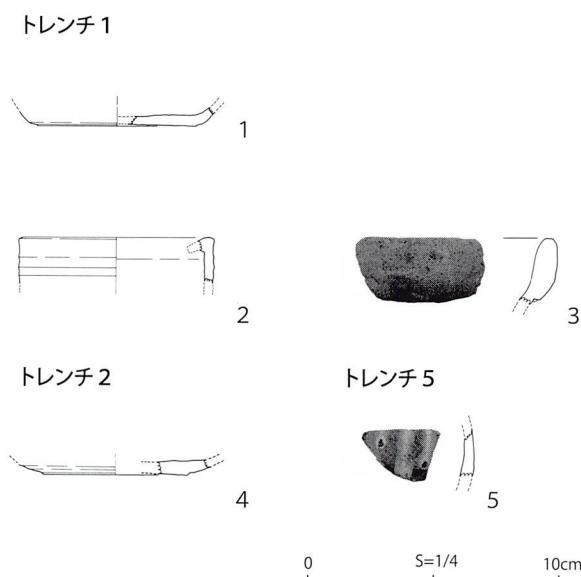


図8 出土遺物実測図

4. 確認調査のまとめ

(1) 調査結果

今回の確認調査では、トレンチ2で古墳時代にさかのぼる可能性がある畠状の溝群と、古墳時代から古代と考えられる幅2mの溝を検出した。また、トレンチ5では古墳時代か

ら古代のものと思われる幅4.6mの溝に加え、7世紀代のものと思われる須恵器長頸瓶の破片を検出した。このことは、従来の確認調査では見つかっていなかった範囲にも、古墳などの遺構が存在する可能性を示している。

旧地形については、全てのトレンチで関東ローム層を検出したことから、従来考えていたとおり、奥の山古墳の西側で1m程度の緩い段差をもつものの、武藏水路方面まで低い台地が連続していることを再確認した。

また、トレンチ2では古墳時代の堆積土の検出面が、ローム層と同様に西に向かって低くなっていくことを確認した。ここから、古墳時代にもトレンチ2の中央付近から西に向けて地形が低くなっていたことを推測できる。

(2) 結論

これまでの調査成果から、埼玉古墳群は台地上に広がる遺跡であり、周囲の湿地から一段高いところに位置することが明らかになった。このうち、大型古墳が築造される範囲は更に一段高い微高地上にあたる。そのため、現時点の史跡指定範囲に含まれる9基の大型古墳に加え、浅間山古墳、戸場口山古墳を加えた11基の大型古墳を含む範囲を、遺跡としての埼玉古墳群全体の中で特別な意味を持つ範囲と捉えることができる。

また、中核となる大型古墳の周辺と台地の低い面には中小の古墳が築造され、斜面や台地の低い面は農地としても利用されていたことも分かってきた。

ただし、今回の調査ではトレンチ5で出土した長頸瓶などから、史跡指定範囲の南西にも古墳や関連する遺構が存在する可能性が確認され、中の山古墳の南側に位置する原遺跡で行田市が行った調査では古墳と考えられる遺構が検出されるなど（中島・浅見2005）、遺跡としての埼玉古墳群の範囲は南東から南西にかけて広がる可能性が高い。

(3) 課題

調査の結果、古墳時代においては台地の高い面に古墳が築造され、斜面地や低い面は農地などに利用されていた可能性をうかがえる成果があった。しかし、未調査箇所が多く残されており、埼玉古墳群の遺跡としての性格、価値や詳細な状況を把握するためには今後も確認調査が必要である。

《参考文献》

- 行田市史編纂委員会 1964 『行田市史 下巻』 行田市
工楽 善通 1991 『水田の考古学』 東京大学出版会
斎藤 国夫 1979 『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 行田市文化財調査報告書 第5集 行田市教育委員会
斎野 裕彦 1987 『富沢』 仙台市文化財調査報告書 第98集 仙台市教育委員会
佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号 埼玉県立史跡の博物館
佐藤 康二 2014 『奥の山古墳 発掘調査・保存整備事業報告書』 埼玉県教育委員会

- 杉崎 茂樹 2004 「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』 第17号 埼玉県立さきたま資料館
- 杉崎 茂樹 2006 「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』 第19号 埼玉県立さきたま資料館
- 中島洋一・浅見貴子 2005 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ 原遺跡(9次) 八幡山古墳(4次) 船原・内郷通遺跡(12次)』 行田市文化財調査報告書 第35集 行田市教育委員会
- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号 埼玉県立史跡の博物館
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号 埼玉県立史跡の博物館
- 能登 健 1991 「畑作農耕」『古墳時代の研究4 生産と流通I』 雄山閣
- 三土 正則 1976 「水田土壤」『アーバンクボタ』 13 株式会社クボタ
- 両角 まり 1996 「内耳鍋から焙烙へ—近世江戸在地系土器の成立—」『考古学研究』 42-4 考古学研究会
- 吉田 稔ほか 2004 『北島遺跡VII』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第291集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



写真1 トレンチ1 完掘状況



写真2 トレンチ2 完掘状況



写真3 トレンチ2 東端溝検出状況



写真4 トレンチ2 東端溝サブトレンチ



写真5 トレンチ2 西端溝群

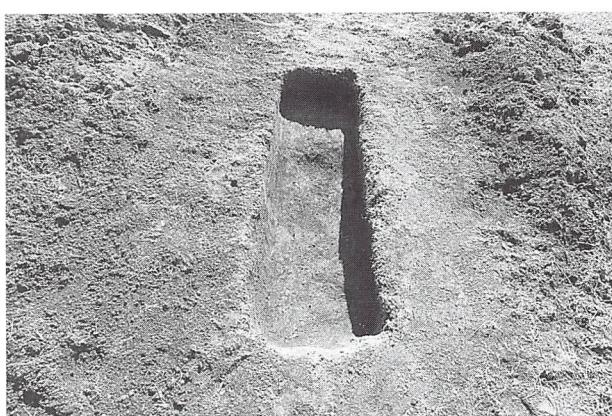


写真6 トレンチ3 完掘状況
(手前：溝覆土 奥：ローム)



写真7 トレンチ4 完掘状況
(手前：ローム 奥：溝覆土)

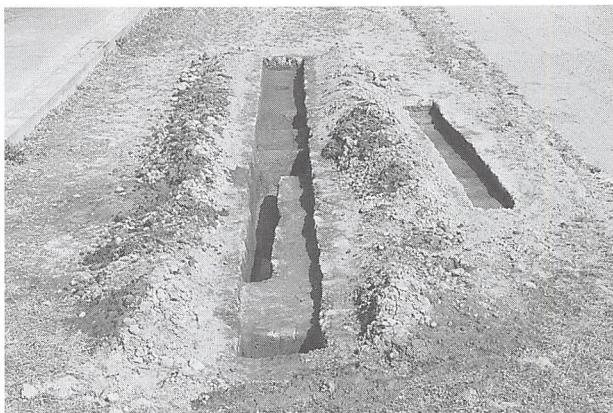


写真8 トレンチ5・6 完掘状況

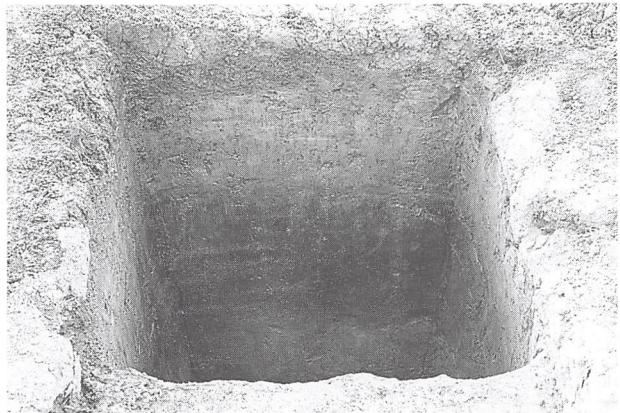


写真9 トレンチ5 深掘り部分



写真10 トレンチ5 溝



写真11 GPS測量の状況



写真12 作業風景

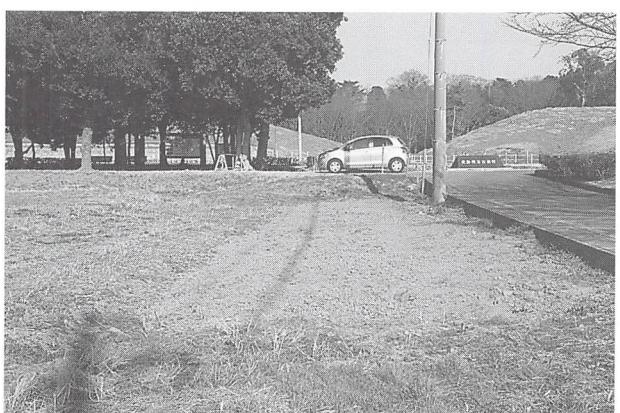


写真13 トレンチ1埋め戻し後



写真14 トレンチ2～4埋め戻し後



写真15 トレンチ5・6埋め戻し後

二子山古墳の再整備について

佐藤 康二

1 はじめに

当館では、史跡埼玉古墳群の保全と一層の活用を図るために、継続的に古墳群保存整備事業を行っている。平成18年度に「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」(埼玉県教委2007) の策定にあたり、各古墳の保存整備に係る問題点が抽出された。

その中で、昭和43年度に水堀として整備した二子山古墳については、「周堀の水は、地下水によるものと、外部からの流れ込みがあり、水質と環境の悪化が想定される。護岸は、波浪によって吃水部に浸食が進み、護岸部・墳裾部ともに流失が全体にわたって発生している。」(註1)と古墳群中で最も保存状態が懸念される古墳とされた。

二子山古墳の保全状況については、平成10年頃から崩落の兆候が職員の間で問題視されていたと聞く。平成19年12月には墳丘裾部に大規模な崩落が発生し、平成20年2～3月に文化庁の指導の下、緊急の内堀護岸整備工事を実施した(井上2009)。しかし、本工事は墳丘の東側くびれ部のみを対象としたものであり、依然として抉れた墳裾と中堤のさらなる大規模崩落の危険性は残った。そこで、平成24年度から再整備の第1期工事として、内堀埋立工事を実施している。

二子山古墳は埼玉古墳群のみならず、埼玉県下で最大の古墳であり、確認調査及び再整備は長期にわたる予定である。したがって正式な整備報告書の刊行は、5年以上先になる予定である。しかし、いち早く概要を報告することにより、史跡再整備の事例として参考にしていただくことが本稿の目的である。さらには、「水堀」が46年の歳月を経て、史跡にどのような影響を与えたかも合わせて報告する。

なお、内堀の埋立工事により、従来は危険で調査不能であった墳丘裾部及び中堤法面を対象とした発掘調査を開始し、新知見が得られている(岩田2013)。今後も墳丘形態、周堀形態の解明を目的とした調査を実施し、その結果を反映させて再整備を進める予定である。

2 二子山古墳の調査・整備の経緯

二子山古墳の保存整備及び発掘調査等の経緯については、塩野氏の集成(塩野2004)と発掘調査報告書(杉崎1987・若松1992)に詳しい。最近では平成19年度の緊急護岸工事の報告(井上2009)でも詳しく触れられている。

第1表は、それらを参考に作成した昭和42年度以降の二子山古墳の関連年表である。この年表と各時代の写真をもとに(註2)、二子山古墳の「整備」による変化について概観する。

(1) 昭和42年度以前

写真1-①は、昭和22年11月、写真1-②は昭和23年4月撮影の米軍航空写真である。

墳丘東側くびれ部には約25m×12mの長方形の平坦面がある。二子山古墳の過去の別称でも

年度	西暦 (年度)	主な出来事	年度	西暦 (年度)	主な出来事
昭和42	1967	発掘調査(1)	平成2	1990	発掘調査(5) 外堀南側隅角の調査
昭和43	1968	復元工事	平成3	1991	外堀南側の整備
昭和46	1971	「釣り・水泳禁止」標識設置	平成3	1991	『二子山古墳・瓦塚古墳』(発掘調査報告書第8集)刊行
昭和49	1974	発掘調査(2)(後円部北側、造出し部西側の外堀の発掘調査)	平成10	1998	この頃より墳裾の抉れが懸念される
昭和51	1976	二子山古墳の管理橋の修繕工事	平成18	2006	墳丘亀裂・崩落確認(史跡き損届提出)
昭和52	1977	二子山古墳周堤圍垣を全面改修	平成19	2007	再崩落
昭和55	1980	発掘調査(3)(外堀範囲確認調査)	平成19	2007	内堀護岸工事
昭和55	1980	外堀整備	平成19	2007	(現)古墳説明板設置
昭和58	1983	内堀仮橋補修工事	平成21	2009	菖蒲田排水升設置
昭和59	1984	発掘調査(4) 前方部南の外堀発掘調査	平成23	2011	内堀埋立の詳細検討
昭和61	1986	二子山古墳航空測量	平成24	2012	内堀埋立工事(1工区)
昭和61	1986	『二子山古墳』(発掘調査報告書第5集)刊行	平成25	2013	発掘調査(6)
昭和63	1988	(旧)古墳説明板設置	平成25	2013	追加指定(南側・西側の一部)
平成元	1989	追加指定(内堀・外堀等)	平成25	2013	内堀埋立工事(2工区)
平成2	1990	公有地化(内堀南側隅角)	平成26	2014	内堀埋立工事(3工区)

第1表 二子山古墳 整備・発掘関連年表 (昭和42年度以降)

ある「観音寺」跡地と考えられている(註3)。また規模は小さいものの墳丘西側くびれ部と前方部南西コーナー部も小さな平坦面が認められる。畠地として利用されていた可能性もある。

なお、現在二子山古墳の後円部中央には直径8mほどの凹みがあり、主体部の盗掘痕と想定されているが、写真1-②でもよく判る。また、前方部左側の土手状の高まりは、墳丘とともに昭和13年に史跡指定された中堤盛土の一部である。

(2) 昭和42・43年度

写真1-④は風土記の丘整備事業に伴う、発掘調査の際の航空写真(註4)であり、調査後に整備工事が実施された。内堀を重機で掘削、「水堀」として整備し、写真1-⑤の状態となった。この際の工事・整備方法は当時から問題になっていた(註5)。その詳細については後で触れる。

(3) 昭和49年～平成17年

水堀整備後の二子山古墳に発掘調査の手が入ったのは昭和49、55、59、平成2年度である。各年度の調査は報告書に詳しい。写真1-⑤では写真左下の内堀が用地取得の関係でクランクしているが、平成2年度の公有地化、発掘調査の成果により追加整備している。なお紙面の都合で掲載できないが、当館で所蔵している写真をチェックしたところ、墳丘裾部は昭和59年頃までは概ね安定しているが、平成2年頃から崩落が一気に進行していることが分かった。

(4) 平成18年～平成26年度

平成19年に墳丘くびれ部の大規模崩落が発生し、翌20年の冬に緊急の内堀護岸工事を実施した。前後して「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」を策定し、二子山古墳の再整備の必要性が記された。平成23年度から、内堀埋立の詳細な検討を開始し、平成24年度に設計、同年度から3カ年計画で、内堀埋立工事を実施した。平成25年度には埋立終了箇所の墳裾と中堤の発掘調査を行った。



① 昭和 22 年 11 月
(国土地理院所蔵 空中写真整理番号「UR465N01」の部分拡大)



④ 昭和 43 年 3 月



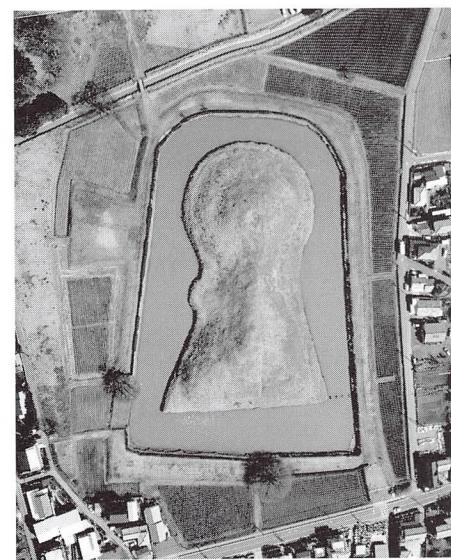
② 昭和 23 年 4 月
(国土地理院所蔵 空中写真整理番号「UR1242」の部分拡大)



⑤ 昭和 61 年 8 月



③ 昭和 39 年 6 月
(国土地理院所蔵 空中写真整理番号「MKT64-09X」の部分拡大)



⑥ 平成 21 年 3 月

写真1 二子山古墳の変遷（航空写真）

3 前回の整備について

(1) 記録類について

昭和43年度工事に関する設計図等の正式な記録は残っていない。当時、発掘調査は教育局、整備工事は公園担当部局が担っていた。したがって発掘調査日誌、図面類は現在も県立さきたま史跡の博物館に保管されているが、公園担当部局が実施した工事記録類は、担当部局の統廃合や保存年限の経過等により失われたと思われる。これは翌44年度に整備された奥の山古墳も同様である。

ところが、当館には撮影者、撮影日時不明の二子山古墳の工事写真が数枚保管されていた。

(2) 法面の施工方法

唯一の記録である写真から判明することを詳しく見ていく。

写真2-①等に写り込んでいる丁張りの角度からは、墳丘は約30度、中堤には40度前後の勾配をつける法面工事と推定される。また、いずれの写真も法面は掘削面ではなく、客土（内堀掘削土か）を貼り付けて整形しているように見える。この客土は平成25年度の調査でも検出されたが（岩田2013）、本来の墳裾保護のためなのか単なる整形のためかは定かではない。

また写真2-②の奥のドラム缶（？）の後方には3か所の丁張りが設置された盛土が見え、その正面の墳丘側では内堀の掘削が半分ほど行われているのが分かる。他の写真からも園路の機能を兼ねる中堤は、内堀掘削土を利用した盛土であると推測される。工事前は墳丘と史跡指定されたごく一部の中堤盛土以外は水田であり、同じ標高であった。

(3) 内堀の底面について

第1図①は平成24年3月に実施した横断面測量図の位置図である。内堀に水を湛えた状況の中、ポートから棒を突き刺し、ヘドロと現況堀底（硬化面）を計測したものである。計8か所の現況横断面を測量したが、硬化面が目視できないため、精度に欠ける点は否めない。ただし、この横断面図のみを頼りに埋立土量を設計したが、平成24、25年度工事では、設計土量9,497m³に対し、実際の出来形土量は9,865m³と、誤差4%以内であり、概ね現況を正しく測量できたと考えられる。

なお、これらの横断面図からは中央部分が一段深く見えるものが多い。平成24年度に開始した埋立工事の施工に際して排水した際も、内堀の中央が深く、ヘドロ溜りになっていることを確認することができた。これは昭和43年度工事の方法によるものではなく、第1図のとおり、法面の崩落の結果、工事当初は緩やかな勾配を保ちながら最深部につながっていた堀底に段差ができたものと思われる。

第1図①は昭和42年度調査の断面図、③は平成23年度の測量図、②は写真2と③から推定した昭和43年度工事の推定断面図である。昭和42年度調査の断面図から測ると、内堀の中央部堀底の平坦面は、どのトレンチでも概ね標高16.6m前後である。それに対し、平成23年度の現況測量では最深部はいずれも標高15.0m前後であった。つまり、本来の堀底よりも1.6m深く、掘削してしまったことになる。また復元中堤も当時の水田面から1m以上盛土して整形したことが判る。なお平成2年度に発掘調査を行い、追加整備を行った内堀南西部のみ堀底を保護したため、水位が下がるとローム層からなる堀底が水面から顔を出す状況であった。



① 昭和 43 年度工事 (前方部南東コーナー 撮影月日・撮影者不明)

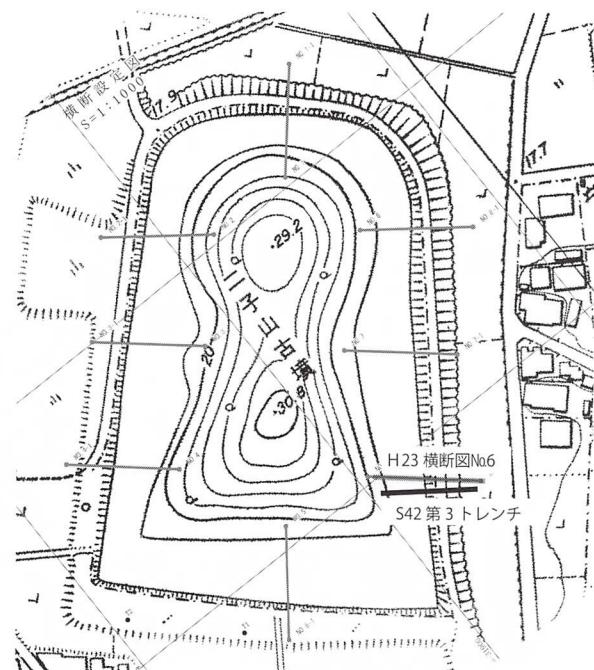


② 昭和 43 年度工事 (前方部南西コーナーから 撮影月日・撮影者不明)

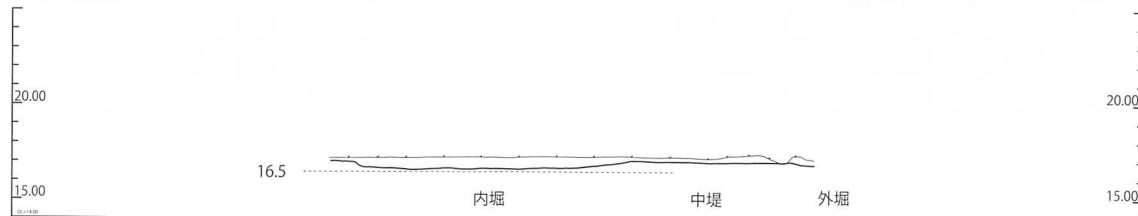
写真 2 昭和43年度工事写真

(4) 内堀の形態について

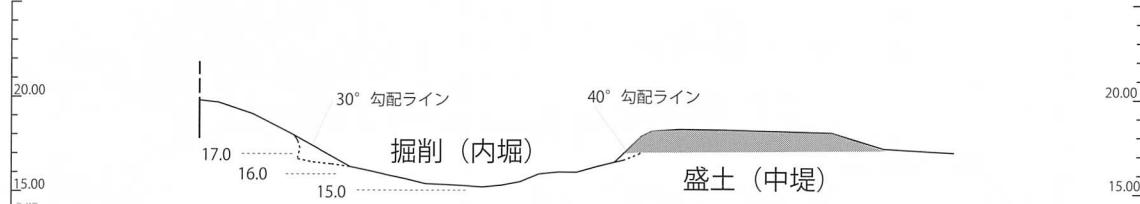
「二子山古墳には、楕円形の内濠が「復元」されているのであるが、その後、1974年度の調査で、外濠は長方形を呈することが判明したという。(略)これが事実ならば大発見である。」(渡辺1978)と内堀の復元形態についても批判が多くなった(昭和42年度の調査報告書が刊行されたのが20年後の昭和61年であったことも原因の一つにある)。昭和42年度のトレンチ調査は、ごく小範囲であり、現在の視点からも内堀コーナー部の形態を確定するほどの根拠はないと思われる。今後の発掘調査によって、内堀形態については再検討する予定である。



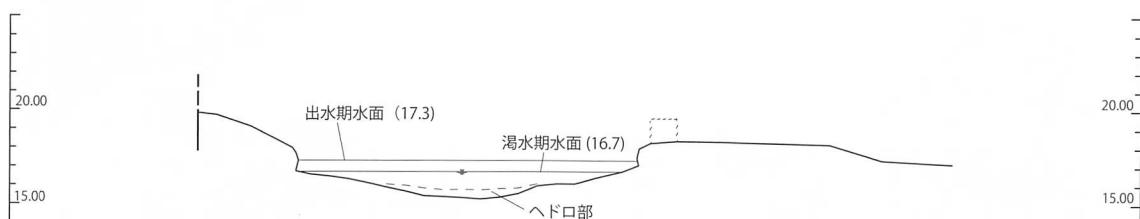
① 横断面測量箇所



① 昭和42年度3トレンチ断面図(土層線省略)



② 昭和43年度工事 推定断面図(写真と下記③から推定)



③ 平成23年度 横断面測量図No.6

第1図 横断面に見る二子山古墳の内堀の変遷

4 崩落について

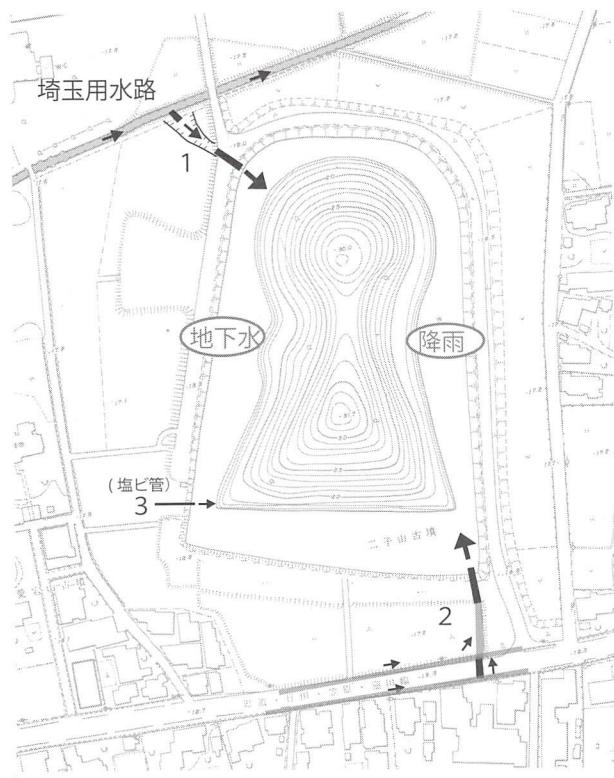
(1) 原因

水堀の古墳の裾部の崩落のメカニズムについては、すでに詳しい論考（笠野・福尾1995）がある。すなわち波浪によって水面付近の斜面に深いえぐれが生じ、やがて庇状に突出した水上部分が大雨による水位の急上昇や台風による樹木の揺れなどをきっかけに崩落するというものである。これが繰り返されると汀線や堤側あるいは墳丘側に後退を続けることになる。二子山古墳についても同様であると考える。付け加えるとすると、水面下に没した期間と水上での乾燥期間の繰り返しが恒常に発生したことである。

次に「水堀」として維持するための水についてであるが、内堀に流入する水は、直接内堀に降り注ぐ降雨と地下水以外に、2か所のヒューム管と1か所の塩ビ管から流入していた。

内堀北西コーナー部に吐水口をもつヒューム管（第2図1）は、内堀の水量確保及び外堀の菖蒲田への導水の目的のために設置された。設計図面や工事記録等は一切ない。ただしヒューム管は現在園路となっている中堤下にあることから、昭和43年度の整備時に設置されたと思われる。仕組みとしては、隣接する埼玉用水路の法面から傾斜をもって外堀へ導水する別のヒューム管があり、一度外堀に流入した水が開口した水路を経由し、中堤下のヒューム管を通って内堀に流入する。なお、埼玉用水路からの取水口は、法面の上部にあり、古墳群周辺で田植えが始まる前後に用水の水位が上がると自然と流入し、用水路の水位が下がると流入が止まる。

なお、この方法だと取水量がコントロールできないため、緊急護岸工事の2年後の平成21年度に埼玉用水路側のヒューム管の出口に集水枠を新設した。この集水枠は堰板を使用して流入水量の調整ができる、内堀の水位のコントロールもある程度は可能となった。しかし、この時



1 埼玉用水路と接続するヒューム管



2 県道側溝と接続するヒューム管

第2図 水の流入経路

にはすでに墳裾は出水期の最高水位直下がオーバーハングしており、水の浮力で、辛うじて墳裾の崩落を免れている状況まで事態は深刻化していたことから、結果的には流入水量のコントロールを行うことはしなかった。

2か所目のヒューム管（第2図2）は、内堀の南東コーナー部に吐水口をもつ。これも設置年度は不明であるが、ここへの水の流入は調査の結果（註6）、かなり複雑であることが判明した。二子山古墳の南側には県道があり、この道路両側の側溝に落ちた雨水及び一部生活排水が、外堀内に設置された開口したU字溝に落ち、その後、中堤下に埋設されたヒューム管を通して内堀へと流れ込む仕組みであった。

南西コーナー部付近の塩ビ管（第2図3）は小規模なものである。設置時期は不明である。その配置からは菖蒲田として利用していた外堀のオーバーフロー対策のために設置したと思われる。

平成22年度に内堀の水位変化を計測したところ、水位のピークは2回あり、6月中旬～7月上旬、8月下旬～9月中旬であり、いずれも標高17.2m前後であり、最高値は約17.3mであった。渴水期の冬季は降雨直後を除けば概ね16.7m前後であった。したがって0.6mの水位変動を40年以上繰り返してきたことになる。当然その間には台風、大雨による急激な水位上昇と落下が幾度となく繰り返されたものと思われる。

なお平成24年度から開始した埋立工事は渴水期の1月以降に施工しているが、水中ポンプで排水しても、一夜明けると一定の水位に上昇したことから、冬季においても標高15～16mあたりで地下水が流入していたことがわかる。

（2）崩落の状況

次節で述べる内堀埋立工事に伴い、強制排水後に観察できた崩落状況について説明する。

①墳丘

墳裾が当初は30度勾配で整備したと仮定すると、概ね平均横断面積1.8m²が墳裾総延長約380m、すなわち約700m³が流出したと推定する。ただし、平成24年度の調査箇所については、昭和43年度工事の際に貼り付けた客土のみの流出であることが確認された。

ただし、工事に伴う排水時に法面を目視した限りでは、墳丘造出し部周辺等で、地山のローム層が露出していることから、部分的に墳丘自体が崩落していると想定される。

②中堤

墳丘同様、水位変動により浸食され、オーバーハングするほどになった。中堤法面は40度勾配で整備されたと仮定すると、平均横断面積1.0m²が中堤総延長約500m、すなわち500m³が崩落・流出したと推定する。こちらも下部はローム層が露出していることから本来の中堤法面が崩落している可能性が高い。

③遺物

工事に伴う排水時に、墳丘裾部から多量の埴輪片と少量の須恵器片を採取した。コンテナ17箱であった。今後洗浄する予定であるが、95%以上は円筒埴輪片と思われる。なお墳丘造出し直下には須恵器片が集中していることから、先に触れたとおり墳丘本体も崩落している可能性が高い。



① 昭和 40 年代後半か (正確な撮影年不明。水面際のみ僅かに切り立っている)



② 平成 25 年 2 月 (墳丘裾は約 1.5m 後退している。中堤も下部が完全に流出している)

写真 3 崩落状況写真（1）



① 後円部

昭和 43 年度整備時には 30 度勾配であった法面が、崩落の繰り返しにより、裾部は大きく後退。



② 前方部

大きく抉れ、上部も部分的に崩落。写真手前は平成 2 年度調査で検出された本来の堀底面



③ 中堤

鋸歯状に崩落する。昭和 43 年度整備時には下部の乾燥箇所までは中堤法面であったと推定される。



④ 前方部南西コーナー

遺物採集状況。作業員足元の乾燥箇所は、墳堀の流出箇所と推定される。



⑤ 墳丘造出し部周辺

埴輪片が散在する。最奥が後円部、手前造出し。須恵器片も数点採取。



⑥ 東側くびれ部

矢板は平成 19 年度実施の緊急護岸整備工事によるもの。瓦片、埴輪片が散在する。

写真 4 崩落状況写真（2）

写真3、4は平成24年度工事の際、排水後に撮影した崩落状況と、過去の参考写真である。平成19年度の大規模崩落以前にも、徐々に法面は後退していった結果であろう。排水前は法面上位の鋸歯状の崩落のみが目立っていたが、排水後に墳裾を目のあたりにして、あまりの悪化に驚いたのが率直な感想である。

5 内堀埋立工事について

(1) 事前調査・計画

平成19年度の緊急護岸工事以降、当館では、同じく水堀に整備された奥の山古墳の調査・整備と並行して、二子山古墳の崩落対策を検討してきた。二子山古墳の内堀と連結している埼玉用水路の管理者である元荒川上流土地改良区への相談や、工法的なアドバイスを得るために埼玉県行田国土整備事務所への相談等を行ってきた。

まず検討したのは、法面工のみとするか、全面埋立を実施するかであった。宮内庁が管理する陵墓、陵墓参考地となっている古墳の護岸工事や岡山県の史跡両宮山古墳の保存整備工事(宇垣2008)等の先行事例の検討を行い、最終的には内堀の全面埋立の方針となった。

内堀の全面埋立に決定した主な理由は、下記の考え方による。

- ①最優先事項は遺構（墳丘）保護である。
- ②本来の内堀底面は昭和43年度の工事で、ほぼ掘削されてしまっている。
- ③過去の花粉・珪藻分析では、鉄砲山古墳と同じく、沼沢湿地環境ではあるものの常時水を湛えた水堀ではなかったことが判明している。
- ④堀底に1m堆積したヘドロを除去しない限り、大規模な保護工事がとれない。
- ⑤埼玉古墳群の前方後円墳には葺石がなく、誤解を招くような整備を行わない（石材を使用しない、コンクリート等による護岸は避ける。）
- ⑥本来の堀底レベルで復元した場合、周辺の標高より低くなり、雨水の流入は避けられず、出水期は冠水、渴水期は乾燥状態になる可能性が高く、今まで同様に墳裾にダメージを与える可能性が高い。

さらに全面埋立工事に決定した大きな理由は、埼玉県行田国土整備事務所の公共事業で生じた良質な発生土（公共残土）が、二子山古墳から約1km先にストックしてあり、これを使用することが可能になったからである。この発生土が使用できなかつたら、予算、工期とも数倍になっていた。

なお、埋立工事後には墳丘や周堀形態の確認調査を複数年かけて実施する予定である。その成果をもとに最終的な修景工事を実施する予定であり、長期の整備事業となる。そこで、平成24～26年度を第1期埋立工事と位置付け、単純な盛土工のみとした。これは修景工事までに一定期間を経ることで、ある程度の地盤沈下が生じた場合でも修正することができる。

これらの整備方針は文化庁文化財部記念物課ならびに史跡埼玉古墳群保存整備協議会の指導助言を得て決定した。

(2) 工事設計

上記(1)により、内堀の全面埋立を実施することを決定したが、大きな問題は堀底に堆積している約3,000m³のヘドロであった。

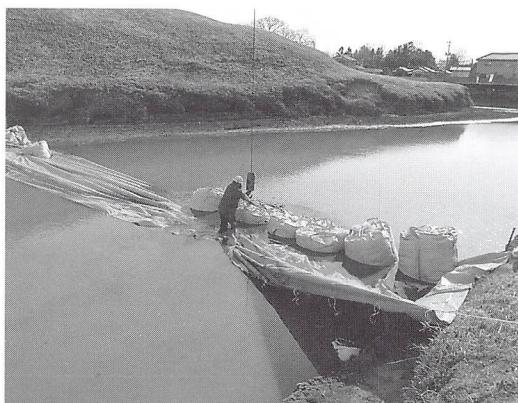
当初は堀底に沈殿したヘドロを固める案と産業廃棄物としてヘドロを搬出する案の二つで積算を行った。その結果、後者のヘドロ搬出案の場合、費用が2倍近くになることからヘドロは搬出せずに施工することとなった。また、第1期の埋立の仕上高は標高17.4mとした。この仕上高により、墳裾のオーバーハングは、ほぼ安定させることができる。さらには現況で菖蒲田として利用している外堀と概ね同レベルであり、出水期も長期の冠水が生じない高さとした。

(3) 工事の概要

詳細な設計図面や各種数量表は、今後刊行の正式な整備報告書に掲載予定である。ここでは3か年の埋立工事に係る土量等の概要のみ掲載する。

平成24、25年度は出来形数量、平成26年度は設計数量であるが、埋立米は平成24年度5,598m³、平成25年度4,268m³、平成26年度2,000m³の計11,866m³で標高17.4mまでの埋立工事を実施した。地盤改良工は平成24年度0m³、平成25年度311m³、平成26年度80m³の計391m³である。なお平成21年度に実施した奥の山古墳の周堀埋立工事では計3,900m³であったことから約3倍の土量を要した。

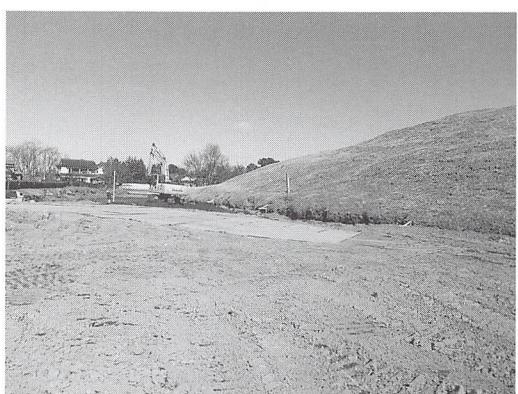
なお、地盤改良工にはペーパースラッジ系中性固化材を使用した。この固化材は製紙焼却灰を主要原料としたもので、セメント系、石灰系と比較すると環境に影響がなく、吸水性に優れヘドロに効果が高いものとされる。さらにはセメント系と違い、改良後もガチガチに固化され



① 間仕切排水用に大形土のう設置



② ダンプ進入用のスロープを造る



③ バックホウ、ブルトーザーによる敷均し



④ 完成（平成25年度施工区）

写真5 内堀埋立工事写真

ず、人力による再掘削が可能であることが採用の決め手となった。今回の再整備後も、経年変化で再々整備が必要になる時期は必ず来ると思われる。その際に墳丘等にダメージを与えないためには、セメント系で固めるわけにはいかなかった。固化材の配合試験により分量を決め、地盤改良工を実施した。

6 前回整備の問題点と今後の整備について

(1) 前回整備の問題点

今後の発掘調査により、解明することも多いだろうが、現在の時点で前回整備及び維持管理の問題をまとめると下記のとおりである。

- ①本来の堀底を重機で掘削し、「水堀」にした。
- ②僅かなトレンチ調査の成果をもとに周堀形態を「復元」した。
- ③墳丘側、中堤側とも法面整形を行ったが、土のみによる整形で、近年の土木工事で多用されるようなネット等の法面保護の対策が行われなかつた。
- ④水位のコントロールができず、水位変動が恒常に発生していた。
- ⑤ヘドロの浚渫を一回も行わなかつた。
- ⑥水面下の崩落状況を定期的にチェックしていなかつた。

①と②の根本的な原因については、整備事業のスケジュールや予算の問題等が推察されるが、それらをここで論じる準備はない。③と④については、法面の勾配は確保していることから、やむを得ないか。水位変動等により、当時はここまで崩落するとは予想できなかつたろう。

史跡の管理としての反省点は⑤と⑥である。⑤については、近隣住民から悪臭に対する苦情もあり、作業時の進入により 1 mほどヘドロが堆積していることは判っていた。人身事故がなかつたことは不幸中の幸いである。⑥については判明する限り、強制排水で墳裾を目視できたのは今回の工事以前には、平成 2 年度の発掘調査時のみである。46年の間に墳裾が 2 m 後退した。単純に 1 年に 5 cm である。「水堀」に整備した以上、5 年に 1 回程度は観察すべきであった。

また、今回の埋立工事の問題点を付け加えると、予算等の事情で、3か年に分けて実施したことが挙げられる。このことにより、冬期に 3 か月程度の強制排水を 3 か年連続して実施したことにより、特に最終施工区の墳裾の崩落が進行した。排水前は浮力により辛うじて崩落を免れていた部分が、急激な乾燥により崩落が進行したものと推定される。当初は間仕切排水を実施することにより、施工区以外は排水しない計画であったが、内堀全体の水位を下げないと施工が困難であったため、やむを得ず方針を変更したことによる。

(2) 今後の整備について

3 か年で実施した第 1 期の内堀埋立工事終了に伴い、従来危険で立ち入れなかつた箇所の発掘調査が可能となつた。平成 25 年度からは崩落状況や墳丘形態の確認のための発掘調査を開始している。これらの調査成果を反映させて、仕上げともいうべき第 2 期整備の設計・工事を行う予定である。その際には内堀面の最終仕上げ高や仕上げ方法、あるいは調査で判明すれば内

堀形態の修正も視野に入れていく。さらには現状で古墳周辺を一周できない園路の問題等も解決できればと考えている。今後も関係機関の指導・助言を頂きながら計画を策定し、実施していく予定である。

文末ですが、二子山古墳内堀埋立工事に係り、下記の機関から御指導、御協力を賜りました。記して感謝いたします。

文化庁・史跡埼玉古墳群保存整備協議会・元荒川上流土地改良区・行田県土整備事務所

《註》

(註1) 同じく水堀として整備された奥の山古墳については、平成21～24年度に整備工事を実施し、下記の報告書（佐藤2014）を刊行した。

(註2) 写真以外にも、昭和12年に後藤守一氏と三木文雄氏により作成された二子山古墳の測量図や、当館が昭和61年度に制作した測量図があり、この両者の比較はすでになされている（井上2009）。なお当館では平成24年度に3Dレーザー測量により10cmコンタの測量図も製作しており、それらの比較により、墳裾の崩落状況も把握することができるが、紙面の都合で省略する。

(註3) 内堀埋立工事に伴う強制排水後に、多量の瓦片と少量の陶磁器片が散在しており表採した。今後の整理作業で洗浄し、時期を特定する予定である。なお明治19年頃制作された公図（熊谷法務局公図）では、墳丘はすべて同じ地番になっており畠の記録ではなく、これらの平場を畠地として利用していたかは判然としない。

(註4) この時に埼玉古墳群のすべての航空写真が撮影された。稻荷山古墳の失われた前方部や小円墳跡のソイルマークが鮮明に写ったものもこの時である。

(註5) 恥ずかしながら下記文献は入手できず未読であり、参考文献（渡辺1978）からの引用である。

島海 登 1972 「『さきたま風土記の丘』の問題点」「文化財を守るために」 6

今井 堯 1973 「文化財保存運動と埼玉古墳群の問題」「文化財を守るために」 8

(註6) 当館からの依頼により埼玉県行田県土整備事務所が調査を行った。

《引用・参考文献》

埼玉県教育委員会 2007 『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』

井上 尚明 2009 「二子山古墳の内堀護岸整備について」「埼玉県立史跡の博物館紀要」 第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

佐藤 康二 2014 『史跡埼玉古墳群 奥の山古墳 発掘調査・保存整備事業報告書』 埼玉県教育委員会

岩田 明広 2013 「行田市埼玉古墳群（鉄砲山古墳・二子山古墳）の調査」「第47回遺跡発掘調査報告会発表要旨」 埼玉考古学会他

塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会

杉崎 茂樹他 1987 『二子山古墳』「埼玉古墳群発掘調査報告書 第5集」 埼玉県教育委員会

若松 良一他 1992 『二子山古墳 瓦塚古墳』「埼玉古墳群発掘調査報告書 第8集」 埼玉県教育委員会

笠野 育・福尾正彦 1995 「履中天皇百舌鳥耳原南陵の墳丘外形及び出土品」「書陵部紀要」 第46号 宮内庁

宇垣 匡雄 2008 『史跡兩宮山古墳 中堤保存工事報告書』 岡山県赤磐市教育委員会

小川 良祐他編 2003 『ワカタケル大王とその時代』 山川出版社

渡辺 貞幸 1978 「辛亥銘鉄剣を出土した稻荷山古墳をめぐって」「考古学研究」 第25巻 第3号

坂戸市柊塚とその土橋をめぐって

杉崎 茂樹

はじめに

埼玉県中西部の坂戸市入西地区では区画整理事業の実施に伴い多くの方形周溝墓が調査された。このうち唯一保存されたのが広面B遺跡の「柊塚」と呼ばれる墳丘の遺存していた方形周溝墓である。事業地内で発見された周溝墓中方台部規模はもちろん、周溝部を含めた面積でも最大規模の周溝墓であった。墳丘の調査は行われなかつたので埋葬施設は不明だが、注意を引いたのはその西側方台部に付設された土橋であった。方台部西辺の中央から大きく逸れた位置に西溝に対して南方向に斜めに掘り残された、あまり類例のないもので、所謂前方後方形の周溝墓とは一見して異なる平面形態であった。

調査及び報告からだいぶ時間が経過しているが、県下の類似例とともに検討し、その性格や意義についてあらためて考えてみることにしたい。(註1)

1 柊塚の概要と特徴（第1図）（村田ほか1990）

柊塚は入間川水系の越辺川右岸の自然堤防上に所在する広面B遺跡の方形周溝墓群の1基で遺構名称はS Z 9（第9号方形周溝墓）である。越辺川は入間郡と比企郡の境界を流れる河川で広面B遺跡の南方には間近に入間台地が広がり、越辺川を挟んだ北側は比企丘陵が迫っている。現在の行政区分では入間郡の最北縁部に位置する。入西地区で方形周溝墓の発見された遺跡及び発見数は西から順に、稻荷前遺跡で35基、その北東の広面B遺跡で22基、広面B遺跡の北東に隣接する中耕遺跡で68基、3遺跡での合計は実に125基となる。

さて、この広面B遺跡の柊塚の方台部の規模は検出面での計測では長辺約24.4m、短辺約22mと広面B遺跡はもとより入西地区で確認された周溝墓の中では最大規模を有しており、その方台部西辺中央から北寄りに偏った部分に南に向い斜行する土橋を、基盤土を掘り残して付設している。土橋の幅は方台部側で約5.8m、方台部の結接部には幅1m、深さ0.7mの溝が掘られている。長さは約16m、主軸は約4m近くも方台部西辺の中心から北に偏した位置となり、外方はなだらかに南方に向かい広がる形態となっている。方台部の東辺と南辺にはそれぞれ中央付近に検出面で幅1.6mと約2mの造出状の突出部を有している。

出土土器には焼成前の底部穿孔のある畿内系とされる二重口縁の壺や埴、器台のほかに吉ヶ谷系の大形壺が出土している。

2 近縁性を持つ方形周溝墓と前方後方墳

埼玉県域においては方形周溝墓の周溝は出現期の弥生時代中期には方台部の四隅を掘り残して周溝が途切れるものが定型的な形態であった。それが古墳時代に至る前後までに切れ目なく全周する形態に移行している。この変化がもっとも遅くなつて行われた地域が柊塚の所在する

比企丘陵とその周辺、すなわち同地域を中心に広がりのあった吉ヶ谷式土器の分布圏でのことであり、この形式の土器を用いた集団の方形周溝墓の溝の形態に対する保守性の強さ、あるいは拘りを物語る現象である。柊塚でもその南側に四隅の切れる周溝墓が取り巻くように構築されていて、柊塚の築造された時期までこの伝統が守られていたことを示している。

柊塚は基本的には周溝が全周する形態の周溝墓のバリエーションと考えてよいものと思うが、その一辺の溝の幅をほかの溝より幅を広く掘り、土橋を掘り残すことを特徴としている。比較検討のため土橋を持つ大形の周溝墓を県下の調査例から探してみると、同じ入西遺跡群の中耕遺跡の第42号方形周溝墓、県南の志木市西原大塚遺跡第1号方形周溝墓、県北の塚本山14号方形周溝墓が同じような土橋を持っていることがわかる。さらに前方後方墳の諏訪山29号墳の後方部に同様な土橋があることに気づいた。

1) 中耕遺跡第42号方形周溝墓（第2図）（杉崎1993）

中耕遺跡は前述の通り、広面遺跡の北東に隣接する遺跡である。廃絶した前代の集落の上に方形周溝墓の墓域が形成される。周溝墓のバリエーションとしては四隅の切れるものが形成期に現れ、その後全周する形態のものが築造されていったものと思われ、42号墓は周溝墓群の形成の末期段階の築造と考えられる。調査前には0.8mほどの高さで盛土の一部が遺存しており、その断面の調査で、古墳の盛土に通有の版築と同様に堅く叩き締めて築かれていることがわかった。精査を行ったが埋葬施設の発見はなかった。

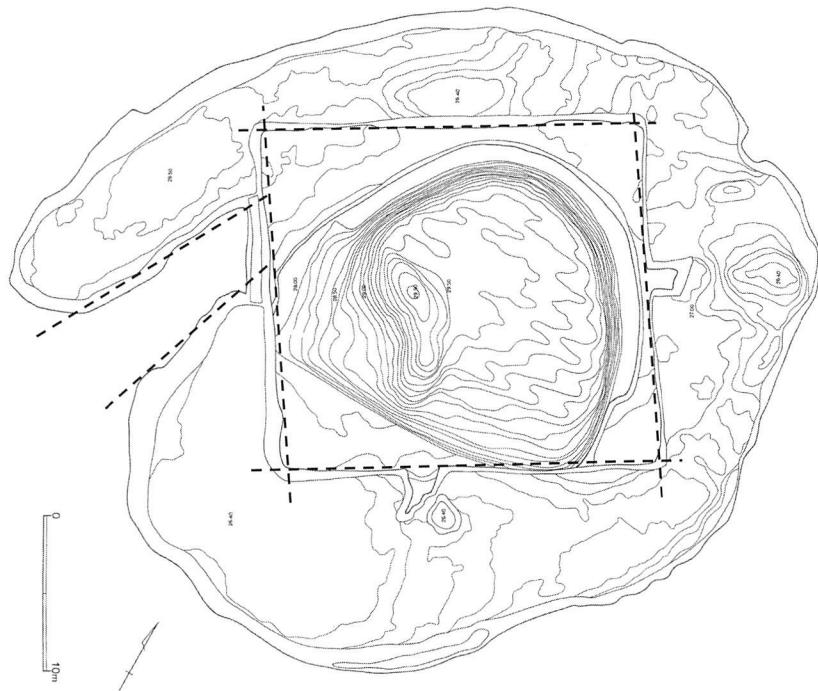
この遺構は周溝の遺存も悪く、取りわけて南西部分の周溝は遺存しておらず完全に全周する形で把握されたわけではないが、全周する形態のバリエーションの範疇で考えてよいと思われる。方台部の規模は検出面での計測では長辺約17.5m、短辺約13mで、方台部西辺の中央から南に偏した位置で、外方に土橋を付設しているものと判断できる。確実に斜行している状況は読み取れないが、方台部の中心から大きくそれた位置に土橋を付設することは柊塚との共通点である。その長さについては約11.5m程度と推定した。面積的には中耕遺跡の中ではトップクラスである。北溝の方台部中央に基部での幅約2.9mで外方に1mほど突出する不整合形の造出状の突出部を設けているのも柊塚と共通の要素といえる。

主に東溝・南溝から焼成後底部穿孔の吉ヶ谷系の無紋化した大形壺、埴、畿内系とされる二重口縁の壺、器台、高坏、装飾器台などの土器類が出土している。底部穿孔された大方の土器は焼成後の穿孔である点は柊塚より先行する築造時期であることを暗示している。

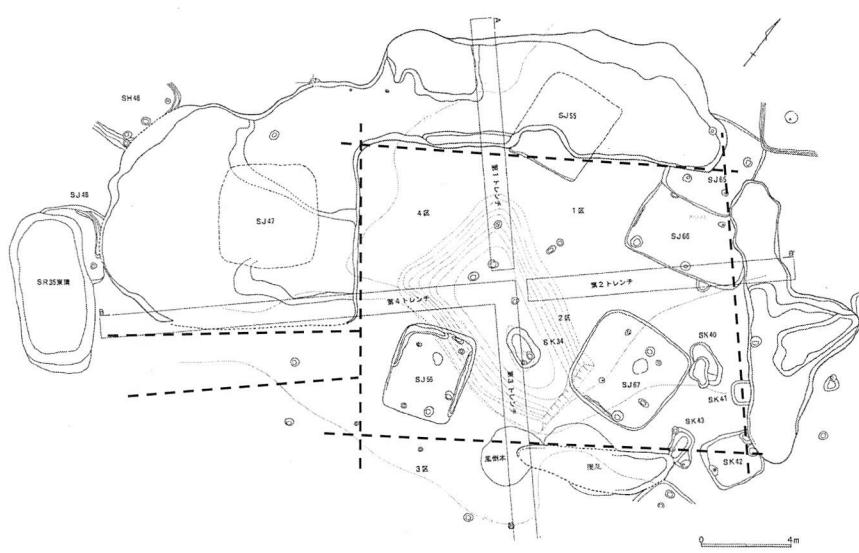
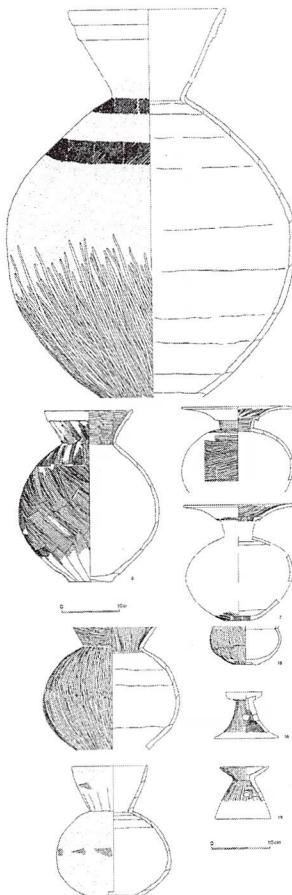
この42号墓は筆者が調査に関わった周溝墓で、遺構の遺存状況が悪いが「前方後方形」と推定して報告したものだが、あらためて検討してみると、そのように呼称することにはいささか躊躇を覚える状況となった。

2) 西原大塚遺跡第1号方形周溝墓（第3図）（佐々木2009）

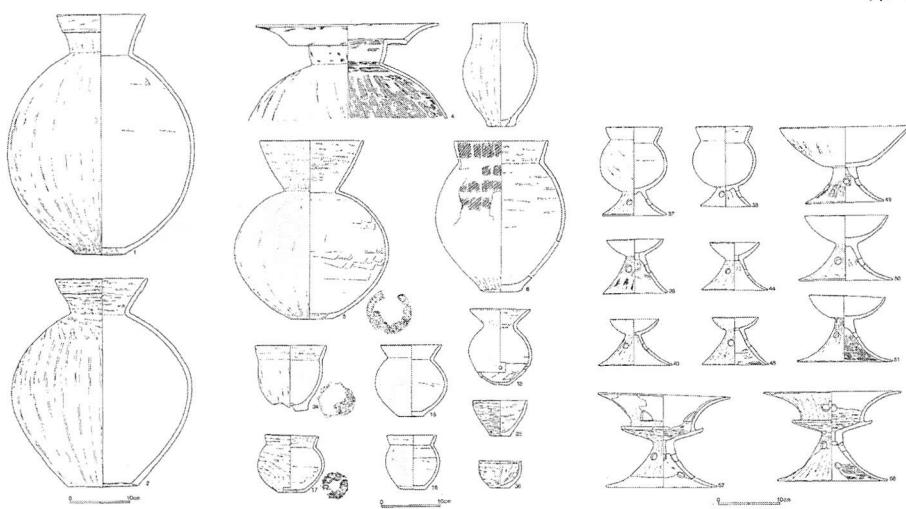
西原大塚遺跡は埼玉県南部の荒川水系の新河岸川に合流する柳瀬川右岸の台地上、志木市幸町地区に所在する遺跡である。区画整理で調査が行われ弥生後期から古墳時代前期の方形周溝墓が20基以上調査されている。そのうちの第1号方形周溝墓は北溝と東溝の一部が調査区外で全容が明らかになってはいないが、方台部の東西軸長は約14.5mと推定され、南北軸長は13.8mを測る大型の周溝墓である。方台部南辺のほぼ中央から外方に土橋が付設されて



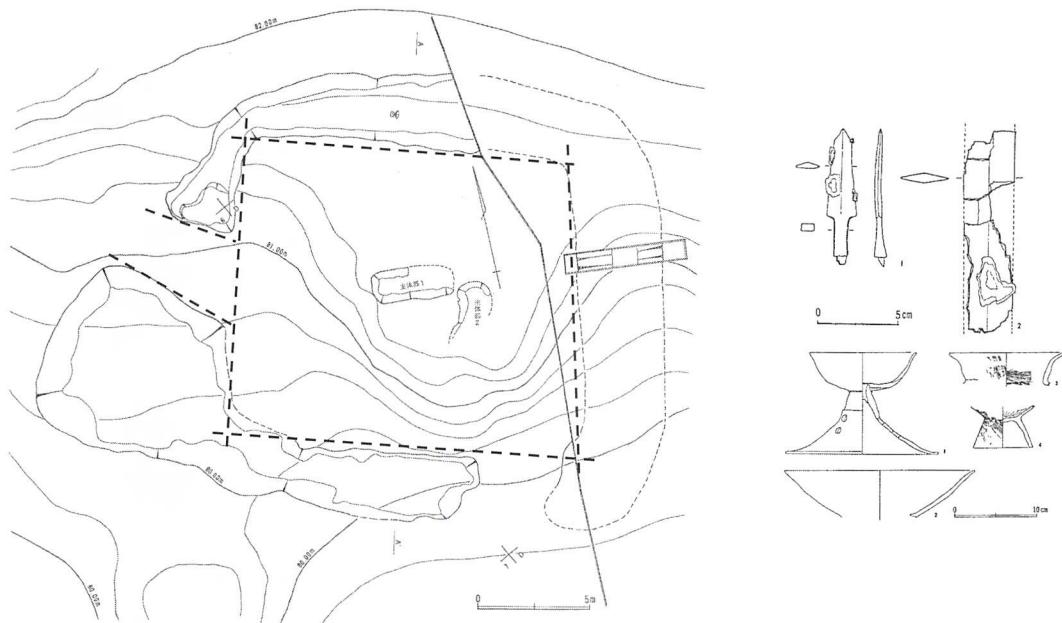
第1図 栄塚操作図及び出土土器



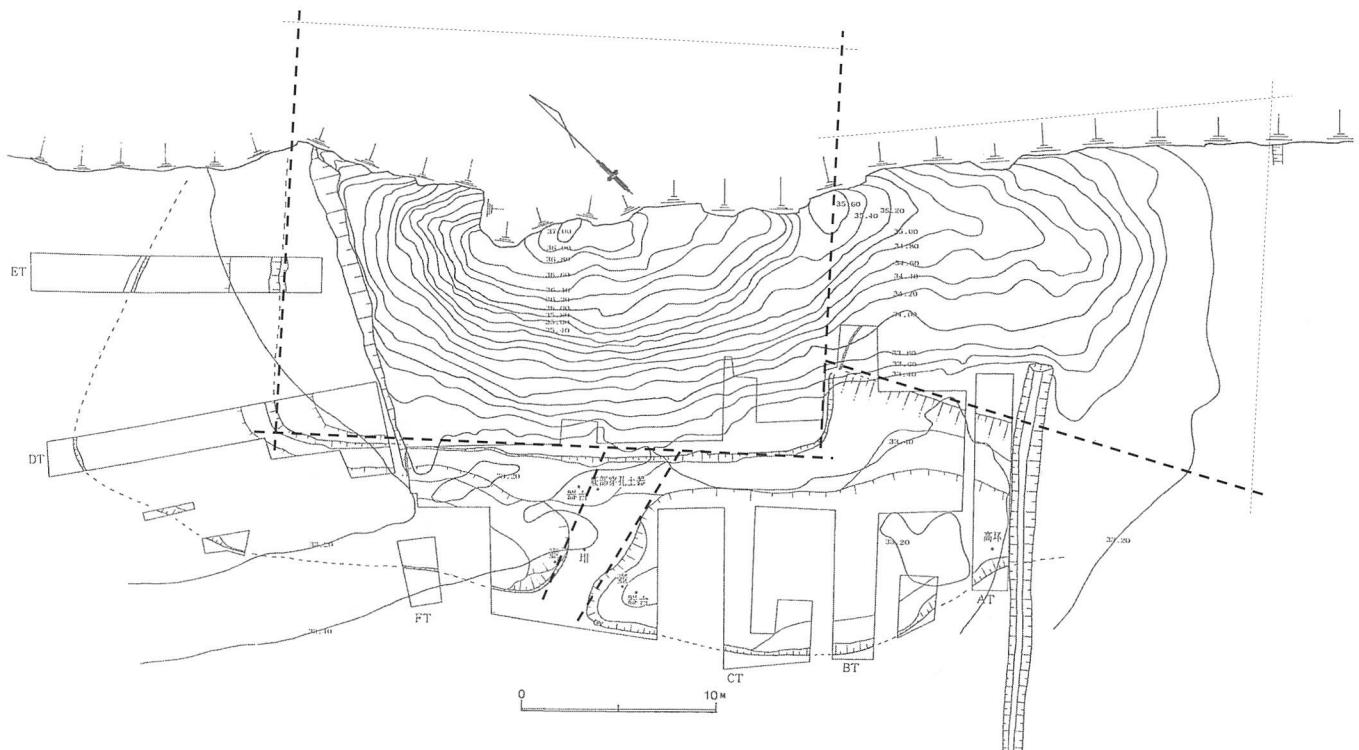
第3図 西原大塚1号墓操作図



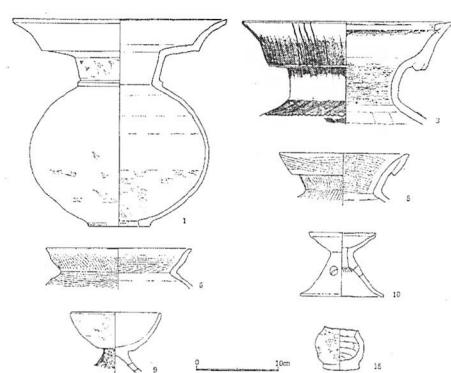
第2図 中耕42号墓操作図及び出土土器



第4図 塚本山14号墓操作図及び出土遺物



第5図 諏訪山29号墳操作図及び出土土器



いる。土橋の前方が調査区外となっていて長さは不明だが、土橋周囲の周溝はほかの溝よりもかなり幅広に掘られているのはまちがいない。土橋の検出面での規模は方台部結接部での幅が約2.5m、最も狭くなる部分では0.85mとなるが、明確な土橋である。土橋の斜行する状況は前方後方形の周溝墓とはかけ離れたものである。

弥生時代においてこのエリアは南関東系の帶縄文系弥生土器の文化圏に位置するが、築造時期を絞り込むことのできる土器の出土はない。同遺跡内ですぐ北側に近接する第10号方形周溝墓出土の高壺や甕などの土器の特徴は古墳前期でも古式な様相を持ち、畿内および周辺の特徴を持つものが含まれている（佐々木2009）。また、100mほど東南に所在する同遺跡中の既発見の周溝墓なかで最大規模の方台部を有し全周する周溝を持つ第17号墓からは縄文で装飾された壺や二重口縁壺など弥生から古墳時代への過渡期的時期の土器が出土しており（佐々木2000）、この1号周溝墓の時期もこうした周溝墓とほぼ同時期である可能性が高い。なお、志木市内では前方後方墳は確認されていない。（註2）

3) 塚本山第14号方形周溝墓（第4図）（増田ほか1977）

埼玉県北部の児玉郡美里町の小山川左岸には大久保山と呼ばれる独立丘陵がある。塚本山周溝墓群はその大久保山の南部裾部に所在する。関越自動車道建設に伴い9基が発掘調査された。実態の不明な部分の多い全長約60mの前方後方墳とされる鷺山古墳は西方に800mほど離れた低い丘陵上に築造されている（増田ほか1986）。この地域は弥生時代末において吉ヶ谷式と群馬県西を中心とする樽式土器の分布が重なる地域である。

さて、塚本山14号墓は調査前には1.5mほどの墳丘が遺存していて、埋葬施設である土壙が2基確認されている。東側の溝が調査区外となるが、その一部がトレンチ調査で把握されていて方台部南北を長辺としており約16mと推定される。短辺は東西方向で約13.8mである。方台部西辺のほぼ中央を約4.2mの幅で掘り残し、北西外方に約4.3mの長さの土橋が付設されている。土橋は外方の幅が方台部側より狭まっており、方台部から外方に向かい左手の周溝は他の箇所より幅広に掘られている。斜面部に構築されているため、標高の低い側の遺存がよくないが方台部の南辺東コーナー寄りにも土橋が確認されている。盛土中から埋葬施設が2基検出されていて、それぞれ東西方向と南北方向に長軸を置いており、そのうちの一基の覆土中から鉄剣の破片が出土している。また、周溝からは高壺や台付甕の台部破片などが出土している。

4) 諏訪山29号墳（第5図）（増田ほか1986）

諏訪山29号墳は東松山市西本宿の都幾川右岸の高坂台地北縁部に立地している。入西遺跡群の北方約5kmの距離にある。埼玉県史編さん室が1984年に発掘調査しているが、古墳の築かれている台地の崖の崩壊の進行で古墳もその北半部分が失われていることやトレンチ調査によるため、周溝の形態等も全容がつかめておらず、特に前方部に不確定要素が多い。埋葬施設も不明である。

報告書によれば復元主軸長は約53m、後方部の主軸長29m、幅は推定となるが約25m前後、現存する墳丘高は後方部約3.6m、前方部約1.6mである。周溝は検出された後方部の裾と掘り方上部が必ずしも平行にならず、後方部くびれ部付近では墳丘と相似形とは認めがたい。

発掘調査により後方部北西辺の中央から南に偏った位置に、西外方に向い右に斜行する土橋が確認されている点は重要である。墳丘の裾とされる部分から土橋外方端までは約8m、最も狭い部分での幅は検出面で約2mを測る。

周溝からは甕や器台のほか、焼成前に底部穿孔された所謂「茶臼山型」と呼ばれる畿内系の二重口縁壺や口縁部に駿河地方の大廓式の特徴を持つ壺が出土している。

3 土橋が方台部の中央を外れたり斜行したりする理由

方形周溝墓の周溝を掘り残して取り付けられた土橋が斜行し、あるいは方台部辺中央部を避けて設置されるのはひとり終塚のみに見られるものでなく県下の大形の周溝墓あるいは前方後方墳にも見られることを前節で例示した。

北武藏域の方形周溝墓は方台部四隅部分の溝を掘り残した形態が導入時点での定型化した形態であった。この掘り残した部分は四隅の角の方台部辺の交点に正確に設置された結果、方台部各辺とは斜行する形態となっている。この部分は被葬者の埋葬に当たる人々が方台部に至りまた外部に戻るための葬送の通路として機能していたことに間違いない。

やがて古墳出現期までに四隅の切れる周溝形態から全周する形態へ移行するに至って、なお土橋を何れかの辺の一か所に設置しなくてはならない状況があり、そこに、それまでの伝統に即した斜めの土橋が敷設された可能性を考えたい。中耕42号墓では方台部の西辺に対し斜めではなく、ほぼ直線的な土橋の形態の想定も可能であるが、その位置は南の角方向に偏った位置となり、方台部中央、言い換えれば埋葬施設に墳墓としての施設に外方から正対して出入りすることを憚る考えがあつてのことと思われる。

4 前方後方墳との関連

前方後方墳である諏訪山29号墳の後方部にも斜めの土橋を有することを紹介した。後方部の墳裾の中央を外した位置に墳丘から周溝を跨ぐ外方と連絡する土橋を設置しているのは、まさに終塚などの方形周溝墓に見られる、偏った位置に設置された斜行する土橋と共通する考えによるものと思われる。埼玉県域において前方後方墳の後方部で斜行する土橋が確認されているのは諏訪山29号墳1例のみであるが、このことから、終塚に見られる墳丘構造が前方後方墳の後方部に持ち込まれ、それに前方部が付設されて前方後方墳の構造が出来上がったのではないかとの推定が十分可能であり、類例の確認が待たれる。

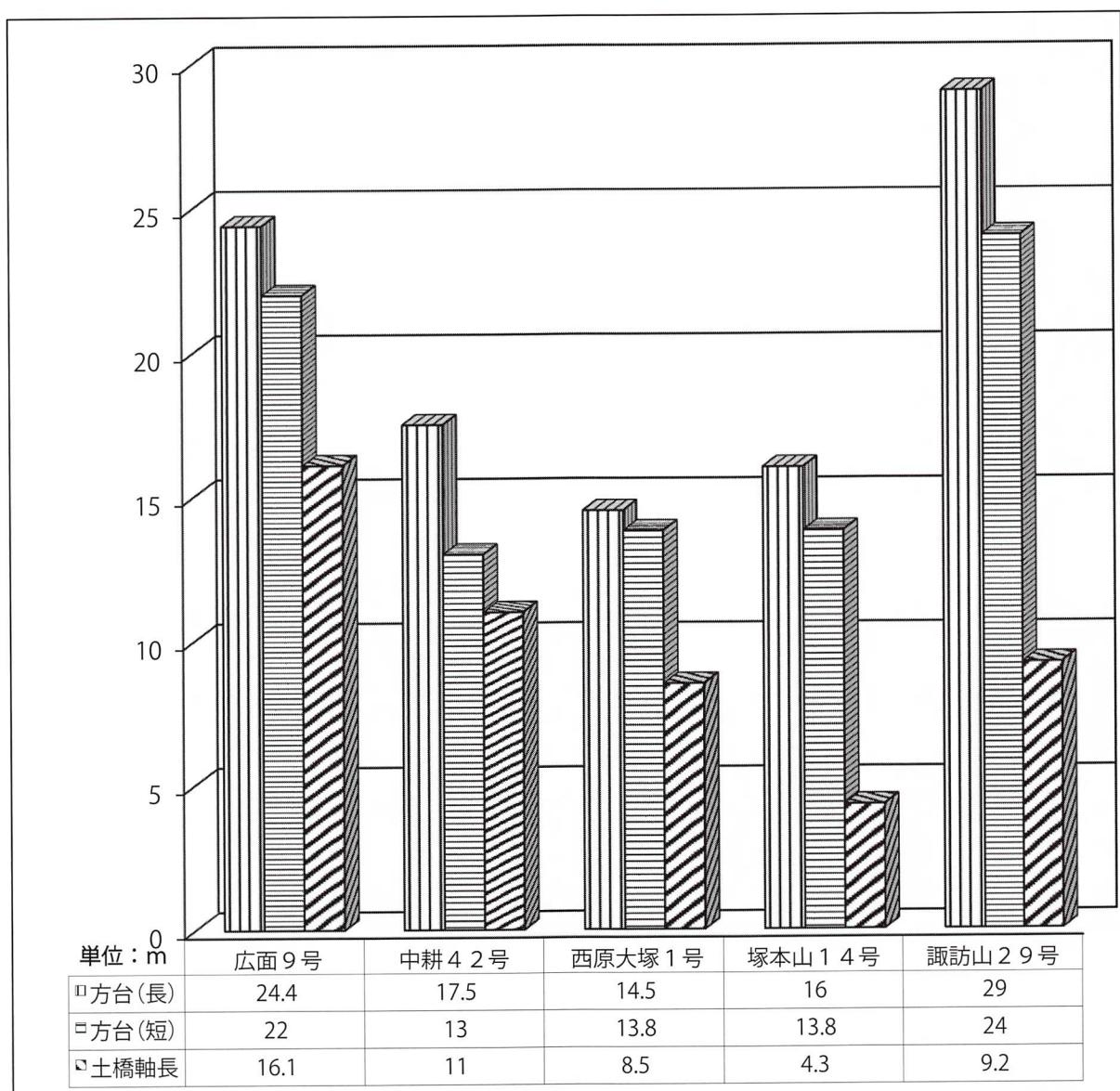
終塚との築造時期の前後関係の比較材料として、諏訪山29号墳にも共通の畿内系二重口縁の壺型土器がある。口縁部の外方に屈曲して開く部分の造作に諏訪山29号墳のものに形骸化が認められるが両者とも焼成後の穿孔を有しており前後関係を判断するのは難しい。しかし、弥生時代から古墳時代社会への移行期には、在地の集団間でも集権化の流れがあり、その内で墳墓の時系列的変遷を考えるなら、すでに近江～東海地方で出現していた前方後方墳を受容して当地で構築するに当たり、後方部にこの地域で発展してきた周溝墓、しかも集団の中では労働力を集約できる立場にある人物の周溝墓の形態である斜行土橋を有する大形の周溝墓の方台部を組み込んだものとして前後関係を考えるのが自然であろう。こうした解釈が許されるならば、終

第1表 規模の比較

(単位: m)

名 称	方台(長)	方台(短)	土橋軸長	偏差 ※	備 考
広面9号	24.4	22	16.1	1.53	
中耕42号	17.5	13	11	0.66	土橋軸位置・軸長は推定
西原大塚1号	14.5	13.8	8.5	1.06	土橋軸長は推定
塚本山14号	16	13.8	4.3	1.08	
諏訪山29号	29	24	9.2	0.79	後方部(=方台部) 短軸長は推定

※ 偏差は土橋の取り付く方台部中央から外方に向かい土橋主軸が右に偏る場合は1より大、左に偏る場合は1より小となる。



塚やこれに類する大形方形周溝墓の斜行する土橋や偏った位置に取り付けられた土橋は前方後方墳の後方部の原型であり、前方部へ発展したものではないということになる。

まとめにかえて

埼玉県下屈指の規模の周溝墓である柊塚はその斜行土橋の共通性を鍵にして出現期の前方後方墳の後方部そのもののベースとなった可能性を述べた。柊塚はまさに比企地方に首長権力の発生を示す前方後方墳が出現する直前段階の記念物的周溝墓といえるのだろう。

本稿で取り扱った周溝墓と古墳の規模を第1表で比較した。土橋の長短や取り付く位置の偏差はいろいろで、土橋の向きや方角の指向性ははっきりとは認められないが、こうした全周系周溝で土橋を持つ大形周溝墓の次世代の被葬者こそが前方後方墳の被葬者に昇華していったと考えられる。

県内の古墳出現期の首長墳の形態は前方後方墳である。その出現のメカニズムや出現以後に築造された方形周溝墓との相互の影響は決して単純ではないと思われる。近年の調査例の増加もあり、こうした点については、調査成果である報告書の刊行を待ち別稿で検討してみたい。

【註】

- (1) 古墳出現期の方形墳墓の生成と発展については田中新史氏の集成と分析がある(田中1984)。同氏の分類では柊塚はBⅡに該当しよう。また、伊藤敏行氏の分類ではFタイプとなる(伊藤1986・1988)。いずれにせよ柊塚の土橋を含めた平面形態は「前方後方形」とはきちんと峻別すべきであると考えている。
- (2) 現在のところ西原大塚1号墓と最も近い前方後方墳はふじみ野市(旧上福岡市)滝に所在する権現山2号墳で、直線距離で約7kmである。(上福岡市教育委員会1999)

【文献】

- 伊藤 敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集Ⅳ』 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤 敏行 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集Ⅵ』 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 上福岡市 1999 「上福岡貝塚と権現山遺跡群」『上福岡市史資料編第1巻』
- 佐々木保俊ほか 2000 『西原大塚遺跡第45地点』 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊ほか 2009 『西原大塚遺跡』 志木市遺跡調査会
- 杉崎 茂樹ほか 1993 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 中耕遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 新史 1984 「出現期古墳の理解と展望」『古代第77号』 早稲田大学考古学会
- 増田 逸郎ほか 1977 『埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 塚本山古墳群』 埼玉県教育委員会
- 増田 逸郎ほか 1986 「鷺山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 増田 逸郎ほか 1986 「諫訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 村田 健二ほか 1990 『埼玉県埋蔵文化財長蛇事業団報告書第89集 広面遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

いわゆる「踊る埴輪」の戦前の絵葉書から

水口由紀子

はじめに

平成26年度企画展「ハニワの世界」では人物埴輪を中心に取り上げ、種類や役割等について紹介した。また、全体の展示構成とは別に、コラム展示と称して、「埴輪の男女の見分け方」などの小コーナーも設けた。その一つ「埼玉出土の人気者」というコラムで展示した一枚の戦前の絵葉書について今回は紹介したい。

その絵葉書はその表紙から昭和5年10月に帝室博物館で開催された「埴輪特別展覧会」に際して発行されたもので、通称「踊る埴輪」⁽¹⁾の絵葉書である（写真1・2）。元は5枚1組であったが、残念ながら入手した時点ではこの絵葉書1枚のみであった。

まず、気になった点は昭和5年という発行年である。なぜなら、これは「踊る埴輪」が発見された年であるからだ。

どのような経緯でこの特別展覧会が開催されたのか、どのような埴輪と一緒に展示されたのか等、気になり資料調査を始めたところ、いくつかの点が明らかになった。

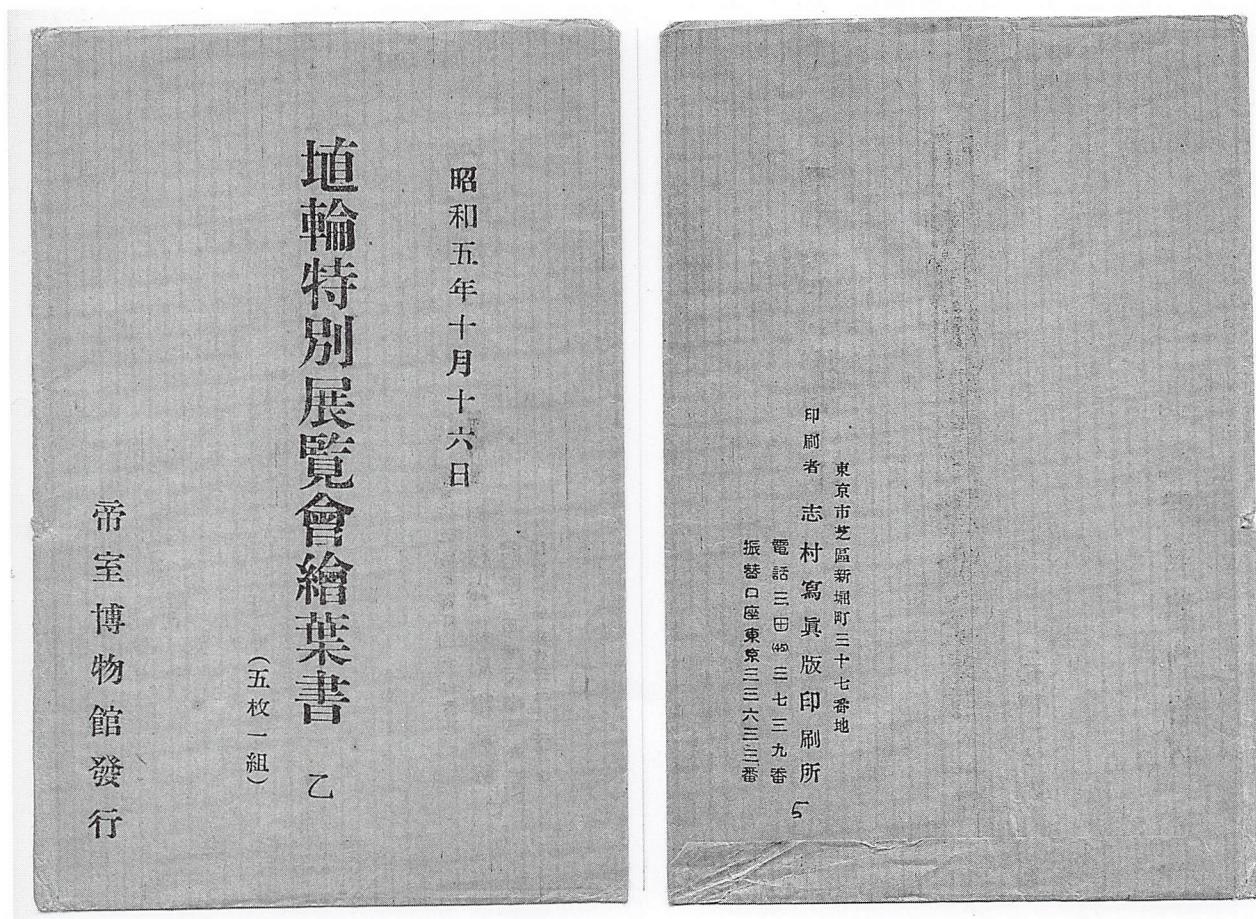


写真1 埴輪特別展覧会絵葉書表紙（表・裏）

1 いわゆる「踊る埴輪」について

まず、いわゆる「踊る埴輪」について、簡単に紹介したい。

片手を上げ、もう一方の手は胸（または腰）にあて、いかにも踊っているような仕草に見えることから後藤守一氏によって、2体の埴輪を一組と考え、「踊る男女像」と名づけられた。顔、首、体をきちんと表現する埴輪が主流なのに対して、この埴輪は全体がかなりデフォルメされている。目と口を丸くくり抜き、声を出しながら踊っているように見える。埴輪の目・口は横長にくり抜かれることが多く、それと比較してもこの埴輪の表情は一風変わっており、印象深い。

現在は東京国立博物館の平成館で常設展示されており、博物館のキャラクター「トーハクくん／本名：東 博」^{あずま ひろし}にもなっている。また、埴輪の概説書には必ずと言ってよいほど掲載されており、この一組の埴輪は広く知られている代表的な埴輪の一つである。それにもかかわらず、この埴輪が埼玉県から出土したものであることは意外と知られていない。その出土の経緯や出土地については亀井正道氏の論考にくわしい（亀井1977）。それによると、昭和5年3月21日に埼玉県大里郡小原村（現熊谷市）にある野原古墳群の中の一つの古墳から出土した。

この埴輪が帝室博物館（現東京国立博物館）の収蔵品となった経緯は、まず、遺失物法など、当時の埋蔵物発見の手続きについて触れなければ理解できないであろう。

明治32年（1899）に遺失物法が施行され、遺失物、埋蔵物その他の占有を離れた物は警察署

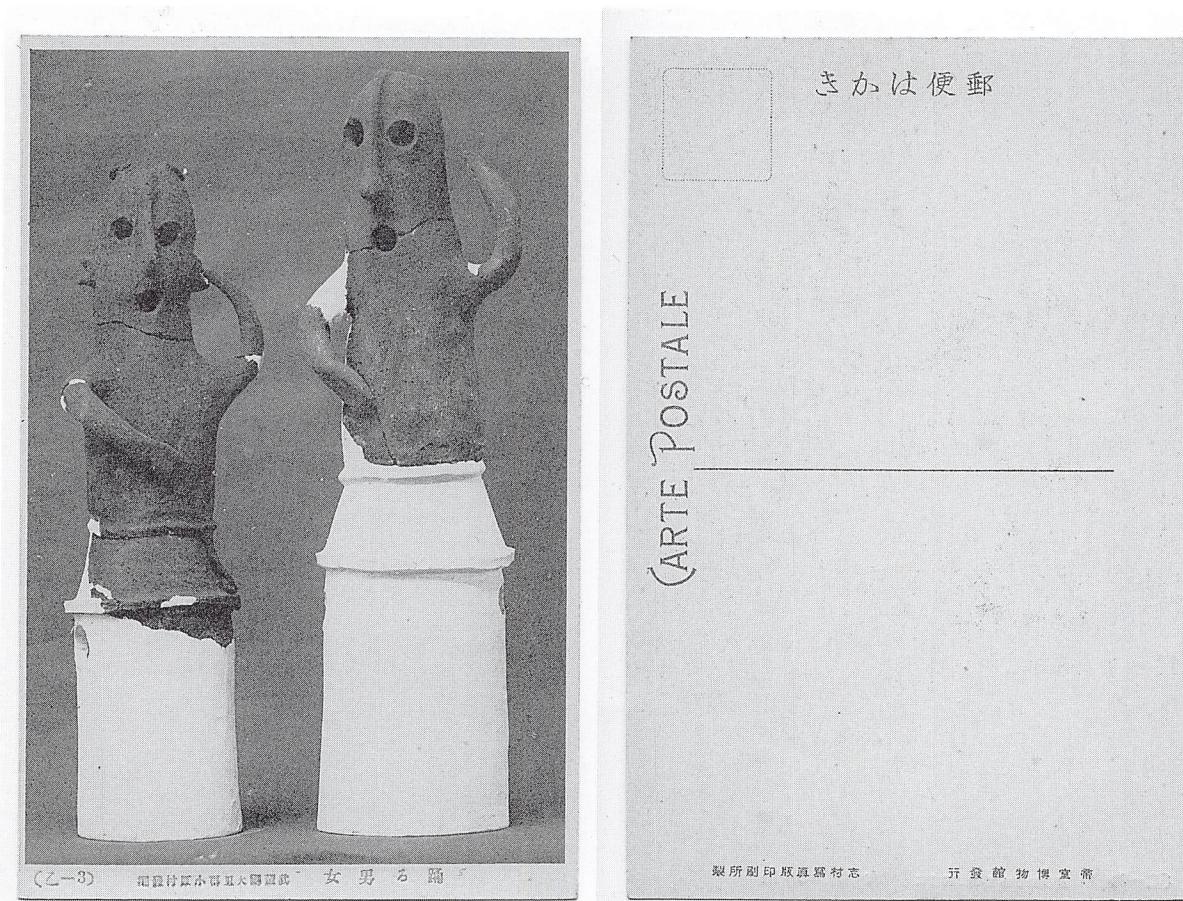


写真2 塩輪特別展覧会絵葉書（表・裏）

に届け出ことになった。

これに関連して、内務省は「学術技芸若ハ考古ノ資料トナルヘキ埋蔵物取扱ニ関スル付訓令」を発して、以下のように取扱いを定めた。

①「古墳関係品其ノ他学術技芸若ハ考古の資料」となるべきものである場合は宮内省へ通知する。

②「石器時代ノ遺物」である時は東京帝国大学へ通知する。

これによって、宮内省と東京帝国大学が必要と判断したものは、保有できるような道筋をつけた。戦前に出土した著名な考古資料の多くが、今日の宮内庁や東京国立博物館または東京大学などで所蔵されているのはこのためである⁽²⁾。

また、天皇陵の比定と関連するため、古墳の発見に関しては早くから取り扱いが整えられた。明治7年太政官達「古墳発見ノ節届出方」、明治13年宮内省達「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」、明治34年内務省通牒「古墳発掘手続ノ件依命通牒」など。

この埴輪の場合は古墳からの出土品であったため、まず宮内省へ通知された。しかし、出土した古墳が陵墓ではないという理由から、この案件は帝室博物館へ転送された。この埴輪以外に馬形埴輪や男性埴輪や勾玉、鉄製品なども一緒に出土した。協議を重ねた結果、武人埴輪1点を除き、最終的に帝室博物館が購入した⁽³⁾。埼玉県が発見者の発掘物売却申請書を帝室博物館へ回送したのは昭和6年6月付けであった（亀井1977）。

出土地について、亀井氏は当時の記録類を検討した結果、「小原村宮脇108番地」とするのが正しいようであるとされた。

しかし、その後、江南町史編纂過程の調査によって、発見時の目撃者の証言や地割図、さらに昭和35年の航空写真に残るソイルマークから、出土地は「大字野原字宮脇107番」と「大字野原字境田24番」であることが確定された（江南1995）。

また、この埴輪は開墾中に偶然出土したものであるが、その場所で昭和37年にはゴルフ場に関連した採土工事に伴い、発掘調査が行われた。その結果、この埴輪が出土した古墳は全長約40m、高さ約5m、後円部径約16mの前方後円墳であることが判明し、「野原古墳」と名付けられた。

2 昭和5年「埴輪特別展覧会」について

この絵葉書の図紙には「昭和5年10月16日」と書かれている。この展覧会の目録が、東京国立博物館の資料館に収蔵されていないか調べたが、残念ながらなかった。国立国会図書館サーチで検索したところ奈良県立図書情報館に収蔵されていることが確認できた。遠方のため、目録の資料調査を半ば諦めかけていたとき、インターネットの古本屋のサイトを検索したところ、1冊だけ奇跡的に出ていたので、さっそく入手した（写真3）。

縦約19cm、横約13cm、厚さ約5mmで、四六判の大きさである。本文は30ページあり、最後に写真図版が19枚ついている。奥付によると昭和5年10月11日印刷、同年同月16日発行、定価25銭、帝室博物館が発行者で、印刷所は鈴木印刷所である。

展覧会の開催期間は昭和5年10月16日から30日まで、展示構成は第1表のとおりである。

第1表 昭和5年 帝室博物館 塗輪特別展覧会 展示資料一覧（1）

室	画	展示資料名	出土地	所有者・写真図版番号	写真 図版
第1室		(群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳出土品すべて)			
	第1画	1 堅魚木を上げた倉屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		1
		2 網代をのせた倉屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		2
		3 納屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
	第2画	4 寄棟造の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		5 校倉式の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		6 校倉式の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		7 未詳埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
	第3画	8 机形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		3
		9 笠形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		10 笠形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		11 高環形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		12 鶏	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
		13 驚形埴輪破片	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		
	第4画	(茶臼山古墳の木炭櫛の復元展示)			
第2室		(土偶陳列)			
	第1画	14 帯を結び重ねた男子	茨城県猿島郡新郷村大字中田町発掘		4
		15 懐頭を被った男子	埼玉県北足立郡川田谷村八幡原発掘		
		16 白玉の頸玉を纏いた男子	茨城県猿島郡森戸村大字百戸発掘		
		17 農夫の一群	群馬県佐波郡殖蓮村字権現山発掘		
		18 農夫の一群	群馬県佐波郡殖蓮村字権現山発掘		
		19 太鼓をうつ男子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		5
		20 壺(缶か)を叩く男子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		
		21 跪座の男子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	
		22 革甲着用男子	群馬県群馬郡岩鼻火薬製造所構内発掘		
		23 桂甲着用男子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘		6
		24 弓を執る武装男子	栃木県安蘇郡犬伏町大字犬伏発掘		
		25 楯を樹てゐる武装男子	熊本県八代郡野津村発掘		
	第2画	26 柄に手をかけてゐる武装男子	群馬県群馬郡箕輪町大字上芝発掘		7
		27 甲衣を右袴に著けた男子	群馬県新田郡世良田村大字世良田発掘	和田千吉氏蔵	
		28 天冠を被った武装男子	群馬県佐波郡三郷村波志江発掘	柴田常恵氏蔵	
		29 頭形の冑を被る男子	埼玉県児玉郡十條村発掘		8
		30 楯を前にする男子	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘		
		31 二合刀子を下げてゐる男子	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘		
		32 結髪して美豆良する土偶	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘		
		33 長衣を放り着た女子	栃木県河内郡雀宮村大字雀宮宿発掘		9
		34 瓶を手にする女子	群馬県佐波郡赤堀村大字下觸発掘		
		35 坯を捧げる女子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	
		36 裂縫様のものをかけた女子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		
		37 壺を頭にのせて運ぶ女	埼玉県児玉郡丹庄村大字閑口発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	10
		38 掛帶をかけた女子	群馬県群馬郡箕輪町大字上芝発掘		
第3室		(動物・器物及び家の埴輪類)			
	第1画	39 飾馬	群馬県佐波郡赤堀村大字下觸発掘		
		40 面繫だけの馬	埼玉県比企郡大谷町字花ノ木発掘	根岸伴七氏蔵	
		41 牛	奈良県磯城郡田原本町字東羽子田発掘	田原本町出品	
		42 猪	千葉県東葛飾郡我孫子町発掘		
		43 犬	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		11
		44 犬	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘		
		45 猿	茨城県行方郡立花村大字沖洲発掘	中澤澄男氏出品	
		46 鳩	埼玉県児玉郡青柳村発掘		
		47 水鳥	大阪府南河内郡古市村應神天皇陵発掘		
		48 鶏二羽	茨城県那珂郡平磯町磯前発掘	星一雄氏蔵	
		49 甲	宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘	遠藤源七氏蔵	12
		50 甲	宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘	遠藤源七氏蔵	
		51 楯	奈良県某陵発掘		

第1表 昭和5年 帝室博物館 墳輪特別展覧会 展示資料一覧（2）

室	函	展示資料名	出土地	所有者・写真図版番号	写真図版
第2室	52 鞄	群馬県新田郡強戸村大字西長岡発掘			
	53 鞄	群馬県佐波郡植蓮村大字八寸発掘			13
	54 椅子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘			14
	55 寄棟造の倉屋	茨城県多賀郡松原村大字高萩発掘	東京帝国大学人類学教室蔵		
	56 寄棟造の倉屋	茨城県多賀郡松原村大字高萩発掘	東京帝国大学人類学教室蔵		
	57 大丸棟の家	奈良県磯城郡城島村大字外山発掘			15
	58 二階建の家	兵庫県飾磨郡氷上村大字白國人見貝塚発掘	和田千吉氏蔵		
	59 煙出孔のある家	宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘			
	60 板格子でおさへた屋根	群馬県多野郡美土里村大字白石発掘	東京帝国大学人類学教室蔵		
	61 切妻の屋根	埼玉県大里郡畠山村発掘			
	62 切妻の屋根	群馬県新田郡九合村発掘			
	63 煙筒を立てた屋根	群馬県多野郡本郷村発掘			
	64 串を棟上に立てた屋根	群馬県佐波郡三合村波志江発掘	柴田常恵氏蔵		16
	(人物埴輪概説)				
第4室	65 衣褲を着けた男子	埼玉県比企郡大谷村字花ノ木発掘			
	66 短甲をつけた男子	武藏国北埼玉郡上中條村発掘	根津（岸カ）伴七氏蔵		17
	65（ママ）五鈴をさげた女子	群馬県佐波郡赤堀村大字下觸発掘			
	68 飾馬	埼玉県北埼玉郡上中條村発掘			18
第3室	69 武装男子一對	栃木県下都賀郡南犬飼村大字安塚発掘			
	70 踊る男女	埼玉県大里郡小原村大字野原発掘			19
第4函	71 土偶及び馬	埼玉県大里郡大寄村大字上敷免発掘埴輪	(計7点展示)		

※（　）書きは筆者が加筆したもの

第1室から第4室に分けて、合計79点の埴輪を展示する規模の大きな展示であったことがわかる。「踊る埴輪」は第4室の第3函に資料70「踊る男女」として展示された。

第4室の展示趣旨は目録によると「埴輪の中で、圓筒を除いては土偶が最も著しい。土偶は其の起源・意義等にも考究すべき問題が残されてゐるが、しかし、これを服飾史の立場から見るのが、最も趣味あることであろう。土中してゐる遺物だけでは、上古時代の服飾を明らかにすることが困難である。とはいへ、一方、埴輪は何故に、またどんな風に樹てられたか、外國に何か関係があるかといふ様な問題にも注意を怠つてはならぬ。此の室は埴輪概説という様な意味合いで陳列されている。」とある。

また、第3函の冒頭には「埴輪土偶は、男女とか、全く相似た姿態の男子とかいふ様に、対をなすものをならべることが多かったらしい。今、ここに其の二例を陳列する。」とある。

そして、「踊る男女」は「その作雅拙（4）にして怪奇の風があり、普通の埴輪と趣を異にするものがあるが、歌舞に興する男女の姿態を備えてゐる。」と解説されている。

現在、「土偶」は縄文時代から弥生時代にかけての人物または動物をかたどった土製品を指すが、明治大正時代は人物埴輪も「土偶」または「埴輪土偶」と呼ばれていた（水野・小林1959）。昭和初期もまだ同じ呼称が使用されていたことがわかる。

目録の図版19が「踊る埴輪」であるが、絵葉書のアングルと少し異なっており、2体とも正面を向いている。欠損した円筒部は石膏によって復元されているが、着色はされていない（写真1・写真4）。

この他に何か情報が得られないか調査したところ、昭和13年に帝室博物館が刊行した『帝室

博物館略史』に大正14年から昭和12年までの展示活動の記録が掲載されていた。

それによると昭和5年には特別展覧会が2回開催されており、4月に浮世絵、10月が埴輪をテーマとしたものであった。また、目録と絵葉書が刊行されていたことも記されていた。絵葉書は二組があるので、本稿で紹介している絵葉書と異なる内容の絵葉書が刊行されていたことが判明した。今回紹介している図紙に「乙」とあるので、「甲」がもう一組の絵葉書であると思われる。

また、講演会の記録の中では、昭和5年10月18日に2本の講演が行われたことが記されている。

・上古の住宅 後藤守一

・埴輪に関する二三の考察 文学博士 濱田耕作

前者には埴輪という文言は見えないが、埴輪特別展覧会の会期中であり、展示資料に家形埴輪が複数含まれているので、おそらく埴輪にも言及した内容であったと推測される。

この展覧会が開催された場所について次に見てみたい。

昭和5年よりも遡るが、大正12年の関東大震災は帝室博物館にも大きな影響があった。すなわち、本館を含む大小4つあった陳列館の大半を失ったのである。新しい本館は昭和13年にやっと開館に漕ぎつけることができた。それでは、その15年間はどのようにして展示活動を行っていたのであろうか。

『帝室博物館略史』をみると、表慶館だけは震災の影響を唯一受けなかったので、新本館が開館するまではここだけで陳列を行わざるを得なかったと記されている。

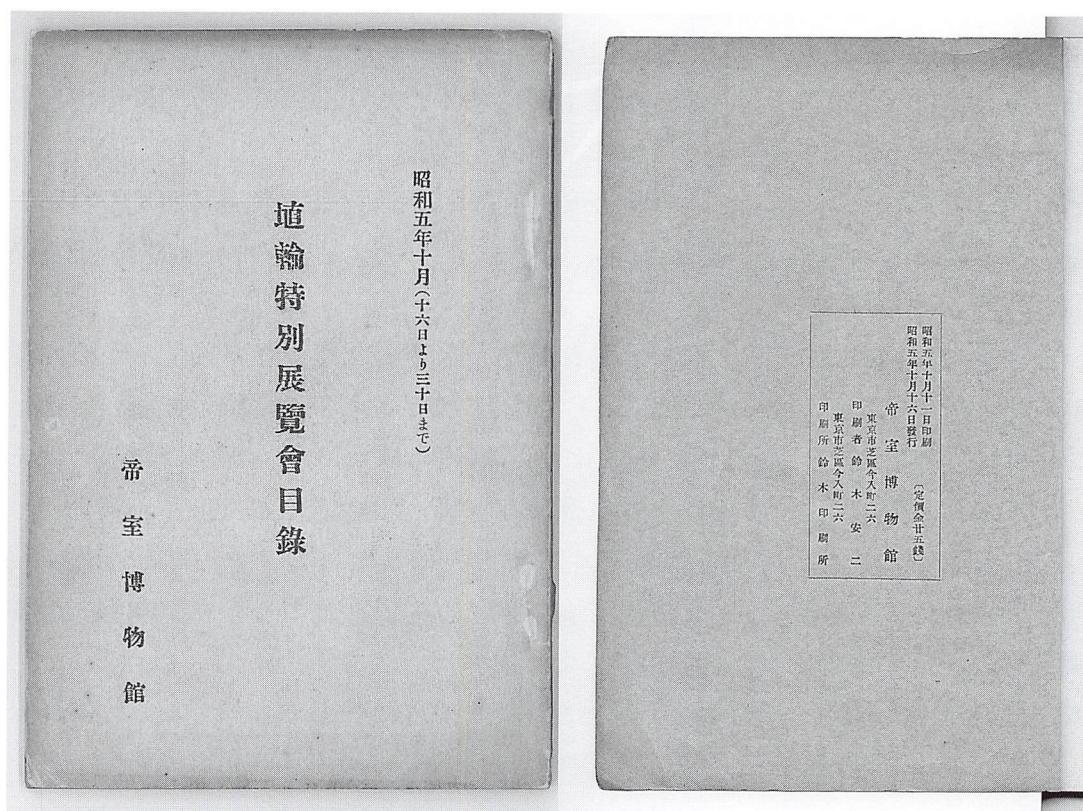


写真3 墓輪特別展覽會目錄（表紙・奥書）

表慶館は明治33年に皇太子（後の大正天皇）の御成婚が決まつたことの奉祝記念として建設計画が始まった。それは、「東宮御慶事奉祝会」を結成し、会員の出資金によって東京市内に美術館を建設し、奉獻するという計画であった。会員は7,307名、会員外の贊助者15,890名、合計23,197名（団体等は1名として計上）に及んだ。設計は片山東熊に依頼し、耐震対策を十分に配慮して明治34年に着工した。開館したのは明治42年5月であった。

新本館が開館するまでの表慶館での陳列配置は『東京国立博物館百年史』（東京国立博物館1973）にくわしい。それによると、特別展覧会は2階の第1室から第4室までの平常陳列を撤去して実施していたとある。

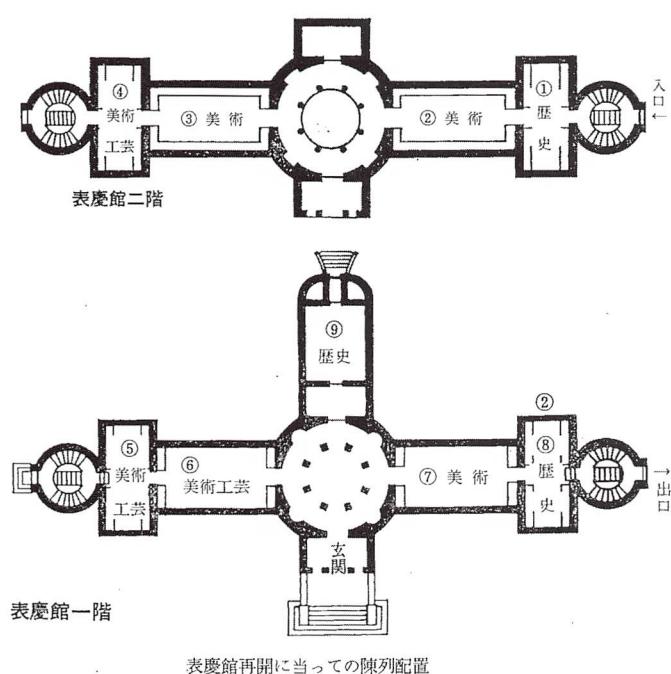
よって、本稿が取り上げている「踊る埴輪」は表慶館の2階第4室に展示されたと考えられる。

まとめ

1枚の戦前の絵葉書の資料調査から興味深いことが明らかになった。

この絵葉書は、「踊る埴輪」が偶然発見された昭和5年に、帝室博物館で開催された「埴輪特別展覧会」に伴って発行されたものである。この展覧会は目録・絵葉書の発行、講演会の開催などが伴う規模の大きなものであった。また、当時は関東大震災からの復旧がなされていないため、この展覧会は表慶館の2階で開催された。

また、何よりも重要なことはこの特別展覧会が「踊る埴輪」が博物館施設で初めて一般公開された展示会であると推定されることであろう。そして、この絵葉書は「踊る埴輪」の絵葉書としては最古のものである可能性が高い。



第1図 表慶館の平面図（東京国立博物館1973より）
(関東大震災後、新本館が開館するまでの陳列配置)



写真4 『埴輪特別展覧会目録』
図版第19

【註】

(1) 「踊る埴輪」については、踊っているのではなく、馬をひいている所作なのではないかという指摘がされて久しい（宮崎1990、塚田1992など）。

本稿では通称としてカッコ書きでいわゆる「踊る埴輪」と表記する。

現在も東京国立博物館の常設展示では「埴輪 踊る人々」というキャプションで展示されている。キャプションには何の説明書きもないで、一般の観覧者は踊っている埴輪だと思ってこの埴輪を見ているものと思われる。

また、東京国立博物館のホームページ内にあるコレクション－名品ギャラリーには「踊る男女とも呼ばれる特徴的な人物埴輪である。（一中略一）おそらく殯などの葬送の場における歌舞の姿を写したものともみられる。」と解説が加えられている。

学術的な成果がキャプションに反映されるべきではなかろうか。

(2) 東京国立博物館の前身である帝室博物館は宮内省の管轄下にあった。

(3) 武人埴輪は発見者に返還された後、現在は國學院大學の所蔵となっている。

(4) 「稚拙」の誤りか。

【引用・参考文献】

尾谷雅比古 2006 「大師山古墳の発見と顕彰」 桃山学院大学総合研究所紀要 第31号 第3号

亀井 正道 1977 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」 MUSEUM No.310 東京国立博物館

江南町 1995 「第5章 古墳時代の遺跡 野原古墳群」『江南町史』 資料編1考古

塚田 良道 1992 「鷹匠と馬銅」『考古学と生活文化』同志社大学（『人物埴輪の文化史的研究』2007 雄山閣に再録）

帝室博物館 1938 『帝室博物館略史』

東京国立博物館 1973 『東京国立博物館百年史』

水野清一・小林行雄 1959 『図解 考古学辞典』 創元新社

宮崎由利江 1990 「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」 古代第90号

出土遺物を活用した出張授業の実践

西田 真吾・小峰 俊章

1 はじめに

教育基本法や学校教育法、学習指導要領において「伝統や文化の尊重」が重視され、博物館などの教育機関との連携はさらにクローズアップされている。小学校学習指導要領社会科の「指導計画の作成と各学年の内容の取扱い」では、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」と記されている。博物館の素材、人材を活用することにより、学びが広がり、深まり、学びを豊かにすることにつながる。

一方で学校では、学校行事の精選がなされ、新たに校外行事を増やすことは難しい状況にある。そこで、博物館の側から外に出ていく出張授業のような、いわゆる「アウトリーチ活動」が必要とされている。学校にとっては、博物館の資料や学芸員に、教室に居ながらにして出会うことができるよさがある。博物館が新たな利用者を獲得するためにも、様々なアウトリーチ活動を試みる必要がある。

当館では、昨年度より出張授業を開始し、社会科・総合的な学習の時間での取組を行った。本事業を通して当館の活動をより多くの学校に知ってもらい、連携を深めるとともに、児童生徒の郷土の歴史に対する興味・関心を高めるようにすることがねらいである。小学校社会科の古墳時代の学習で「遺物」をテーマとした授業展開は例が少ないが、以下の実践記録の通り、児童が古墳時代に興味・関心をもち、理解するための一つの切り口として参考になるのではないかと考える。

2 出張授業に向けて

(1) 実施校の募集・決定

対象学校の選定にあたっては、4月当初に県内北部地域（秩父地方を除く）、東部地域（久喜市以北）の平成26年度埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用事業「古代から教室へのメッセージ」に選考されなかった小学校50校に照会をした。全県一斉に募集をすることは混乱につながると考え、地域を限定しその中でこの事業に関心の高い学校に対象を絞った。

募集にあたり、平成26年3月に行われた上記「古代から教室へのメッセージ」事業の指導委員会（県教育局生涯学習文化財課・各教育事務所・埼玉県埋蔵文化財調査事業団）に出席し、平成26年度も引き続き出張授業を実施すること、募集地域、対象学校について説明をした。4月末日の締め切りまでに14校の応募があった。

本年度の出張授業は以下の通り実施した。

	日時	学校名	学年・科目	人数
1	5月27日	美里町立松久小学校	6学年・社会科	42人
2	5月28日	加須市立北川辺東小学校	6学年・社会科	37人
3	5月29日	深谷市立幡羅小学校	6学年・社会科	96人
4	5月30日	羽生市立羽生北小学校	6学年・社会科	87人
5	6月3日	熊谷市立佐谷田小学校	6学年・社会科	57人
6	6月5日	加須市立田ヶ谷小学校	6学年・社会科	29人
7	6月9日	深谷市立川本北小学校	6学年・社会科	87人
8	6月11日	熊谷市立長井小学校	6学年・社会科	71人
9	6月17日	本庄市立藤田小学校	6学年・社会科	23人
10	6月20日	熊谷市立大麻生小学校	6学年・社会科	53人
11	6月27日	深谷市立深谷西小学校	6学年・社会科	106人
12	7月1日	行田市立東小学校	6学年・社会科	76人
13	7月2日	行田市立南小学校	6学年・社会科	58人
14	7月4日	久喜市立桜田小学校	6学年・社会科	84人
合 計 14校 30学級				906人

(2) 授業の構想

導入では、興味・関心を高め、児童相互の交流を促すために「縄文土器片」と「須恵器片」に触れ、どちらが時代の新しいものかを予想する場面を設定した。展開の場面も、解説中心の授業ではなく、児童の「知りたい」に答える授業をめざして構想した。本時の目標は「古墳や遺物などについて話を聞いたり、実際にさわったりすることを通して、古墳について関心を高めるとともに、古墳や遺物の特徴や役割について理解することができるようとする。」である。遺物に実際に触れ、そこで感じたことや疑問に思ったことを取り上げながら展開できるよう、遺物に触れたり、学芸員に質問したりする時間を十分に確保した。また、授業の対象を主に第6学年としているため、教科書に記載されている「金錯銘鉄剣」のレプリカを用意し解説をした。

各校とも当館の学芸員と広報・学習支援担当職員の2名が授業を行った。学芸員が主に遺物の解説をし、広報・学習支援担当職員が主に授業の進行をした。

(3) 使用資料の選定

実物資料は、古墳時代の代表的な遺物として「円筒埴輪」「人物埴輪」「動物埴輪」と「金錯銘鉄剣」のレプリカ（3Dプリンターで作成したもの）を用意した。選定の基準は、「学習内容と関わりのあるもの」、「児童の興味をひくもの」、「新たな発見や、なるほどと思うような事実を知ることができるもの」、などである。人物埴輪は半身と頭部の両方を用意した。男女の違いに気づくことができるようするために、頭部の人物埴輪は男女1組にした。動物埴輪は適度な大きさで、児童の興味をひく形をした猪形埴輪と水鳥形埴輪を選定した。

【使用資料】

- ・人物（馬銅）埴輪（伝・川本町舟山古墳）・人物（頭部）埴輪（本庄市生野山遺跡）
- ・円筒埴輪（杉戸町瓢箪塚古墳）・人物（頭部）埴輪（東松山市古凍根岸裏遺跡）
- ・動物（猪形）埴輪（鴻巣市新屋敷遺跡）・動物（水鳥形）埴輪（加須市小沼耕地遺跡）
- ・金錯名鉄剣レプリカ（当館蔵）

（4）実施校との打合せ

実施校に事前に訪問し、打合せを実施した。時間、人数、当日授業を行う教室（図工室・理科室等大きく、安定した机のある場所を希望）、資料の搬入口、搬入方法を確認した。各校で先生方の授業への要望を伺ったところ、「実物にたくさん触れさせてあげたい」という意見がほとんどであった。この出張授業の重要なポイントは、「教室で受けられる」こととともに、「実物に触れる」ということである。打ち合わせをする中で、この点を重視して授業を展開すべきであるということを改めて感じた。

3 授業の実際

（1）授業の詳細

①土器片を観察する。

4～6人のグループにA縄文土器とB須恵器のかけらを用意した。「どちらが新しい時代のものか、実際に触ってみながら考えてみよう。」と投げかけた。2～3分後理由をつけて発表を行った。

この活動の目的は、①授業の導入で直接土器に触ることにより、興味・関心を高める、②グループで考えを話し合い、選んだ理由を発表しあう「思考・判断・表現」の場面とする、③外部の指導者による授業で硬くなりがちな雰囲気を和ませる、である。児童は活発に話し合いを進めていた。



【児童の反応】

- ・欠けている断面をみると、Aの方が荒く、Bの方がしっかりしているので、Bが新しい技術で作ったものだと思う。
- ・Aは、縄目模様があるので「縄文土器」だと思う。だからAの方が古い。
- ・Aの方が厚く、Bの方が薄いのでBのほうが新しいと思う。

大部分の児童がBの須恵器を新しいものと選び、これまで学んできたことを生かして理由を述べることができていた。

Bが「須恵器」であることとその特徴を伝え、この須恵器のように新しい技術が大陸から伝わってきた古墳時代の学習をするということを確認した。

②学習課題をつかむ

稲荷山古墳の航空写真を提示し、「古墳」・「遺物」について確認した。そして学習課題である「古墳時代の遺物についてくわしく知ろう。」を提示した。

③遺物について知り、観察する。

始めに、学芸員よりそれぞれの遺物の説明を行った。児童が遺物に触れたり観察したりする時間を十分確保するために、ここでの説明は、出土する場所、大まかな役割等必要最小限にした。

全体での説明の後、遺物はそれぞれの机に移動し、広報・学習支援担当職員から遺物に触れる際の注意点等を話した。

その後、15～20分程度児童が自由に各机に置かれた遺物を詳しく観察する時間とした。その際に、学芸員は各机をまわり、児童たちの質問に答えたり、遺物についての詳しい説明を加えたりした。



【児童の反応】

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 円筒埴輪 | ：穴があいているのはなぜだろう。縦じまの線は何だろう。 |
| 人物（馬子）埴輪 | ：なぜ手を挙げているのだろう。何をしているところだろう。 |
| 人物（頭部）埴輪 | ：どちらが男だろう。どうやって見分けるのだろう。 |
| 動物（猪形）埴輪 | ：たてがみがついているから馬だと思う。なぜいのししなのだろう。 |
| 動物（水鳥形） | ：何の鳥だろう。なぜ水鳥を古墳においたのだろう。 |
| 金錯銘鉄劍レプリカ | ：「ワカタケル」がかいてある。思ったよりも長い。
など |



④感想発表

全体の前で感想発表を行った。質問等が出た場合は、その場で学芸員が応答した。全員に知ってほしい内容についてはこちらから「～はどうでしたか」と投げかけ、知っている児童が答えることによって、全員がその内容を共有できるようにした。

⑤「埼玉古墳群」と「金錯銘鉄剣」についての紹介を聞く。

博物館には、他にも様々な埴輪があること、本物の「金錯銘鉄剣」があること、大型の古墳が整備され、登ったり、間近で見られたりすること等を広報・学習支援担当職員から話し、興味をもった児童は博物館や埼玉古墳群に来てさらに詳しく知ることができることを伝えた。

(2) 授業の展開

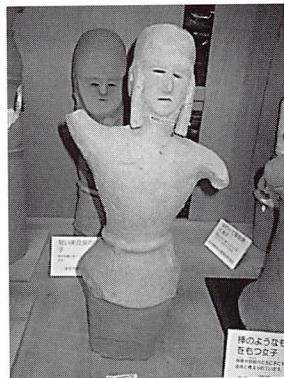
時間	学習活動・学習内容	発問・指示等	資料
10	<p>自己紹介</p> <p>1 土器片を観察する。 ○県内遺跡から出土した「縄文土器」、「須恵器」片を手に取り、その違いを観察する。 ・色、厚さ、時代の新旧等の違い</p>	<p>みんなの机の上に、作られた時代の違うAとBの2種類の土器片があります。どちらが時代の新しいものでしょうか。見たり、触ったりして考えてみてください。</p> <p>分かった人は手を挙げて下さい。(数名を指名)</p> <p>答えはBです。これは古墳時代につくられたもので「須恵器」と呼ばれています。</p> <p>みんなが発表してくれたように、薄くて硬い土器です。この作り方は中国大陸から伝わってきました。</p> <p>今から約1500年前の古墳時代には、各地にたくさんの古墳が作されました。(稻荷山古墳の写真掲示)</p> <p>古墳からは埴輪などたくさんのが出土します。これらを「遺物」と呼びます。</p> <p>今日は、みんなに古墳時代の遺物についてくわしく知ってもらいたいと思います。</p>	縄文土器片 須恵器片
	2 課題をつかむ	<p>古墳時代の遺物についてくわしく知ろう。</p>	

5	3 遺物について知り、観察する。 ○学芸員の紹介を聞き、遺物の役割や特徴について知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・人物埴輪、円筒埴輪などが古墳のどこで多く出土するか、またその役割について実物を示しながら紹介 (1) 人物埴輪 <ul style="list-style-type: none"> ・造り出しから出土する ・男か、女か (2) 円筒埴輪 <ul style="list-style-type: none"> ・底がない ・神聖な場所として区別 ・6000個が出土 (3) 動物埴輪 <ul style="list-style-type: none"> ・造り出しから出土 ・何の動物か (5) 金錯銘鉄剣 <ul style="list-style-type: none"> ・金の115文字が刻まれている ・100年に一度の大発見だった <p>では、遺物を近くで見たり、触れたりしてみます。約束があります。</p> <p>①すべて本物です。大切な文化財なので気を付けて触ってください。</p> <p>②持ち上げたり、べたべた触ったりしないで、優しく触ってください。</p> <p>③人物埴輪の顔はさわらないようにしてください。</p> <p>では、観察をしましょう。</p> <p>学芸員による紹介（回りながら）</p> <p>みんなが感じたことを発表してください。 (分かったことを交流し合う。 約5分)</p>	人物埴輪 円筒埴輪 動物埴輪 ↓ 教卓の上に紹介しながら置く ↓ 児童の机に運ぶ
25	○遺物を観察し、感想を発表し合う。	ワークシート	
5	4 まとめ ○「埼玉古墳群」と「金錯銘鉄剣」の紹介を聞く。 ・埼玉古墳群について ・国宝「金錯銘鉄剣」について	<p>(広報・学習支援担当による紹介)</p> <p>最後に埼玉古墳群と、国宝「金錯銘鉄剣」の紹介します。</p> <p>大型古墳が狭い範囲に9基もある、全国的に見ても珍しい古墳群です。この丸墓山古墳は、日本一大きな円墳で、映画「のぼうの城」でも有名になりました。この二子山古墳は、かつての武藏の国、今の埼玉、東京と神奈川県の一部で最も大きな古墳です。</p> <p>これは稻荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣です。教科書にも載っているので、教室に帰ったら見てください。これには115文字の金の文字が刻まれており、当時の様子を伝える貴重な史料であるため、国宝に指定されています。</p> <p>埼玉古墳群とさきたま史跡の博物館に来るとこれらを見ることができますので、みなさんも是非来てください。</p>	埼玉古墳群空撮 鉄剣レプリカ

(3) ワークシート

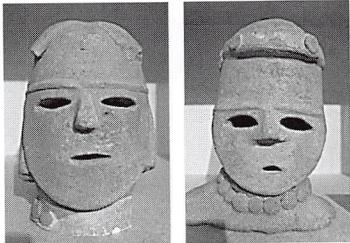
学芸員の話をメモしたり、さわった感想を書いたりしましょう。

6年 組 名前 ()



メモ・感想

じんぶつは に わ
人物埴輪



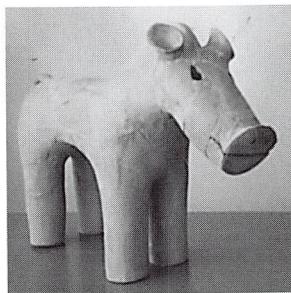
メモ・感想

男性の 女性の
はにわ はにわ
埴輪 埴輪



メモ・感想

えんとうは に わ
円筒埴輪



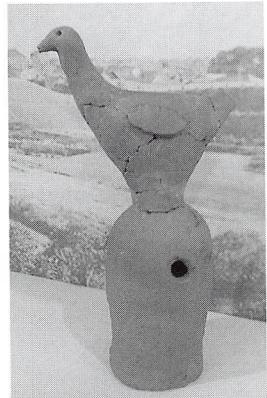
メモ・感想

どうぶつは に わ
動物埴輪



メモ・感想

きんさくめい
**金錯銘
鉄剣**



メモ・感想

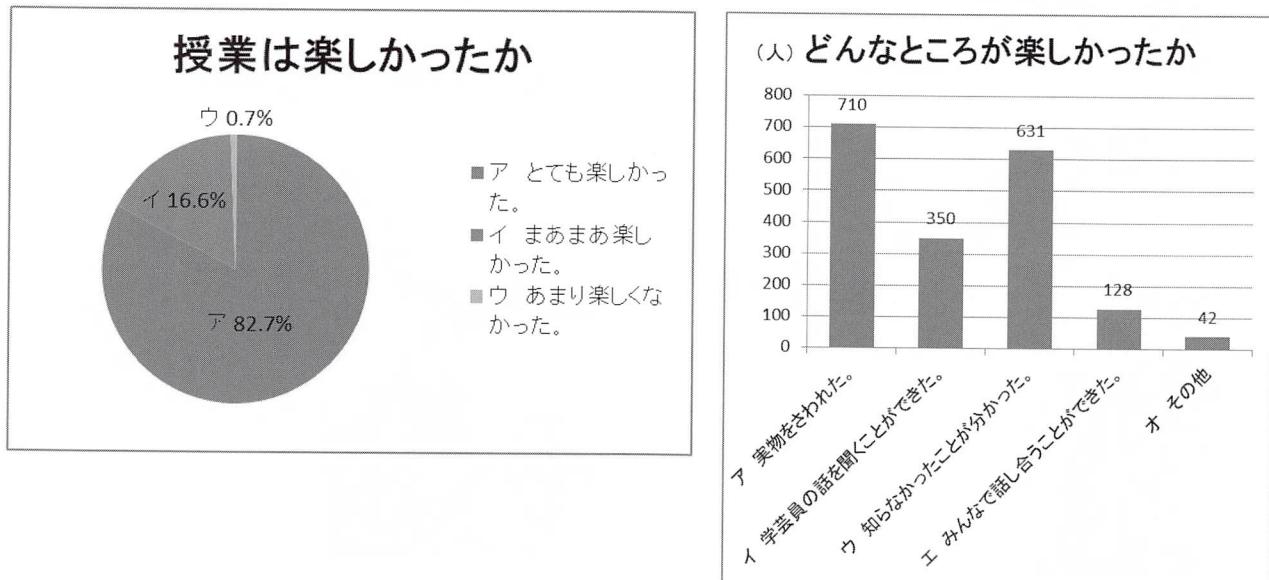
どうぶつは に わ
動物埴輪

4 アンケート結果

「授業は楽しかったか」という問い合わせに対して82.7%の児童が「とても楽しかった」と回答した。

「どんなところが楽しかったか」という問い合わせに対しては、「実物をさわれた。」と回答した児童が多かった。やはり、普段見ることができても、実物に触れる機会は少なく、新鮮に感じられたようである。また、「知らなかったことが分かった。」「学芸員の話を聞くことができた。」というように教科書等に書かれていらない詳しいことまで話を聞くことで、理解を深めることができたと考えられる。

その他感想の中には、「博物館で本物を見たくなった。」「歴史の授業が楽しくなった、好きになった。」と答えた児童もいた。本事業を通して、歴史に対する興味関心を高めることができたと考えられる。



5 今後の課題

実施期間について、5月下旬から7月上旬までの期間で募集でしたが、学校での古墳時代の学習が4月下旬から5月上旬にかけて行われるので、学校としてはなるべく近い時期に実施したいという希望がある。今後、新たな授業プログラムの開発や、3学期に5年生向けに実施するなどしていくことを検討している。

授業内容・使用遺物については、概ね今年度の内容で効果を挙げられたと考えられる。

しかし、もっと他の遺物を見たい、古墳時代の人々の生活の様子を知りたいという意見や、観察する時間を長くしてほしい、映像が見たいなどの要望もある。打ち合わせの際、それぞれの学校の要望を把握し、応えていくことにより、満足度の高い事業になるとを考えられる。

出張授業を受けたことで、古墳や埴輪などに興味をもってたくさんの児童が来館した。このような児童をさらに増やすことができるよう、事業の実施方法と授業の工夫・改善を進めていきたい。

博物館における文化体験学習の性格

—さきたま古代体験の実践を手掛かりにして—

向井 隆盛

1. はじめに

現在、日本の多くの博物館が、来館者に対して文化体験学習の場を提供している。これは、博物館利用の普及活動の一環である。

学校週5日制の施行、教育基本法の改正以後、博物館等によって行われる社会教育活動は、一層重要となった。人生において物心両面の豊かさが求められる今日、価値ある体験活動を提供することが、博物館等社会教育施設に求められている。このような教育改革の動向を受けて、博物館では調査・研究、展示といった従来の活動に加え、博物館利用の普及活動の充実を図ってきた。博物館等における普及活動の中心の1つが、体験学習の提供である。

博物館等における体験学習では、それぞれの館の特長に応じて、自然体験活動や文化体験活動が行われている。本稿では博物館等における文化体験活動に焦点をしぼり、その性格の一端を論ずる。その際、埼玉県立さきたま史跡の博物館で行われている文化体験活動「さきたま古代体験」の取り組みをとおして、具体的に述べる。

2. 博物館等における文化体験活動

博物館等における文化体験活動には、製作体験、鑑賞体験、実技体験などがある。製作体験は、組紐づくり体験や藍染め体験など、伝統的な技術を体験しながら物づくりに取り組む活動である。鑑賞体験は、鑑賞のポイント等について説明を受けながら、絵画や彫刻など作品に対して積極的な鑑賞を行う活動である。実技体験は、指導を受けながら能や狂言などの身体動作を体験する活動である。何れも、活動をとおして、利用者に歴史や文化に対する理解を深めてもらうことがねらいである。

それぞれの博物館は、調査研究の対象の価値を、利用者によりよい形で理解してもらうことを普及活動の使命としている。例えば、地域の民俗を調査研究する博物館があるとする。その地域で行われてきた伝統的な物作りの中から、藍染めの価値について利用者に伝えることは、その使命を果たすことにつながる。しかし、藍染めの全ての工程を体験してもらうことは、時間の確保の面でも、費用・人材の確保の面でも難しい。そこで、最も藍染めの価値をわかりやすく利用者に伝えられる工程を抽出し、提供することとなる。博物館等が提供する文化体験活動は、時間、場所、費用、人材確保などの様々な制約を受けることから、パッケージ型で提供されることが多い。パッケージ型とは、一定の時間内に、対象とする年齢層の利用者が適切な費用で体験を行い、文化的価値に触れて有意義な時間を過ごせるように組まれた完結型のプログラムである。また、同じ種類の体験活動でも、初級・中級・上級などの習熟の段階を設けて、リピーターの参加を促す取り組みもなされてきている。博物館では様々な角度から検討し、他館の取り組みも参考にしながら、文化体験活動の充実に努めている。

3. 「さきたま古代体験」の概要

さきたま史跡の博物館では、平成17年より文化体験学習「さきたま古代体験」の開発を行ってきた。これは、昭和59年に始まる「さきたま風土記の丘教室」より連なる文化体験学習を引き継ぐものである。初期の「さきたま風土記の丘教室」では、古墳公園の広場を利用して、埴輪作りが行われた。利用者は、古墳に囲まれた会場で、埴輪作りをとおして古代の人々の思いや願いについて追体験を試みることができた。現在は、「さきたま古代体験」へと事業が引き継がれ、まが玉、ガラス玉、縄文・弥生土器、貝輪、土偶、古代の布、土鈴・土笛の製作体験や、火おこし体験、古代米の栽培体験、古代の服の着装体験などが行われている。さきたま資料館・さきたま史跡の博物館の文化体験学習の開発は、博物館学芸員と学校の教員が連携して行われた経緯がある。これまで、学校の教員がさきたま資料館・さきたま史跡の博物館に主査や担当課長として赴任した時期は、3回である。博物館の普及活動が大きな転換期を迎える都度、博物館と学校の連携が強化されてきたといえる。

さきたま古代体験は、考古学の研究成果に基づき、古代の物作りの工程の一部を体験できるプログラムとなっている。利用者が、古墳の副葬品や埴輪・土器などの文化財に親しみ、古代の人々の生活について理解を深めたり、関心をもったりすることをねらいとしている。

さきたま古代体験の中でも、長期間継続して行われてきたプログラムに、「まが玉づくり」がある。埼玉古墳群の中心的な前方後円墳である稻荷山古墳からは、国宝のヒスイの勾玉が出土している。このプログラムでは、国宝の勾玉と同じ大きさ・形の勾玉を、滑石で製作する。古墳の代表的な副葬品である勾玉に興味をもってもらい、埼玉古墳群と郷土埼玉の歴史への理解と愛情を育てることがねらいである。

「まが玉づくり」の開発は、渡邊勤氏が、教員として初めてさきたま資料館に赴任した平成7年頃から行われてきている（渡邊1996）。平成7年に初めてまが玉づくり体験が行われたことが、渡邊氏の報告に記されている。193名の親子が参加し、勾玉に関する講義を受けた後、まが玉づくりを行った。当時のまが玉づくりは、紙やすりで削り、磨き、ドリルで孔を開け、紐を通して、ニスを塗り、首飾りとするという手順で行われた。これは、昭和59年より行われてきた「さきたま風土記の丘教室」の一環であった。また、平成8年には、まが玉づくりの出前授業を5校の学校で実施している。その後、まが玉づくりは、田村宣也氏、関口孝明氏の実践を経て、平成18年に開設された「さきたま体験工房」の事業へと引き継がれた。

平成25年に赴任した西田真吾氏は、ボランティアスタッフの更新に伴い、現在行われている指導方法を確立した。現在行われているまが玉づくりの基本的なプログラムは、このときに定められたものである。

現在、まが玉づくり体験は、1日4回、1回80分の時間設定で、博物館の開館日には毎日行われている。定員は40名である。学校団体等の参加も合わせると、平成25年度には、年間で5,127人の方が、まが玉づくりを行った。今年度も、引き続き多くの参加者があり、夏休みなどは連日満員の状態が続いた。

4. 「まが玉づくり」の内容と方法

(1) 「まが玉づくり」の内容

古代の勾玉についての詳細な研究は、河村好光氏（石川県立金沢商業高等学校教諭）によってなされている（河村2010）。河村氏は、本州諸島における勾玉の用法を「一連をなして身に纏う」としている。また、ヒスイ勾玉の出自は縄文玉にあり、碧玉管玉は大陸文化に連なると指摘している。ヒスイ勾玉が碧玉管玉に挟まれた一連の装身具の出土例は多く、埴輪にもその様子が見られる。さきたま史跡の博物館のまが玉づくり体験では、勾玉1つと管玉1つを組み合わせて、首飾りとしている。

また、古墳時代の勾玉作りの工程について、河村氏はつぎのように述べている。

厚さ4～5mmのカマボコ形の板状研磨品をまず作る。この腹部を抉り、背部を円弧状に磨いて概略の形を整え、穿孔後に仕上げ研磨を施して完成品とする。

まが玉づくり体験では、板状研磨品の腹部を抉り背部を円弧に近くした状態で材料を提供する。参加者は、穿孔、仕上げ研磨の順に作成を行っている。穿孔の方法としては片側穿孔とし、研磨においてはヤスリを用いる。古代においては、研磨に砥石を用いていたことが知られている。しかし、体験では、費用や材料の入手しやすさなどの条件よりヤスリを用いる。研磨するという動作に重点をおいた、本質的な追体験であると考える。

(2) 「まが玉づくり」の方法

「まが玉づくり」体験は次のように進められる。

①はじめのあいさつと金錯銘鉄剣の紹介

②まが玉の話

③まが玉のつくり方の説明

④まが玉づくり

・材料に形を写す

・紐を通す穴をあける

・まが玉の形に荒削りをする

・仕上げ磨きをする

・管玉と組み合わせて首飾りにする

⑤おわりのあいさつ

①では、まず、金錯銘鉄剣や稻荷山古墳の紹介をし、勾玉と墳古墳群のつながりを説明する。続いて②において、勾玉とは何かということを参加者と一緒に考えるとともに、古代の勾玉の作り方について説明する。その際、どの過程を取り上げて体験するのかということに触れるようにする。③では、およその作り方を説明し、難しい部分については製作途中で再度説明することを伝える。④では、博物館職員とボランティアスタッフの補助のもとで、参加者が勾玉づくりを行う。製作を終えたら、おわりのあいさつをし、終了とする。

5. 博物館で行われている文化体験活動の性格

博物館で行われている文化体験活動の性格について、次のようなことが言えると考える。

- ① 博物館の体験学習は、博物館の取り扱う分野の中で、それぞれの使命を果たす上で中心となる価値を利用者に伝えるために、製作や演技の一部を取り出して体験するプログラムとしている。
- ② 時間・場所・費用を適切な範囲で定め、比較的短時間・短期間で体験できるプログラムを設定している。
- ③ 指導に当たる職員やボランティアスタッフに対して研修を行い、博物館内部で技術の伝承を行っている。

その他、複数回の体験を重ね、参加者が段階的に技術を習得したり、季節に応じた体験ができるプログラムも存在する。さきたま史跡の博物館では、古代米を育てて、精米、炊飯までを年間4回のプログラムで体験する「古代米くらぶ」を行っている。また、「まが玉づくり」では、白色の滑石よりも硬い黒色の滑石でまが玉づくりを行う、上級者向けの案内もしている。しかし、学校教育とは異なり、博物館と利用者との接点は比較的短期間である。博物館の体験学習は、概ね①～③のような性格を有すると言える。

6. おわりに

本稿では、博物館における文化体験学習の性格について考察してきた。全国の博物館で積み重ねられてきた実践を収集し、分析することで、よりよい体験活動を生みだすことができるを考える。また、勾玉の製作は、滑石の研磨が活動の中心となる。我が国においては、古来から様々な形で「磨く」という動作が行われてきている。例えば、鏡、土器、水晶、ガラスなどの成形の過程においてである。さまたま古代体験のまが玉づくりを、「磨く」文化の1つとして大きく捉えていくことは、新たな価値を生むと考える。

参考文献

- 渡邊 勤 1996 「博物館と学校教育の連携」『調査研究報告』 第9号 埼玉県立さきたま資料館
河村 好光 2010 『倭の玉器』 青木書店

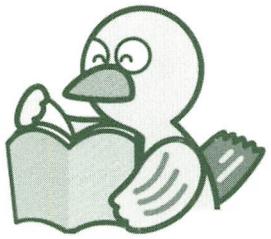
埼玉県立史跡の博物館紀要
第 8 号

平成27年3月27日 発行

発行 埼玉県立さきたま史跡の博物館
〒361-0025 埼玉県行田市大字埼玉4834
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館
〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町菅谷757
TEL0493-62-5896

印刷 巧和工芸印刷株式会社
〒333-0842 埼玉県川口市前川3-25-3



埼玉県のマスコット
コバトン